
Gerechtigkei ~ 正義のカタチ ~

数原琢彌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gerectigkait　　正義のカタチ

【Nコード】

N9902A

【作者名】

数原琢彌

【あらすじ】

過去に起きた大戦……その傷跡がまだ残る世界で人々は必死に生きていた。統一軍のMTパイロットシュン・シラミネが新たな職場、ヨコハマに赴任したと同時に血にまみれた新たな戦乱が始まるうとしていた。

FILE・00 過去と現在（前書き）

始めて書いた駄作です！こんなものでよかつたら是非読んでくださ
い！m（――）m

FILE・00 過去と現在

10年前の夏：戦争が始まり世界の全てが変わった。

異変の始まりはある大国からだった。

経済的、軍事力で他の国々より優位に立つその大国は国連でもリーダー的存在だった。

その大国が突如起こした経済崩壊……

その影響は、すぐに世界に広がった。

第二次世界恐慌の始まりだった。

人々は職を失い、わずかな援助で暮らし、

恐慌の影響を受けた小国群は次々と崩壊。残された国民は餓死していった。そんな世界的危機に国連理事会はある決断をした。

全世界に散らばる国家群を一つに統一し、

世界を再建しようとしたのだ。

国家統一法案はすぐに承認された。

一部の加盟国が反対を表明していたが、

大国故の危機感を持っていた理事国の全会一致で黙殺された。

その瞬間、世界は二つに割れた。統一国家政府に属する国と属さない国……

統一国家政府に属さないことを宣言した国々は
単独では自国を守れないと考え、

国土防衛を目的とした同盟を結んだ。

彼等は同盟軍として軍事力を結集し、
来たるべき大戦に備えた。……そして、数ヶ月後……
戦争が始まった。

…戦力差は歴然だった。

結集したとはいえ、

軍事力の劣る国々の寄せ集め。

最新兵器を装備する

統一国家の軍に敵うはずがなかった。同盟軍は
次第に破れ、

同盟に属した国は

次々と降伏していった。

追い詰められた同盟軍は最後のカードを切った。

非業の炎、死の灰を巻き散らす悪魔の兵器……

核を発射したのだ。

同盟領を攻めていた統一軍を一瞬で壊滅させ、
統一領に死の灰が降り注いだ。

だが、統一軍の進撃は止まらず、

同盟軍は核を撃った翌週、無条件降伏した。

これが、10年前の戦争……

第三次世界大戦と呼ばれた戦争……

数多の犠牲者をだしたこの戦争の後、

人々は平和を手にし、世界の再建に向けて歩きだした。

大戦から10年後……

ニホン・ヨコハマ

立ち並ぶ高層ビル群、
行き交う人々、

その中に軍の制服を着た1人の青年がいた。

「……まいったな」

彼は

基地の先輩から

書いてもらった地図を見ながら困り果てていた。

地図には男らしい汚い線でヨコハマ中心部の簡略図が描かれていた。
だが、

あまりにも簡単過ぎるその地図は目的地の
統一軍・ヨコハマ防衛第一課のあるビルの所在を教えてはくれず、
むしろ迷わせる原因になっていた。

「……どうしよう」

彼はしばらく中心部を探し回ったが見つからず
そのかわりに見つけた

オープンカフェでコーヒーを飲みながら対策を練っていた。

「第一課の番号聞くの忘れたからないし……
先輩に聞くのもなあ……

こうなったら人に聞きながら……」

「あのおゝ。シラミネ、シュン中尉ですか？」

ぶつぶつと独り言をいいながらコーヒーを飲んでいた上から声をかけられた。

上を向くと、そこにはシュンと同じ軍服を着た若い女性が立っていた。

「あ、はい。自分はシラミネですが」

そう告げると彼女は心底ほっとしたようだった

「よかったゝ。あ、申し遅れました！私は統一軍

ヨコハマ防衛第一課所属のセレナ・マユハラ軍曹です！よろしくお願いします！」

差し出された手を握りながらシュンは質問してみた。

「ここまで迎えに来てくれたのかい？」

「はい！ヨネダ課長からの指示でシラミネ中尉を探していました」

「そうか…ありがとう」

そういつてシュンは笑顔で感謝した。

「い、いえ！そんなたいしたことじゃないんですから！」

セレナは少し照れながら答えた。

「それじゃ…案内してくれるかな」

「あ、はい！じゃ着いて来てください」

第一課に向かう間にシユンはセレナに話し掛けた。

「いやぁ…ヨコハマってすごいですね！こんな高いビルがあるし！」

「ふふ、このヨコハマは10年前の大戦ではほとんど被害が受けませんでしたからね。復興も早かったそうです」

「でも、田舎者の俺には驚きの連発だよ」

そついいながら周りを見渡すシユンにセレナは笑い出した。

「中尉…まるで子供みたいです」

セレナの一言にシユンは恥ずかしそうに顔をうつむかせた。

「そついえば…。中尉ってどこの出身なんですか？」

「出身？…アキタだよ」

「アキタですか？確か今は二ホンきつての工業地帯と聞いています」

「ああ。でも昔は国内では有数の米の生産地だったんだよ」

「お米…ですか？知りませんでした」

「まあ確かにね…俺が子供の頃の話だからね。

あ、そうだ！俺の実家でまだ作っているから後でご馳走するよ」

「本当ですか！私、お米大好きなんですよ」「ふふ、じゃあたくさん送ってもらうとするよ」

「やった！楽しみで…」

セレナがそう言い切る前に、突然、爆発音と悲鳴が響いた。

「な、なに！？」

「あれは！MT！」
マルチトルーパー

そこには人型をした機械が暴れていた。

大戦時に作られた新兵器二足歩行型戦闘兵器……その機動力、汎用性は今までの兵器を凌ぎ、

すぐに世界に普及した戦争の象徴は戦後もその性能が高く評価され、民間・政府問わず

現在まで改良・生産されていた。

「あれは作業用甲冑型のようです」

作業用MTは辺り構わず暴れ、近隣の車輛や店を破壊していた。

「このままでは！IDFはまだこないの！？」

「…軍曹。これ持っててくれ」

シユンは慌てふためくセレナに持っていたバックを渡すと、MTに向かって走りだした。

「中尉！何を！？」

暴走MTの前にまで来るとシユンはさげんだ。

「こちらは統一軍だ！おとなしく投降しろ！！」

「ああ…統一軍がどうした！これでもくらえ！」

MTは巨大な腕を振り回し、シユンに襲いかかったが、シユンはそれをなんなく避けた。

「…止むをえんな」

シユンはホルスターから軍の新型制式採用銃（キリュウM14）を取り出し、MTに構えた。

「そんなちやちな銃でMTが破壊できるのか？」

MT搭乗者は笑いながらシユンを見下した。

「…さあ？　どうかな」乾いた連発音が炸裂した
しばしの沈黙が流れた。

「…へ！　全然効いてないぜ！　これでもくらええ！」

MTが腕を振り上げ、
シユンに振りおと…せなかった。

「な、なんだ！　手足がうごかねえ！」

MTの全身から機械特有の軋む音が鳴り響き、あちこちから油が噴
きだしていた。

「作業用MTの弱点は関節部分の油圧ポンプが露出していることだ。
そこを狙えば…こつなる」

そう言い切ると、MTはその場に崩れ落ちた。

「くそ………！」

パイロットは悪態をつきながらコックピットを出ると
その鼻先にキリユウM14を突きつけられた。

「…王手」

それを見ていたほとんどの人が未だなにがおこったのかわからずに
いた。

FILE・01 新天地

「中尉！すごいですよ！MTを生身で倒すなんて！」

先程の暴走MTのパイロットを急行してきた警察隊に引き渡した後、改めて第一課に向かっていた。

その途中、セレナは興奮しながらシュンに話し掛けた。

「まあ。無我夢中だったからね」

シュンは照れ笑いしながら答えた。

「射撃がお得意だったんですね。もしかして…スナイパーだったんですか？」

「いや、違うよ。俺はパイロット…MTのね。射撃が上手いのは射撃が上手い友人に

無理矢理つきあわされてたからかな。

自然と上手くなったって感じかな？」

「へえ。やっぱりすごいです。シラミネ中尉は」

「…い、いや！あ！そうだ早く第一課に行かなきゃ」

「ふふ。そうですね。ではいきましょう」

少し歩くと、

目の前に周りのビルと比べても
一際目立つビルが現れた。

「ここが、二ホン防衛軍。通称IDFのヨコハマ支部です」

「すごいな……」

シユンはその荘厳さに驚きを隠せないでいた。

「では、いきましょか」

シユンたちはビルのエントランスに足を踏み入れた。

エントランスは簡素なものだった。受付と数カ所に設置された椅子
とテーブルだけ…

「すみません」

シユンは受付の女性に話し掛けた。

「はい。今日はどのような御用件ですか？」

IDFの制服を着た受付係が丁寧な口調で話してきた。

「…本日1400時…転属命令を受け、統一軍・センダイ防衛支部
からIDF第一課に赴任してきました
シユン・シラミネです。」

ヨネダ課長にお取り次願います」

「はい、わかりました。
少々お待ち下さい。」

受付係はすぐに内線に番号を打ち話し始めた。

その間、シユンはエントランスを行き交う人を眺めていた。

IDFの制服を着用している者がほとんどだが、たまに白衣の着た研究者の姿も見受けられた。

（中に研究施設でも入ってるのかな？）

そんなことを考えていた。

「はい。わかりました。：では。：シラミネ中尉」

「は、はい！」

「ヨネダ課長ですが、現在、会議中の為、しばらく待っていてほしいそうです」

「そうですか。ではエントランスで待たせてもらいますね」

「では、何かお飲みものをお持ち致します」

「じゃ！私、ミルクティーで！」

シユンの背中越しからセレナが叫んだ。

「はい。中尉は？」

「じゃあ。同じで」

「かしこまりました」

そういつて受付係が
奥にいくのを見送って
二人は近くの椅子に座った。

「まったく。ユメちゃんっていつもあんな感じなんだから」

シユンの向かいに座って肩をほぐすような動きをしながら、セレナは話した。

「彼女と知り合いなの？」

「まあ、そうですね。なんていうか…幼なじみみたいなものです」

「へえ」

「でも、ユメ、綺麗でしょ？」

「まあ確かに美人さんだね」

ととのった顔立ちにすらりと伸びた身体…
そしてなにより優しさがにじみ出ているような瞳とすらりと肩まで

伸びた長髪がとても印象的だった。
ヤマトナデシコってあんな人のことを言うのかな？とシユンはふと
考えた。

「ユメとっても美人さんだもんね。それに比べたら私なんて…」

セレナは苦笑交じりにシユンに話し掛けた。

「え？あなたもとても綺麗ですよ」シユンはきょとんしながら答
えた。

セレナはぶらぶらと片手を振った。

「…お世辞はいいんですよ」

「お世辞じゃないよ」

それはシユンの本当の気持ちだった。
セレナはユメと負けず劣らずの美形で、大きな瞳がよく栄えていた。
細身ながらスタイルも抜群によく、髪は短髪で長髪のユメとは対象
的な印象を与えていた。

「…本当にウソじゃない？」

「本当です」

シユンは笑顔で答えた

「……ありがとう」

セレナは頬を染めてうつむいている間に、受付係：ユメがティーカップを二つ持って歩いてきた。

「お待たせしま…」

「すいませ〜ん！通してください！！」

「え？きゃあ！！」

横手から走って来た男に押され、ユメは転びそうになった。

その、瞬間

シユンは素早く立ち上がり、片手でユメを優しく抱き留めながら、空いた手で中に飛んだお盆をキャッチした。

「…大丈夫？」

シユンはほっとしながら視線をユメに移した。

「……！！…はは、はい！ただだ、大丈夫です！」

ユメの顔は人間ってこんなに赤くなるものかと思うくらい真っ赤になっていた。

「す、すいません！急いでいたもので！」

ぶつかった男は頭を下げて謝った。

「ああ、大丈夫。急いでるんだろ？早く行った方がいいんじゃない

か」

ユメを支えながら、立ち上がりながらシュンは言った。

「あああ！そうでした。じゃあ、本当にすみませんでした！」

そう言いながら、男は走っていった。

「で…一人で立てるか…えーと、ユメ、さん？」

唐突に自分の名前を呼ばれ、

少しずつ落ち着きを取り戻していた顔にまた動揺が走った。

「え、あ、は、はい！でも…どうして名前…？」

「私が教えた」

セレナはにやにやしながら答えた。

「セレナ〜！」

「いいじゃない。明日から毎日会っただから」

セレナは軽い口調で言い放った。シュンはそんな言い合いを見ながら、お盆をテーブルに置こうとした。

「っ！」

シュンの声に反応して、二人はシュンの方に顔を向けた。

「中尉！大丈夫ですか！」

「ああ…大丈夫。袖口にかかったただけだから」

「大丈夫じゃないです！ちょっと見せてください」

ユメが手を取ると、シユンは少し顔を歪めた。

「ああ、やっぱり少し火傷してます」

そついいながら、ユメは自分の腰に巻きつけていたポーチから治療用スプレーを取り出した。

「少し、しみますよ」

「……っ」

シユンの声に構わず、ユメはスプレーを火傷全体にかけた。

「…これでよし、と」

「すまないね」

シユンは腕をさすりながら礼を言った。

「いえ、元はといえば私のせいですし…」

「気にしないで。ユメちゃんに怪我がないならそれでいいんだから」

シユンは笑顔を作りながら言った。

「中尉…」

またもユメの顔は赤くなった。今度は恥ずかしさとは別の意味でだか…

「……なに、この妙な雰囲気は」

セレナの一言で二人は我に返った。周りをみると少なからず視線を感じた。

「あ、いや。私ったら！じゃ、じゃあ。仕事にもどります」

ユメは脱兎の如くの勢いで受付に姿を消した。

取り残されたシユンはとりあえず、座った。その背中にはまだ、鋭い視線を感じていた。

「中尉…初日から大変だね。実はユメね…ヨコハマ支部のアイドル的存在なの」

そう、だからこんなに視線が痛いのか。

シユンはカップに残ったミルクティーを一気に飲み干した。

FILE・02 ヨコハマ支部

しばらく、男たちの殺気に満ちた視線にさらされながら、エントランスで待っているとエレベータから数人の護衛を連れた初老の男性がこちらに歩いてきた。

「やっと来た。真ん中にいるのがヨネダ課長ですよ」

「いやあー！長らくお待たせしてすみませんなあ」

ヨネダはぺこぺこ頭を下げながら言った。

「い、いえ！こちらこそ」

慌てふためくシュンをににこと見ながらヨネダは護衛に小声で何かを言った。

「では…第一課にいきましょうか。ここはなんだか物騒ですから」

シュンたちはそれに同意し、ヨネダに後に続いた。

全員がエレベータに乗ると護衛の一人が懷からカードキーを取り出し、

ボタンの横にあったスリットに通した。

エレベータは地下へと動き出した。

エレベータは表示されていた地下2階を通り越し、しばらく下った後、止まった。

扉が開くとそこは通信技術室のようなものだった。数人のオペレーターが通信機に取り付いて、何かを話していた。その中心部には一際大きい碧い物体が部屋を大きく占領していた。

「ここが、第一課のCIC（戦闘指揮所）です。この自慢は中央に設置されている最新のスーパーコンピューター（刹那）です。こいつはアジア方面ではこのヨコハマにしかないすぐれものです」

シユンはただ驚くことしかできなかった。

「では、こちらへ」
シユンたちはそれに従ってついていった。

司令室に通されたシユンとセレナは緊張した面持ちでソファに座っていた。

「…そんなに緊張しなくていいよ。肩の力を抜きなさい」

ヨネダはやんわかと言った。

「では…本題に入ろう」

「はい！」

シユンはすつと立ち上がった。

「シユン・シラミネ……本日1400時、転属命令を受けIDFヨコハマ支部第一課に着任しました」

「よろしい…経歴を拝見させてもらったよ。まったく凄いものだよ」

「はあ…」

「2年前に統一軍センダイ支部に兵卒で入隊。その後、操縦センスを買われ、第19MT隊に配属されたつと」

次々と言われる自分の経歴にシユンは苦笑を浮かべていた。

「任務を着々とこなし、曹長まで昇進…」

その後、第606実験中隊の小隊長に就任…

そして3カ月前に起きた朝鮮紛争に従軍し、多大な戦火を上げて二階級特進で中尉に昇進して今に至る。こんな感じでいいか？」

「まあ…大筋は合っていると思います」

「そうか…。あとは…」

センダイ支部からの報告では誠実で人柄もよく、さらにルックス、顔もいいことから

女性絡みの事件がかなりあったと書いているが？」

「え！、…あ、いや、それは」

シユンは口を濁した。

ヨネダの言っていることは正しい。

長身でモデル体型、整った顔立ちに少し茶に染め、軍人にしてはやや長い髪が彼を一際かっこよく見せていた。

「…まあ、いいさ。IDFではそんなこと気にしない。必要なのは実力だ。実力には問題ないだろ…。拳銃一丁でMT倒すんだから」

シユンとセレナは同時にえっと声をだしてしまった。

「み、見てたんですか！？」

「ヨコハマIDFをなめんなよ。まあ監視カメラで見てただけ、だけれどな。いやあゝ！すごかったなあゝ」

ヨネダは感嘆の声を上げた。

「特に敵を撃つ姿がなんとも…」

唐突にドアがノックされヨネダの話は中断された。

「ヨネダ課長。ちょっとよろしいですか？」

「おう！はいんな！」

ドアが空くと先程の護衛の一人が入って来た。

「お話中申し訳ありません」

「大丈夫だ。それで用件は？」

「はい。統一軍アジア方面隊の参謀閣下がお見えになりました」

「カツラギが？…わかった。すぐいく」

用件を伝えると男は一礼して出ていった。

「すまん。急用ができちゃった。あとはセレナにでも聞いてくれ」

そういうとヨネダは制服の襟を正してそそくさでいった。

「で、どうします？」

「とりあえず…ここの中案内しますね」

「じゃ。お願いします…」

「おっと！言い忘れてたぜ！」

急にドアが開き、ヨネダが顔をだした。

「ほら！シラミネ！」

ヨネダはシュンに何かを投げてきた。

「……鍵？」

「ロッカーの鍵だ。中にIDFの制服が入ってるから支部内を見る前に着替える。その服じゃ目立つ」

「は、はい」

「課長。私の制服は？」

「おっと忘れてた。ほらよ」

そっいつてセレナにもシュンと同じ鍵を渡した。

「じゃあな！」

そっいつと小走りででていった。

「……とりあえず。ロッカールームに案内してくれすか？」

「そうですね。じゃ、着いて来てください」

司令室を出て、シュンたちはロッカールームに向かっていた。

「……あの、中尉」

「なんだい？」

「あの、その、センダイ支部での女性絡みの事件ってなんですか？」

「え！あ、い、いや！何のことです！？」

シユンは明らかに動揺していた。

「さっきヨネダ課長が言ってたでしょ。ひょっとして中尉…結構浮気者なんですか？」

「ち、違うよ！」シユンは慌てながら否定した。

「本当に？」

セレナは疑惑を追求した。

「本当ですっ！」

「じゃ、いいなさいよ！」

「そ、それは。……わかりましたよ！言います」

ついにシユンは観念して話し始めた。

「…センダイにいた頃、……」

「…いた頃？なに？」

セレナは興味津々に言い寄っていく。

「いた頃…その。……やっぱり言えない！！」

シユンはすごい勢いで逃げ始めた。

「あゝ！中尉！待てゝ！」

「はあ、はあ、はあ」

シユンはセレナの追跡を逃れ、息を整えていた。そのおかげで、支部のどこにいるのかわからなくなっていた。

「はあ、はあ、…まいったな」

人に道を聞こうにも通路には誰もいない。

とりあえずシユンはロッカールームを探すことにした。

通路を歩いていると、

金属製のドアが一つあった。

「…ここかな」

シュンはドアを開けて入っていった。その瞬間、耳をつんざくほどの機械音が響いた。

そこにはMTが鋼鉄の枠組みに固定されており、その一つ一つに整備員が群がっていた。

（格納庫か…）

シュンはゆつくりとMTの一つに近づいていった。

IDFの誇る量産型MT

（甲嵩型・伍式改）

通称 ハヤブサがそこにあった。

機体の頭部は

その名のとおり、

隼を模して作られ、ボディは都市防衛用の設計に変更されており、機体の性能よりも安全性を考慮された作りになっていた。

基本武装は軽量MPマシンガンと左手に装備された近接用のスタンナックル。さらに背中には遠距離兵装を装備できるようになっており、

近・中・遠距離どれにでも対応できる機体になっていた。

「…いい機体だ」

シュンの素直な感想だった。

「そりゃそつだよ。こいつはIDFの誇りだからね」

唐突に放たれた声に…

シユンはゆっくりと振り向いた。そこにはIDFの若い整備員が立っていた。

「こいつは、IDFの兵器開発の粋を集めた最新鋭の機体だ。これを馬鹿にするやつは能なししかない」

整備員は自慢するようにいった。

「…確かに。バランスもいいし、兵器としてとても素晴らしいと思うよ」

シユンは正直な感想を整備員にいった。

「…お前、いいやつだな。気に入ったぜ！」

そっいつてシユンの肩をぽんと叩いた。

「オレ、リュウトっていうんだ。よろしくな」

「シユンです。こちらこそ、よろしく」

二人は握手を交わした。

「…ところで、シユン、君って統一軍の兵士なのか？」

「あ、まあ…ね」

「じゃあ、あれシユンのMTなのか？」

そういつてリュウトは格納庫の隅を指した。

そこにはハヤブサとは違う機体があった。

「ああ、オレの機体だよ。MIR……」

「MIR - 109」

ガーディアンウルフ……だよな」

すらすらと機体名を言うリュウトにシユンは内心驚いた。

「……よく知ってるな」

「整備員だからな。でもあれって統一の最新鋭のMTじゃないか」

ガーディアンウルフは統一軍のMT技術の粋を集め、コストを無視して作られたエリート兵士や高位指揮官専用機だった。頭部はハヤブサと違い、人の顔を模して作られ、高精度の多彩センサーを装備し、

ボディは機動力重視に設計され、エンジンに重力機関を採用している。

試験段階ではあるが従来のMTのパワーを数段上回る力を持っていた。

戦闘能力は高く、MTの旧式化の進む統一軍の切り札的存在だった。

「シユンってエリートなのか？」

「……違うよ。オレは一兵士出身。こいつは……スオウは……実験機なんだ。オレはテストパイロットで乗ってるんだよ」

「ふーん。で、スオウって？」

「この機の名前さ」

「そうなのか…あ！そうだ、シユンちょっと来いよ！」

「え？あ、ちょっと！リュウト！」

リュウトは強引にシユンの手を引っ張っていった。

「シユン、君の実力を見せてもらっぜ」

そういったリュウトの顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

FILE・03 全ての始まり（前書き）

今回は文の量が前回の約2倍です。セリフなどが読みにくいと思いますが、是非読んでくださいm（――）m

FILE・03 全ての始まり

(……暗いな……)

シユンは暗く機械に埋め尽くされた狭い空間に見を置いていた。

「……システム起動」

シユンは小さく呟いた。

『……マスター・シユンと声紋一致。システム起動します』

その声と共に暗かったコックピットが赤く染まり、機器が点滅し始めた。

『メイン・サブ共に正常に作動……続いてサポート^{ライン}AI起動』

次々と点滅していく画面の中にデジタル化した銀色の狼が現れた。

『……お早うございます。マスター・シユン』

狼はAIらしい

礼儀正しい挨拶をした。

「お早う、ライン。さっそくですまないが、戦闘準備だ」

『了解しました。戦闘システム起動、開始します』

狼……ラインが消え、そこに素人なら頭が痛くなるような数式がすごい勢いででたり消えたりしている。

『火器制御システム FCS ・ オールグリーン。反応速度 レスポンス 良好……』

シユンはその工程をぼうと眺めていた。こういう作業はラインが全てやってくれるとわかっていたからである。

『…リミッタハイ決定…。マスター。戦闘システム立ち上げ終了しました』

「ご苦労様」

シユンは労いを言いながら外の映像を目を移した。闇だけがそこにあった。そこに突然、通信機がなった。

『マスター。通信が入っています』

「そうか…繋いで」

『了解しました』

「シユン。こちらリユウトだ。準備はいいか？」

画面にはラインに代わり、インカムを付けたリユウトが映った。

「準備は万端！いつでもいいよ」

『了解！じゃあ始めるぞ。フィールド展開…』

すると、今まで闇だった空間が一瞬にして市街地が変わった。

『フィールド - 17 に固定完了。よし、こちらからの空間異常、無し。シユン、そっちは異常ないか？』

「ああ。特に変わったことはないよ」

シユンは画面腰に市街地を見渡して答えた

『了解！じゃあ、始める。ターゲットはハヤブサ3機だ』

リュウトが言い切ると目の前にハヤブサが3機現れた。

「新鋭機が3機か……ちょっときついんじゃない？」

『そうか？でも三人の内二人は新米だ。大丈夫だよ』

『…聞こえてますよ。リュウトさん』

通信機越しに少年の声が聞こえてきた。

『だってそうじゃねえか。新米は新米だ！』

『それは…そうですけど…でも』

「あの…あなたは？」

二人の言い合いにシユンは口を挟んだ。

『あ！すいません。自分はハヤテ・ミズハサー等兵です。機体はハヤブサ2番機』

『ほら！お二人さんも挨拶！挨拶！』

『…しょうがねえなあ。オレはイチマサ、階級は伍長で1番機だ。』
通信機からガラの悪い声が聞こえた。

『…リン・ユウキー等兵です。機体は3番機。よろしく』
少女のような声が淡々とした言葉で聞こえてきた。

「シユン・シラミネです。よろしくお願いするよ!」

『よし!挨拶終了!それじゃ始めっぞ!』

その一言でシユンのスオウとハヤブサ3機は身構えた。

「ライン!開始したら
敵の戦闘力計測!」

『了解しました』

『勝敗はどちらかが戦闘不能になるまでだ。いくぞ!……スタート
!..!』

シユンはスタートと共にその機動力を活かして
3機から遠ざかった。
情報収集が先……

『情報収集、開始します』

「たの……」

む、と言いかけた時、

機内にアラートが鳴り響いた。

『目標：捕捉。発射！』

いつのまにか正面にリンのハヤブサが接近していた。

両肩に装備されていた8連装ミサイルポット・マイクロミサイルが発射され、スオウに迫った。ところがシュンは回避行動を取るところか、

スオウをハヤブサに向かって加速させた。

「間合いがあまいな…避ける！」

シュンはミサイルが命中する寸前に最小限の動きでかわしていく。ミサイルはスオウのスレスレを通過し、後方で爆発した。

『なんですって…！？』

リンが驚いている間にシュンは加速の勢いを利用し、そのまま接近し、攻撃を叩き込もうとした。その時、敵の接近を知らせる警報が鳴り響いた。『やらせませんよ！！』

ハヤテのハヤブサがMPサブマシンガンを乱射しながら接近してくる。

「それでは弾の無駄撃ちだ！」

シュンは機体を後方に跳躍させ、弾雨から逃れる。

『…クッ！』

すかさず、シュンは反撃にでる。右手に装備していた主兵装のアンチマテリアルライフルを
ハヤテ機に向ける。

『おうりやああ!!』

後方から接近していたイチマサ機がその両手で握っていたブレードを振りかぶる。

「あまい!!」

シユンは真一文字に振られたブレードを左手に装備されたシールドで防御する。

『ほう…中々やるな』

一撃が発とわかると、すかさず、イチマサは後方に下がる。それを援護するように二機が弾幕を展開してシユンを近づけさせない。

「近・中・遠距離の三機か。コンビネーションも抜群…きびしいな」

シユンはライフルで数発撃ち返しながら、冷静に状況を判断していた。

（一機ならともかく、三機相手ではな…仕方ない…）

シユンは一旦、間合いをはかる。

「ライン、（ゴースト）を使うぞ」

『了解しました。ゴースト起動』

（動きが…止まった？）

急に動きが止まった敵に三機は少し動揺していた。

『どうしたんでしょう?』

急に動きを止めたスオウに3機は少し動揺していた。

『知るか!』

「……………」

リンは黙って、全ての武装をスオウに向けた。

『お、おい!』

『畏かもしれません!ここは様子を…』

「これは好機です。それに畏だとしてもこの距離ではなににもできない」

そういつて装備された全弾を発射した。

ミサイルは帯を引きながら、スオウのいたポイントを爆炎で包んだ。

「…敵機、ロスト。どうやら撃破できたみたいね」

リンは内心ほつとした。

『…まったく無理しやがって。だが、撃破したんだ。結果オーライだな』

『…そうでしょうか?』 ハヤテはまだ不安を抱えていた。

『あれだけミサイルを食らったんだ。大丈夫だよ。リュウト!どう

だ？』

イチマサはハヤテを励ましながら、確信しつつ、リュウトに確認をとった。

『こちらリュウト。…いや…まだだ！こっちには撃破の信号は点滅してない』

『！！！』

三人に緊張が走った。

『…各機！陣形整えろ！』

イチマサの指示に従い、ハヤテは中軸、リンは後方に移動した。

『レーダー確認を！……そんな！……機影無し！？』

ハヤテは泣く寸前のような声で叫んだ。

『何だと！？…ジャミングか？』

『ジャミング反応ありません！』

『…一体どこだ…』

リンはレーダーを捨て、メインカメラに視界を移した。

レーダーの反応がない異常、肉眼に頼るしかない。

市街地にはたいして変わった様子がない。

（どこ…どこにいるの！？）リンは視界を凝らし、周りを見渡す。
敵影はない……

「どこ！？どこにいるの！出てきなさい！」

思わず、外部スピーカーを起動させ、叫んだ。

『……ここだ…』

『！！』

いきなり通信機から聞こえた声に三人は肝を冷やした。

「どこなの！？でて…」

コックピットに振動が走った。

確認すると肩部に装備されていたはずのミサイルポットが飴細工のように切り取られていた。

「ど、どうして!?!」

さらに振動が走り、コックピットが赤色に染まった。

『大丈夫か!!』

「……メイン・サブどちらも、やられた…戦闘続行不能!!」
そういいながらリンは唇を噛み締めた。

(一機、撃破…)

シユンは冷静にことを見ていた。

『ちくしょう!どこに!どこにいるんだ!』

残りの二機の内、ハヤテ機はあたり構わず、撃ち始めた。

「ライン。ゴースト・フェイズ2、展開」

『了解しました。ゴーストシステム・フェイズ2に移行します』

「どこにいるんだ!？」

ハヤテはもはや半泣きしていた。

リンが姿が見えない敵にやられた…

そのことでハヤテはパニックに陥っていた。

『ハヤテ!! 落ち着け!!』

イチマサの激も今のハヤテには届かない…

ハヤテは撃ち続けた。

「うわあああ!!」

突然、コックピットに響いていた音が消え、乾いた金属の音が代わりに響いた。

(…弾切れ?…)

『ハヤテ!! 落ち着け!!』

イチマサの声がようやくハヤテに届き、いくばくか冷静さを取り戻した。

「はあ、はあ、はあ……すいません」

『ここが戦場なら死んでるぞ!! いいから早く弾込めろ!!』

ハヤテは指示に従い、サブマシンガンに新しいマガジンを差し込み、初弾をチェンバーに入れた。

『警戒しろ…どこからくるかわからん』

ハヤテは改めて周りを見渡した。

先程の乱射で、周りは穴が空いた廃墟があるだけで、それ以外なにも変わっていないかった。

「どこに？肉眼に頼るしか……」

突然、レーダーに反応が生じた。

「伍長！」

『ああ！こちらにも反応がある。一機、いや！な、なんだこれは！』

レーダーには複数の機影が現れたり消えたりを繰り返していた。それは…まるで…

『…幽霊だとも言うのか』

ハヤテが思ってたことをイチマサが口にだした。

その間にも、レーダーには機影が映ったり消えたりしていた。

『…！！…ハヤテ！左のビルから機影がくるぞ』

ハヤテはそれに反応してビルにマシンガンを構えた。
そこにゆっくりと、スオウが現れた。

『う、撃て!!!』

「うわあああ!!!」

ハヤテは絶叫しながら、スオウに向かってマシンガンを連射した。
しかし、スオウには当たらない。いや、通り抜けていくといった方が正しい。

「ど、どうして!?!」

すると、スオウの姿がすうと消えていった。

『ホログラム……!!』

「じゃ、じゃあ本体は……」

……金属の切断音が周りに響いた。
言い切る前に彼の機体の胴体と脚部は離れた。

「うあ……!!」

画面に戦闘不能の文字が点滅した。

「……これで二人か……」

シュンは一息ついた。

目の前には最後の一機……巨大なブレードをもって警戒を強め、シュンの奇襲を狙っているように見えた。

そんなばかな！…オレが、オレ達が負けるだと！

イチマサは内心の動揺を抑えながら見えない敵と対峙していた。自然とブレードを持っていたマニピュレーターに力が入った。その時、通信機からザザツという音が聞こえてきた。

『……これで終わりです』

「…クソツ！幽霊め！出てきやがれ！」

そう言いながら、ブレードを振り回した。

『無駄です』

甲高い金属音

ブレードと何かがぶつかった。なにも見えないが、確実にそこに何かいた。

バチっという音と共に…スオウの姿が現れた。

「で、電磁迷彩か！？」

『ああ、さすがに不利だったからね。使わせてもらったよ』

ブレードと合わさったスオウの刃が火花が散った。

『だが、これで、詰みだ』

キンっという音と共にハヤブサのブレードが地面に突き刺さった。

「ク、クソ！」

コックピットの前に刃を突き立てられた。

『終了了！！この勝負、シュンの勝ちだ』

コックピットから出ると三人の兵士に囲まれた。

「な、なんですか？」

シュンはおそろおそろ言った。

「……お前、シュンとかいったな」

その中でも年長の兵士が話し掛けた。

「は、はい」

「気に入ったぜ！お前の戦いっぷり！」

その兵士はシュンの頭をくしゃくしゃに撫でた。

「な、なにするんですか！」

「ああわりい。オレがイチマサだ。よろしくな」

「ハヤテです。いやあ！さっきはぼろぼろにやられちゃいましたね」
まだ子供の面影のある少年は年相応のはしゃぎぶりだった。

「いや…ハヤテは素質がある…あとは冷静さがあればエースになれる」

「あ、ありがとう！」

満面の笑みを浮かべるハヤテを横に押しやり、
女兵士がこちらを腕を組んで睨みつけた。

「くらリン！おい！」

「な、なんで睨むんですか！？」

「……次は負けませんから」そう言うと、部屋からでていった。

「リンは負けず嫌いなんだ。気にするな」

「は、はあ」

「シュン！お前、強いんだな！」

そこにリュウトが駆け寄ってシュンを褒めた。

「い、いや！スオウのおかげだよ。」

それよりここの擬似体験機 シュミレータ すごいね」

「そりやそうだ！なんてったって刹那と直結してるからな」

ははは、と高笑いしながらリュウトは自慢げに言った。

「それより、シュン、戦闘に使ったあれって何なの？」

「おお！オレも知りたいな」

「あれはゴースト 幽霊 システムっていうんだ」

「ゴースト？」

「自分は電磁迷彩で隠れ、ホログラムで敵を攪乱する、それがゴー

ストだ」

「それが実験システムなのか？」

「…ガーディアンウルフには全機に装備されている。実験システムは……いや……いい」

「何だよ、教えろよ」

イチマサが興味津々に聞いてきた。

「軍事機密なんだ。勘弁してくれ」

「…わかったよ。じゃあさ…」

「あゝ！中尉。やっと見つけましたよ」

振り向くとそこにセレナがいた。

「まったく！中尉、逃げ足早いから探しましたよ」
「…ごめん」

「ふう…今回は許してあげます。それじゃ…」

「お、おい、セレナ？」

イチマサがちょっと困惑しながら話し掛けた。

「なに？イチマサ伍長」

「今、シュンのこと… 中尉 って言ったよな」「え？知らなかったの？」

「知らなかったって何が？」

ハヤテは声を上擦らせながら聞いた

「統一陸軍センダイ支部防衛隊所属シュン・シラミネ中尉ですよ」
二人はポカンとした表情でシュンを見ていた。

「ど、どうしたんだ？」

「……し」

「し？」

『失礼しました！！中尉殿！！』

二人の声が見事にコラボした。姿勢もリラックスモードから直立不動になった

『先々のご無礼、お許してください！！』

「い、いや！イチマサさん、ハヤテ！頭を上げてください」

「でも…」

「これから戦友だろ。階級がどうか無しだ」

「…わかりました。これからよろしくお願いします！」

「…マジで気に入った！！これからよろしく頼むぜ！」
三人は硬く握手をかわした。

…それが、今思えば、これが全ての始まりだった。
これから始まる血にまみれた戦いも…

エース部隊・雷皇

ライコウ に属することになるパイロット達との出会いも

運命の齒車は動き出した

FILE・04 夢と影

…夢を見た……

暗い海

その上にオレはいた。

ふと、景色が変わった。

…黒い影…

影がゆつくりとこちらに近づいてくる。

周りでは火の海となった街と血まみれの死体が横たわっている。

その死体を踏み付けながら人々が逃げ回っている。…銃声が聞こえた。

それをきっかけに逃げ回っていた人が次々と倒れていった。

目の前に男が倒れた。オレは視線を向ける。

…民間人だった。力のない非戦闘員を影が喰らっていく

これは、

…虐殺だ…

そう認識した時、急に景色が真っ白になっていった。

……目を開けてみた。

そこには火の海になった街も死体もない。

ただ暗い天井が見えていた。

「……夢、か……いや……夢で終わってほしいな……」

シユンはベットから起き上がった。

そこはIDFの隊員寮だった。室内にはベットの他、パソコンと冷蔵庫があるだけの簡素な作りだった。

昨日、シユンは手続きがあらかた終わった後、この個室に案内された。

その後、シユミレータの疲れがでたのかすぐに寝入ってしまった。

シユンは時計を見た。

午前4時……まだ朝の太陽も出ていない時刻だった。

「……シャワーでも浴びるか……」

シユンは浴室に入っていた。

同時刻

富士の樹海

（クソ！なんでこんなことになったんだ）

男はMTの機内で困惑していた。

彼の…彼等の任務は最初、簡単なものだった。

二日前、調査に出た統一軍の研究チームが富士の樹海で行方不明になった。

統一軍から研究チームの搜索の要請を受けたニホン警察は、MT数機を含む搜索隊を編成した。

その中にオレはいた……それが今、どうしてこうなったんだ！？
それが現れたのは突然だった。

森の中から現れた

それは 影 のような奴だった。

彼等は持てる力で応戦した。

影はそれに構わず次々と仲間を殺していった。

そして最後の生き残りになった、

彼の機体の周りには仲間の死体と、

コックピットだけを

えぐり取られたMTが残されていた。

死んでいる……

仲間の死を感じながら、彼は冷静に状況を見ていた。

…ふと、風が吹いた。

この風に彼は恐怖した。

こいつだ…この風が吹いた時、仲間が死んだんだ！

彼はMTに装備された

ハンドガンを風の方に乱射した。

「うおおお！！」

彼はそれが無駄な行為だとわかっていた。しかし、撃たずにはいられなかった。

…乾いた音が消えた…

…弾切れ…か…

彼は、生をあきらめたのかのように機内に貼っていた一つの写真を

見上げた。彼と彼の妻、まだ小さな少年が写っていた。

「…さよなら…」

彼は一筋の涙を流した。

その瞬間、この世から彼の存在は消えた。

影はコックピットを右手に装備されたレーザーブレードで貫いていた。それを抜くと、影はMTがゆっくりと倒れていくのを眺めていた。

全滅を確認すると、影は去っていた。

影が去った後には
血まみれの亡きからだけが残された。

ヨコハマ

IDF支部

太陽が昇り始めた早朝、支部に次第に行き交う人が増え始めていた。

ユメはそれをぼうと眺めていた。

(…暇ですね…)

この時間帯…受付にはあまり仕事がないので、
平常二人いる受付も今は一人で充分なのだ。
ユメは少し眠くなった。

「…ふあ…」

ユメは

下を向いて、軽くあくびをした。

「おはよう」

突然、上から声をかけられた。

その声の主をユメは知っていた。

見られた……と思った。

ユメはうつむきながら顔が次第に赤くなっていくのを感じていた。

「…?…ユメ、ちゃん？」

「ふえ！？あ、お、おはようございます！」

とりあえず挨拶をして上を向いた。

「おはよう」

そこには笑顔のシュンがいた。

「…?…どうしたの？」

「え？」

「顔が赤いよ？」

シュンは不安げにいった。

「え、あ、その…だ、大丈夫ですよ！」

「本当かい？どれどれ」

……一瞬、ユメの視界に影が覆った。
そして、額に手が当たるのをユメは感じた。

「うーん。熱はないみたいだね」

シユンはもう片方の手を自分の額に当てながらいった。

「本当に！だ、大丈夫ですから」

「…本当に？」

シユンは疑い深く聞いた。

「本当です！」

ユメは頬を膨らましながらきっぱりといった。

「…ぶ。なんだい？その顔は？」

「中尉が信じてくれないからです！」

「ごめんごめん！信じるよ！」

「…わかりました。…今回は許してあげます」

「本当？…ありがとう！」

そういったシユンの顔にはいつもの笑顔が浮かんだ。

ユメは昨日会ったばかりなのだが、シユンのその笑顔に弱かった。

「い、いいんです！ありがとうございます！」

そんな会話をしていたら、どこからか着信音が鳴った。

「あ、オレのだ。ごめん」

そういうと、シュンは携帯を手にし、受信したメールを見て、返信をはじめた。

「…今の着信音って…」

ミーナの 自由への光 ですよね？」

「ん？そっだよ」

「中尉、好きなんですか？ミーナの曲」

「まあ、ね」

「本当ですか！！私も好きなんです！ミーナ！」

ミーナとは今、世界中で男女を問わず、人気を博している女性歌手である。

その透き通った声と平和に対する思いをつづった歌詞は核戦争で傷ついた人々に反響を呼び、世界有数のアーティストとして今に至っているのである。

「ユメちゃんも好きなんだ」

「はい！私、今まで発売されたの全部持ってます！…あの、中尉。もしよかったら…」

また着信音が鳴った。

シユンは…メールを見た。

「…ブリーフィング室に集合か。ごめん！ユメちゃん。行かなくちや！じゃ！」

「え、あ、中尉！…行っちゃった」

ユメは少ししゅんとなった。

「…中々いい奴じゃん？」

「…はい……ってカオル先輩！！いつからそこにいたんですか！？」

「んゝあんたがあくびしてた所からかな？」

「ほとんど最初からじゃないですか！…あゝどうしよう！」

恥ずかしさのあまり顔を手にうずめるユメを
からからと笑いながら

カオルはほんと肩を叩いた。

シユンがブリーフィング室に着くと、

昨日、擬似体験機で相手になった

イチマサ、ハヤテ、リンがすでに席についていた

「遅いぞ！シラミネ！」

「すまない…まだ支部の中、わからなくてな」

「まったく…」

「まあいいじゃないですか。中尉、こちらへどうぞ」
シユンはハヤテに従って席についた。

数分後……

片手に資料を持った

インテリ系の男が入ってきた。

「全員お集まりですか？」

「おう。イヤミ小僧」

「…私の名前はイタミです」

「堅苦しいこというな」

イチマサはしゃあしゃあといった。

「…それでは今回の任務について、説明致します。」
そんなイチマサを無視してイタミは説明し始めた。

「あの人は？」

シユンはハヤテに話し掛けた。

「イタミ少尉です。僕たちの機体の運用や作戦立案などを行っている人です」

「ふーん」

「…そろそろいいですか？」

「えーあ、すみません」

「…コホン。今回の任務は搜索活動です」

「搜索だあ？そりゃ警察の仕事だろ？」

「本来はそうです。…しかし今回は違います」

「どうしてですか？」

「…二日前、統一軍のある研究チームが富士の樹海で行方不明になったんです。

そして、昨日の未明にMTを含んだ警察の搜索隊が入りました」

「じゃあいいんじゃないのか？」

「…その搜索隊が今朝…全員、死体で見つかったとしても？」
シュン達に緊張が走った。

「…MTの残骸にコックピットのみにレーザーブレードの残撃の痕が残っていました」

「…つまり、敵はMTを所持していて…」

「中々の強敵、てことか…」

「そういうことです。」

このことから研究チームの生存も絶望視されています。

よって今回の搜索目標は…そのMTです」

「ちょっと待ってください！？そいつが攻撃してきたら？」
ハヤテは立ち上がって抗議した。

「目標としては捕獲なんですが、無理そうなのでデータ収集で構いません。その後、可能であれば撃破してください」

「まったく…ヨネダのしじいめ」
イチマサは苦言を吐いた

「…今回から、シュン・シラミネ中尉を隊長に
イチマサ伍長、
ミズハサー等兵
ユウキー等兵を構成員として小隊を組んでもらいます」

「オレを…隊長に！？」

「そうです…我々が適任だと判断し、決めました。」

「しかし…」

「決定事項です。拒否はできません。
…それでは、幸運を」

数時間後、オレ達は
謎のMTを搜索する為、出撃した。

FILE・05 影の願い

午前11時

富士の樹海

遙か昔から存在し、多くの悲劇を見てきた
その樹海は

今も

樹木が光を遮り、

幻想の世界を作り出していた。

その幻想の世界に

影 はいた。

影は

静かに胸の排気口から

空気を

排出したり、

吸入していた。

それは、まるで生物の呼吸のようだった。

影は感じていた。

新たな獲物が侵入してきたことを

影は歩きだした。獲物を狩る為に……

同時刻

樹海・東部

影が動き出した頃、
シュンのスオウを中心としたIDF小隊は
樹海東部から入り、
散開して目標を探していた。

「…こちらシュン。各機、現状を」

『ハヤテです。こちらに反応はありません』

『イチマサだ！こっちにもいないぜ』

『こちらも異常ありません』

シュンは目の周りは微かな太陽の光があるだけで、
ほかに森を照らすものはなかった。

「…それにしても…」

シュンは自然とも思いにふけていた。

『なんですか？』

「IDFは都市防衛を

司る組織だよな？それがなんで搜索活動とかに参加できるのかなっ
て思ってたね」

『それは…そうですね。どうしてでしょう』

『そりゃ…政治的なことがあるからだろうな』

「政治的なこと？」

『IDFは統一軍からは独立した組織だと言われている。しかし、実際は収入源のほとんどが統一政府お抱えの財団から出ているって話だ』

「だから…統一軍からの要請には逆らえない？」

『噂だ…確証はない。だが、

統一から

IDF上層部の連中に圧力がかけられているのは確かだぜ』

『…〔統一軍所属の研究チームの搜索〕』

「え？」

『…それがなぜ統一軍ではなく警察やIDFに任務を委託されたか
……
変だと思いませんか？』

「…確かにね。自分の組織の人員が消えたのに統一からは何の行動もない

…統一軍が何かを隠しているか…それが…」

『研究チームは行方不明にはなっではない…
世間に公表できない何かが起きた…かな』

『……………』

シユンはメインカメラから映し出される映像を見た。

薄暗い森の中には、生物の気配さえ感じられない静寂が流れていた。

『隊長。もうすぐ警察隊が全滅していたポイントに到着します』

「了解…」

……きてはいけない……

「くっ！」

急にシユンの頭に痛みが走った。
思わず、頭を抑えた。

……だめだ……

……逃げるんだ……

「君は…誰、なんだ？」

……ボクには……

……もう、こいつを……

……止められない……

……逃げて…ボクは……もう…殺したくない……殺したくないんだ！……

「う…！」

またシユンの頭に痛みが走り、その声は消えた。

『隊長？どうしましたか？』

「ん？ああ…大丈夫だ。ハヤテ。通信終わり」

シユンは通信機を切るとかなしげに顔を歪めた。

「…この痛みと声…」

まさか…あの計画がまだ続いていたのか…」

数分後

「…ここか…」

シユンの目の前に警察官たちの屍と機動隊のMTの残骸が現れた。

『…吊ってやりたいものだな』

「…ああ」

シユンたちはMTの残骸に近づいた。

機動隊MT「ソルト」の残骸がそこにある。

軽装甲・機動力重視の機体で低コストで製造できる為、各国警察に採用されている。

今日の前にあるソルトの右手には

弾切れを起こしたオートマチックハンドガンが握られている。

そして、コックピットのあるはずの場所は円形にえぐり取られていた。

『酷いもんだな』

「…ああ」

『…本当に破損箇所が一つ…コックピットの部分にしかない』

『間違いなくプロだな』

素人にこんな芸当できるはずねえからな』

「……この傷跡…」

『…？…隊長、見覚えがあるんですか？』

「え、あ、いや。…ないよ」

『…そうですか？』

『それより搜索再開すつぞ！』

そついうとイチマサ機が奥の方に入っていく。

「あ、待つ……！……」

シユンの頭にさつきとは違う何かが走った。

痛みとは違う……

まるで風のようなもの…

「…！…まさか…！」

シユンがカメラを

イチマサのいる方向に向けると、…何かがいた。

電磁迷彩で

隠れていたが、シユンにはそれがMTであることがすぐにわかった。

「イチマサ！！後ろに下がれ！！」
シュンは通信機に叫んだ。

『ど、どうした？いきなり』

「いいから下がるんだ！」

『だから何だつて…』

…頭の中で感じた風が…イチマサの周りで
吹き始めた。

瞬時にイチマサはシュンの命令の意味を悟った。
「…風…なるほど、な」

一人で納得しながらイチマサは両手で剣を構える。機体の中央に剣
を構える正眼の構えで
まだ見えぬ敵を待ち構えた。
イチマサは目を閉じた。

「……………」

電磁迷彩で見えないとはいえ、
実体はそこにある。

その気配を探っていた。（……………いるな…右…）

うつすらとだが、
閉じた眼の暗闇に敵の姿を捕らえ始めた。
右周りから

音もなく近づいてくる敵
静寂が流れる…

後ろに控えるシュン達はそれを見守るしかない

その一瞬の静寂はすぐに破られた。

影は右手を大きく振りかぶり、イチマサに襲いかかった。

狙いはコックピット一点

「……そこだ!!」

右手前に出された

イチマサの両手剣と高熱によって鋭利な刃物と化した見えない物体が
甲高い音を立てて重なり合った。

シュンは状況を把握し、その一部始終を冷静に見ていた。

しかし、後ろに控えていた二人はまだ何が起きているのか把握で
きてはいない…

「ハヤテ!!イチマサ機の手前にトリモチ発射!」

『!…は、はい!』

ハヤテは指示に従い、
マシンガン下部に装着されたランチャーからグレネード弾を発射し
た。

発射された弾頭には

トリモチと呼ばれる粘着質の物質を

着弾地点にばらまく特殊弾頭が装備されている。

放射線を描きながら

トリモチが敵に向かう。

それに気付いたイチマサと影はお互い距離をとる瞬間、二機のいた地点に粘着物質が散らばった。

『あぶねえ！おい！』

「文句は後だ！！くる！」

影は大きく円を描きながら樹木の間を疾走する。見えないが、気配でわかった。

『逃がさない！』

瞬時にリンが肩部に装備された赤外線式ミサイルを発射する。見えないとはいえ、

MTは常に熱を帯びている。

指定された熱量……

MTのいる地点に向かう

しかし、影はそれをいとも簡単にかわし、リン機の懷に飛び込む。

『そんな……！！』

懷に飛び込んだ影が

死に神の右手を振り下ろす。

「やらせない！！」

それをシュンが間に入りシールドで受け止める。

効果がないと瞬時に判断すると、影は森林に姿を隠す。

『……一撃離脱か！』

「各機！一斉射撃用意！」

シュンの命令に

イチマサは

肩部装備のバルカン砲をハヤテは
両手で持っていた
マシンガンを

リンは

右手のライフルを構えた

「当たらなくていい。

弾幕を切らすな！……てえ！」

辺り一面に豪音が響く。

その後方……

樹木の間からその戦闘を観察する一団がいた。

「……始まったね」

眼鏡をかけた若い男が独り言のようにいった。

「…はい」

「今回はいい記録が

とれるのかな？…昨日のようにすぐにやられたりしたらシャレにならないよ？」

「今回はこの国のIDFが相手です。警察とは
戦闘力の桁が違います」

「…ふん」

男は興味なさ気にあごに手を当てた。

「…彼の調子は？」

「精神状態安定。身体的負担も許容範囲です」

「ま、彼等にはできるだけがんばって欲しいものだね。ボクの最新作の為に」

男は笑みをうかべて

目の前で起きている戦闘に目を移した。

戦いは始まったばかり…

FILE・06 影と予言者 前編

…樹海…

数多の樹木が整然と立ち木々の葉と葉が風で
ざわめく音が
その名の通り
海を連想させる。

その小さいながらも
巨大な海の音だけが、
辺りに響いている。

突如、その音は遮られた。爆音と豪音によって

「…てえ!!」

シユンの指示の元、再度四機はそれぞれの武装で影を狙う。しかし、
電磁迷彩を施した影には当たらず
銃弾は空しく辺りの木々に銃創を穿つ

(…く…電磁迷彩の精度も機動力もスオウ以上…どうすれば…)

その思考の中でも影は
容赦なく襲いかかる。

『このやろっ!』

イチマサが両手剣を横なぎに斬りつける。

しかし、影はダッキング（上体を沈める動作）

してかわし、その反動を活かしてハヤブサの脚部に蹴りをいれる。

『おわっ！』

その一撃に耐えられず、機体はバランスを崩し、仰向けに倒れた。
そこに影は右手を突き出す

『イチマサさん！』

ハヤテが影にマシンガンを掃射する。

影はそれを横に移動しながら身を隠す。

『すまん…』

ハヤテに手を貸してもらい、イチマサ機は立ちあがった。

それを守るようにリンがライフルとミサイルで

牽制する。

（…形勢は、不利か…）

シユンは二人を庇うようにライフルを構えながら思考を巡らした。

「…ライン」

『はい、マスター』

すぐにラインが余っている画面に表示される。

「ゴースト起動頼む」

『了解しました』

「全機！下がってくれ」

スオウはゆつくりとその場から消える。
代わりにリーダーや樹木の間にもダミーが現れた。シユンはそれらを左右に展開しながら影に接近する。

(…これなら…!…)

しかし、影は予想外の行動を見せる。

ダミーを完全に無視し、ある一点に突っ込む。

そこには電磁迷彩で

消えているはずのスオウが

「…くっ!」

シユンもシールドに装備されていたブレードを片手に影に突っ込んでいく

二つの斬撃音が響く。

『おい!大丈夫か!』

「…何とか」

その数秒後、姿を消していたはずのスオウがハヤテ機の近くに現れた。

腰の部分に先程の斬撃の傷が見られた。

ホログラムも全て消えていく。

『隊長!機体の状況は?』

「…ゴーストの中枢を

やられたただけだ。まだいけるはず…」

『ゴーストを!?!』

「でも、状況は相手も同じさ」

『???』

三人が首を傾げたその時電気の弾けるような音が正面から聞こえた。四機の前でうつすらと見えていた影が消え、MTが姿を現した。

…漆黒の鎧を着たようなMTだった。

右手には熱伝導式の レーザーブレード…

左手には楕円形の

複合装甲式シールド

(装甲の一種で、防弾鋼板の間にセラミックや複合材などで複合的に強度を向上させたもの)

まるで中世の騎士を思わせる風貌だった。

しかし、右胸部の傷跡がその機体の風貌を大きく損なっている。

『あれが…敵』

「ライン。あいつに該当する機体は?」

『該当する機体なし…』

新型か実験機の可能性が高いです』

「実験…機…か」

しかし敵は考える暇を与えず動き出す…相手は機体につけられた傷を見ると、怒り狂ったように襲いかかってきた。

「全機!回避しろ!」

スオウは後方に大きく下がる。それに従い三機もそれぞれ回避する。

影の鋭い刺突は四機のMTではなく苔の生える地面に突き刺さり、地響きを立てながら粉塵を中に舞わせる。

「……っ！」

地響きが止み、

粉塵が消えるとそこには直径数メートルにも及ぶクレーターができ、その中心にまるで息を整えるかのように影はいた

『なんて力……！』

『くそ……化け物め……』

イチマサやリンの声はあまり変わらないが、言葉の端々に恐怖が滲んでいるようだった。

ハヤテはというと恐怖で声も出ない様子だった。三人は影の力にその場から動けない

「……各機！一斉射撃用意！ハヤテ！冷静さを失えば死ぬぞ！」
しかしシュンだけ銃を影に構えながら冷静に指示を出す。

「ハヤテ……！」

『……り、了解……！』

「……リン！君はオレを倒す前に死ぬのか？」

『……！』

「オレに勝ちたいなら
生き残ることを考えろ！いいな！」

『馬鹿にして…』

リンは怒りをあらわにしたが、いくばくか冷静さを取り戻している様子だった。

「敵を近づかせるな！

構え！……てえ」

それぞれの武装が火を吹いた。発射された銃弾は影に向かう。

しかし、影は旋回してそれらをかわし、じわじわと近づいてくる。

三機もそれに追従して

影は狙う。

銃弾は影を正確に狙っているが、そのほとんど空しく木や地面をえぐるだけ。

それに構わず、影は四機の中央に突っ込み、ブレードを横一線に斬りつける。

『おわっ！』

イチマサは斬撃を間一髪でかわしたが、腰部に大きな傷ができる。

『かすっただけなのに、この威力かよ！』

イチマサは影と距離を取りながらバルカン砲を掃射するが、影はすぐに樹海の間に隠れ、チャンスをつかっている。

後方の二人はイチマサに習い、銃で影を牽制する。味方の銃撃音を響く中、シュンは一旦後方に下がり、状況を確認していた

「ライン。現状での勝率は？」

『皆さんの機体の損耗率、残弾数を計算。
敵の現在把握している戦闘力で比較致しますと
…最高で20%です』

「…本当？」

『はい。本当です』

その間にも三人が影に掃射する。

しかし、その攻撃も影の前には効果がない。

シユンは少しうつむいた後、

決意を固めたように眼前の敵を見据える。

「…プロフェット起動頼む」

『…拒否します』

「ライン…」

『…こんなことAIが言うのはおかしいとわかっています、しかし…
…私は…マスターが苦しむ姿をこれ以上見たくはないのです』
今まで無表情を崩さなかったラインの顔が苦しそうに歪んだ。

「…オレは、誓ったんだ…あの時…

今度こそ仲間を守り抜くって…彼女に…

だから、お願いだ」

シユンは澄んだ目で

ラインを見据える。

『……………』

ラインは悲しそうにうつむき、画面から消えた。
その代わりに画面には新たな文字が表示された。

〔Prophet

System〕

「……ごめんな」

そう呟きながら、シユンはシステムを立ち上げていく。

「Startup OK?」

その画面に表示され、

その横のスイッチが点滅する。

「…守るんだ…」

シユンは歯を食いしばり、スイッチを押した。

「…く…うあ…」

鈍器で殴られたような衝撃と電気が弾けるような音がしたと思つて、体中に激痛が走る。それを言い表すなら、

電気椅子……

痛みにシユンは呻く。

声にならないほどの小さな声で、

それも一瞬…痛みはすぐに消えた…

シユンはゆつくりと

息を整える。

「……守るんだ…」

ゆつくりと

顔を上げていく

その顔にはいつもの

やわらかな表情のシユンはない。

しかし、額には冷たい汗が滲んでいる。

「…絶対…に！」

シユンが目を開くと

そこには黒色の目はない…あるのは…

澄んだ碧…

スオウは動き始めた。
プロフェット……
予言者といわれる力と
仲間を守り抜くという
絶対意志の元に……

FILE・07 影と予言者 後編（前書き）

セリフ等、誰が言っているのわかりにくくなっています。御了承ください
m (m

FILE・07 影と予言者 後編

……なんだ……嫌だ……
……痛い……何なんだ……
……この……感じ……

そこは影のコックピット赤い非常灯しか点灯していない薄暗い中
パイロットは今まで

感じたことのない恐怖に感じていた。

コックピット内の電子機器と繋がっている

ヘルメットでその表情は見えない

その間にも、

彼を狙う銃撃は止まないしかし、それを

彼は

軽々とかわしていく

……なんで……攻撃………してくるんだ……
……殺したくないのに………助けてほしいだけなのに……

無意識の内に

叫んでいた。

彼はそれを知らない。

機体もまたパイロットに合わせて同じ行動をとっていることを

彼は知らない。

ヘルメットが覆っていない首すじに何かが流れていくのも、
彼は知らない。

三人は、いきなり影が
叫び声をあげたことに
驚愕していた。それは、ただの排気音だったかもしれない。
しかし、彼らには（叫び）に聞こえる。
いや、叫びに聞こえた。

その影の叫びも一瞬：
スピードを上げ三機に襲いかかる。

「う、うわああ！」
ハヤテは絶叫しながら、マシンガンに影に乱射
する。リン機とイチマサ機も同様にバルカン砲、ライフルが火を
噴く。

しかし、銃弾は掠ることさえなく地面や樹木に当たるだけ。
影には当たらない。
じわじわと距離を詰めてくる。

イチマサはバルカン砲の掃射を続けながら、
影を見る。この銃撃の中確実に近づいてきている
経験と勘が告げている。勝ち目はない。一旦、
引けと言っている。
幾多の戦闘で

勝ちをおさめてきた武人であるイチマサにとって苦渋の決断だった。
(データは…ある)
戦闘データの入った端末に目を移し、通信機を起動する。

「…一旦、退くぞ」

『…それが良策ね』
リンもそれに賛同した。しかし、その声には悔しさが滲んでいるように聞こえた。

『……………』

聞いているのかいないのかハヤテはなにも言わなかった。
シユンにかぎっては通信さえ繋がっていない

回避ばかりしていた影だが銃撃の弱い所を見つけ、そこから斬り込んでくる。

「くるぞ！緊急回避！」

二人は銃撃を続けながら後退していく。
しかし、ハヤテは退かなかった。

「…はあ、…はあ」

ハヤテは
度重なる影との攻防で
疲労と恐怖によって完全に冷静さを失っていた。

『ハヤテ！！退くんだ』

『ハヤテ!』

通信機からはリンやイチマサの怒声が響くが、ハヤテには聞こえない。

聞こえるのは、苔の生い茂る地面を走る、死神の走行音

「う…」

じわじわとその音は近づいてくる。

「うわあああ!!!」

マシンガンによる

近距離掃射…

通常規格のMTなら

避けきれずに

一瞬にしてスクラップになることだろう。

しかし、彼の目の前に

いるのは影…

いとも簡単にそれを

横にかわす。

数秒後、マシンガンの

銃撃が止まる。

(弾切れ!?)

すぐさまハヤテは弾倉を取り換えようとするが、うまくいかない。

「くそ！……！！」

目の前に見えるのは

黒い影…

懷に飛び込まれていた。

「ひ…」ようやく装填に成功したマシンガンを構えたが、影によって弾き飛ばされる。

「……………っ！」

ハヤテは目を見開く。

目の前から向かってくるのは影の右手。それがコックピットに達するとき、ハヤテはこの世の存在ではない。

思わずハヤテは
目を閉じた。

『ハヤテ！！！！』

イチマサの叫びが響く。

甲高い金属音が辺りに響いた。

ハヤテは恐怖でなおも
堅く目を閉じていた。

しかし、死んではない。

『…ハヤテ。もう…大丈夫だ。落ち着いて、敵を見るんだ』

その声に反応して、

ハヤテは目をゆっくりと開けた。

そこには右手のレーザーブレードを振り下ろそうとしている影とそれを受け止めるスオウの姿があった。

「隊長…！」

『ここは下がってくれ』シュンの声が、通信機越しにコックピットに響くしかし、その声はいつも見せる優しいものではなかった。冷たい、無機質の声…

小さいながらもそれは、シュンのものであり、決して、

有無を言わせない意志の強さを感じた。

『早くするんだ』

「は、はい！」

ハヤテはそれに従い、イチマサ機とリン機にいるポイントに下がっていく。

再び、甲高い音がし、影とスオウは大きく相手と距離を開ける。しばしの静寂……

二機とも相手の出方をうかがっているようだった風が吹き、枯れ葉が一枚二機の間を舞う。

それが、ゆっくりと地面に落ちた。

その一瞬、

二機とも姿を消し、刃が重なり、先程までいた位置を逆転した状態で現れた。

二機ともに目立った外傷はない。

そして、再び消える。

『！？』

『消えた！？』

「速い…速すぎるんだ」
ハヤテの正直な感想だった。
目にも止まらぬ速さ…
その表現が適切であろう
見えるのは微かに残る
残像…、そして斬撃音、

三人はただ、それを見守るしかなかった。

シユンはその碧い目で、全てを見ていた。
異常な速さで迫り、
強大な熱量で鋭利な刃とかしている右手を振りかざしてくる敵の動き…

それをなんなくかわしながら、
次の行動を選定する。
脳内に数十の行動パターンが表示され、
一瞬にして決定される。その行動を実行に移す。 選定から実行までかかった時間は0.5秒以下…
それが今のスオウの反応速度を飛躍的に上げていた。

その驚異的な速度に
影も追従している。

スオウのシールドに装備されている刀を模したソードを抜き、斬りつける。影はその斬撃を左に傾けて避け、刺突を繰り出そうと右手を構える。

しかし、それが繰り出される前にシユンはスオウの左手のシールドを盾にして突っ込ませる。

影はそれに構わず、刺突を繰り返す

「うおおお!!」

鈍い音が響く、

無謀にも見えるその

体当たりを食らった影はバランスを崩しながらも後退する。

しかし、スオウは一早く体勢を立て直し、右手のライフルを構え、引き金を引く。

銃撃音が樹海に響く。

二機の動きが止まる。電気の弾けるような音が響いていく。

音の先は影…

よく見ると左腕の関節部と壊れて原形のなくなったマニピュレーターから火花が散り、

血のような赤いオイルを流している。

スオウもまた損傷していた。シールドに開いた穴。影の刺突に耐えられず、左胸部のサブ・ラジエーター（冷却装置）を貫いていた。

「…もってあと一撃か」

シユンは冷静に機体の

損傷を見ていた。

サブとはいえメインのラジエーターだけでは機体の冷却は完璧ではない。できなければ、自然に機体の熱は内部にたまり、オーバーヒートを起こすそこに一撃食らえば、爆散する。

しかし、相手も状況的に同じだった。

左腕は使えないだけで、それほど支障はないように見えるが、

スオウの速度に追従してきたことにより、
内部機関はボロボロだった。

「なら、この一手で決める」

スオウは残弾のなくなったライフルとシールドを捨て、ソードを両
手で構える。

影はそれに合わせ、右手のレーザーブレードを展開しながら、
姿勢を低くする。

再びの静寂…

彼らの遮るものはない

何かを待つように二機は微動だにしない

しかし、

その静寂は破かれ、

彼らは同時に動いた。

二機は肉薄し、それぞれの刃を交差させる。

甲高い斬撃音と共に、

二機は交差し、現れる。

再び向かい合う二機。

しかし、突如

一機が倒れる伏す。

影だった。その機体には 胸から腰に至るまでの大きな傷が残され
ていた。影のわずかに残されたアイカメラの光も静かに消えた。

「…詰み、だな」

ほつとしながら微かに
シュンはささやいた。
そしてゆつくりと

プロフェットを解除した解除するとすぐに目の色は元に戻った。
その瞬間、体にだるさと眠気が襲いかかってきたそれに耐えながら、
シュンは通信機に呼びかけた

「…各機。聞こえるか？」

『……………』

「…？…イチマサ？」

『…！…お、おう！』

「悪いが…後は…頼む」

『え？あ、おい！？』

その問いに答えられず、シュンは深い眠りの中に入ってしまった。

「……どういふことです？」

先程までご機嫌にその
戦闘を見ていた

若い男は自慢の作品が
倒れるのを見て、
不機嫌そうに言った。

「そ、それは」

後ろに控えていた白衣の一団は言いごもってしまい、何か罰を受けるのではないかとびくびくしていた。

「…まあ、いいでしょう。パイロットも中途半端だったし、相手も悪かった。実験データとしては…上出来だからね」

その一言に一団は揃ってほっとした。

「レーク様。実験機は…シャドウはいかがされますか？」

「決まってるじゃない。回収は絶対だよ」

男：レークは携帯を取りだし、画面を見ながら言った。

「わかりました」

それを聞くと、彼らは

撤収の準備に入る。

「あ！それと、パイロットの（廃棄）とあの小隊のこと調べておいて」

「IDFの小隊の、ことですか？」

「ああ。なぐんか引つ掛かるんだよね。あの動き。面白いことがわかるかもしれないからね」

「…わかりました」

再びレークは携帯に視線を戻した。その表情には不機嫌さはなく。まるで面白い玩具を手に入れた子どものような表情だった。

その時は
オレ達も、彼らも
知らなかった。

その影…シャドウの
パイロット…が
これから始まる戦いの
鍵を握ることになることを、

停止したシャドウのコックピットで、パイロットは気を失っていた。
何かの拍子にヘルメットは外れた。
パイロットの顔…

それは
まだあどけない表情をした少年のものだった。

少年は眠る…
暗い暗い闇の中で…

FILE・07 影と予言者 後編（後書き）

いやあ結構書きましたが、未だに小説の書き方がよくわかりません！アドバイスがありましたらぜひおしえてください！！m（――）m

FILE・08 懐かしき夢（前書き）

大変長らくお待たせして申し訳ありませんm（――）mこれから
できるだけ早く更新できるようにがんばりますのでぜひ読んでくだ
さい

FILE・08 懐かしき夢

夢を見ていた。

闇…夜の砂浜

誰かが立っていた。

自分だ…

暗い海を何をするでもなく静かに眺めていた。

(…ここは…あの時の)

そう思いながらシユンは立ち尽くす自分を見る。

まだ幼さが残る若い自分がいた。

暗くてどんな表情をしてどんな服装をしているのかわからない。

それを見ていると、砂を踏み鳴らしながら、誰かが近づいてきた。

「チビさん。何してるんです？」

暗くて顔は見えないが、声と口調でその人が誰かわかった。彼女しかない。シユンをチビ呼ばわりするのは一人だけだったからだ。

「…なにも…」

幼い自分は見もせず、

ぶっきらぼうに言い放つ

「そうやって、会話をぶつ切りにするのはよくないですよ」

彼女は横に並び、海を見る。

見るといっても暗くて

ほとんど何も見えない。波の音だけがイヤに響いてくる

「……………」

しばしの沈黙が流れる。

「…チビさん？」

それを破ったのは彼女だった。自分は少しだけ顔をそちらに向ける。

「あなたにとつて…」

正義… ってなんですか？」

「…正義…？」

自分は聞き返す。

「うん。正義…」

自分は少しだけうつむきものの思いにふける。

そして、まとまった考えを言葉にして口に出す。

しかし、聞こえない

そこで急速に視界が真っ白になり、再び眠りについた。

目を開けると

明かりがなく少し暗い。病室のようだった。

（…そつか…オレ、コックピットで…）

頭を横にして、壁に付いている時計を見ると、あの戦闘から数時間がたっていた。

（…報告…しないと）

シユンはゆっくりと上体を起こしにかかる。

（……っ）

少しばかり体と頭に痛みが走るが、それは無視した。

（やっぱり… 負荷は大きいな…）

上体を起こし終わると
今度はベットから下りようと試みる。
下りようとした矢先、
部屋のドアが開いた。

「おや…気付かれたようだね」
入ってきたのは一人の若い男だった。少しやせ型で長身。伸ばした髪は後ろ髪を一つに束ねて繋いでいて、少し丸みが付いている眼鏡の奥の眠そうな目付きが特徴的だった。

「…また世話をかけたようだな。カツラギ」
シュンは苦笑をその医師に向けるが、疲労のせいなのか心なし弱い形の苦笑になった。

「気にするな。それよりまだ横になっていてくれ。ラインに怒られてしまう」
そんなシュンを手で優しくはたいてベットに横たわらせる。

「…ラインが知らせたのか？」

「ああ。お前が倒れた後、すぐにオレに連絡してきてな…それでラインがここにそのまま連れてきたんだ」

「そのまま…ってスオウでか!？」

「もう大変だったよ。危うく通行人にぶつかりそうな勢いだったから」

「あいつ…」
そっぴいながらシュンは頭に手を置く。

「まあいいじゃないか。それだけ主人思いつてことなんだから」
あんまり怒るなよ、と付け加え、軽く笑いながらカツラギはシュンの肩を叩く。

しかしそれに対し、シュンは顔を曇らせる。

「…カツラギ」

「ん？どうした？」

「…オレは…あと…どのくらいもつかない？」

その一言にふざけ調子だったカツラギの表情が一気に真剣になる。

「…どのくらい、か」

カツラギは少しうつむき考え始める。

「お前と同じ症例を持つ奴は少ない。確実にはわからん…ただ…」

カツラギの目が一瞬鋭くなり、シュンを見据える。

「前に検査した時より身体能力は落ちてきている。少しずつだがな」

「……………そうか」

「…とりあえずは抑制剤を投与しての様子見だ。今日はここで休め」

「でも…報告が」

「報告ならオレが明日にしてくれと言ったから大丈夫だ」

「機体の整備もあるし」

シユンはなおも食い下がる。

「ダメだ。プロフェットを使えばどうなるかわかっていはずだ」
カツラギは少し問い詰めるような口調で話す。

「…すまない。でも！あの状況では…」

「仲間を守りたい気持ちはわかる…だが、オレはお前の主治医のつもりだ。無理はさせたくないんだよ。それに、そんなにお前の仲間はやわなのか？頼りないのか？」
シユンはその問いに詰まってしまった。

「お前は強い…しかしその半面、弱いんだ。
あの時のことは忘れる。お前の責任じゃないんだから」
しばし、沈黙が流れていく。

「…じゃあ今日はゆっくりと休めよ。オレはいくからな」

「……………ああ」

カツラギは部屋から出ていき、再びシユン一人になった。

「…違うよ。カツラギ。」

オレの責任…罪なんだよあいつを…守れなかったのは」
手で顔を覆い、シユンはうなだれる。

その間に太陽が消え、闇が深くなっていった。

FILE・09 逃走開始（前書き）

かなり遅れてしまいすいません。…しかし、評価がない作品を書くのもつらいものがあるような気がしてなりません。（T―T）評価待ってます…

シュンが支部に向かったのは戦闘から丸一日たった昼過ぎのことだった。

まだ体はつらかったが、ハヤテ達や

あのMTのパイロットのことが気になり、支部に連絡を取ろうとしたが

生憎、

彼の診療所は山合いにありシュンの携帯は圏外、さらに診療所に電話線はおるか連絡手段が何もなかった為、

カツラギに無理を聞いてもらい、

彼から借りたスポーツタイプのバイクで診療所をでて数十分がたとうとしていた。しかし、いっこうに家一つ見えず、道路の両端に樹木が生い茂っている光景にシュンは少し不安になってきていた。

「…カツラギの奴…」

いったいどんなところで開業してるんだよ」

シュンはぼやきながら、やたらと長いカーブを曲がっていく。

いつまでも森ばかりしか見えない景色に苛立ちながらもシュンはひたすら走らせる。

そのようなカーブをいくつか抜けると、ようやく

市街地が小さくではあるが見えてきた。シュンは少しほっとし、スピードを上げ、カーブになっている道を疾走していく。

カーブが終わりに近づいた

その時だった。

道路脇の森から黒い影が飛び出してきた。

「…っ！！」

シユンは咄嗟にバイクの重心を変えて、それを間一髪でかわした。だが、急な重心移動でバイクはバランスを崩し、大きな音を立てて横転する。

シユンは道路脇の草木の生い茂る地面に投げ出された。それでも衝撃は治まらず3回転して木の幹にぶつかりようやく止まった。

「……………っう」

ぶつかった箇所の強い痛みが目が霞み、意識を失いそうになったが、シユンはそれを堪える。

体の状態を調べる。幸いにもたいした怪我はなかった。

確認を終え、木を支えにしながらゆっくりと立ち上がる。

いったい何が飛び出して来たんだ？とシユンは辺りを見渡す。

飛び出してきた正体はすぐに見つかった。

（人か……………って人！？）

もしかしてひいてしまったのかと思い、慌てて近づいて怪我が無いか確認する。

ひとまず素人目では外傷はないこと、小さいながらも肩が上下に動いているのにひとまずほっとした。そこでシユンはようやく倒れているのが少年だと気付く。

（…子ども？…とにかく起こさないと）

シユンは少年の肩を揺すり声をかける。

「おい！大丈夫か？」

すると少年はゆっくりと目を開け、体を起こす。

「よかった…生きてた」少年が目を覚ましたことにシユンは安堵し、大きく息を吐いた。

「えっと…君の名前は？」

シユンが少年に疑問を投げ掛ける。

しかし、少年は一言も発しない。

「わかる？君、の、名前？」

少年の目はシュンを見ているが、ジェスチャーを交えたかあまり理解できていないようだった。

「……わからない、か……しょうがないな。使いたくはなかったけど」
そういうとシュンは右手の革製の手袋を外す。

少年は何をしているのかわからないままこちらを見ている。
そこにシュンは左手で少年の右手を差し出させる。

「……ちょっと痛いぞ……って通じないか……」
そういうと右手をシュンは掴んだ。

「……！」
強い静電気のようなものが流れて少年に伝わる。少年は驚いてシュンの手を払いのけた。

「……」
少しの間、沈黙が流れる。しかし、少年の敵意を抱いた鋭い視線はシュンに向けられている。

「……驚かせてすまない」
先に口を開いたのはシュンだった。しかし、発した言葉は日本語ではない。少し発音はおかしいが、まぎれもない独逸語だった。

「言葉……通じるだろ？名前、教えてくれる？」
言葉を発した先にいた少年は驚いて目を丸くしていた。

「……あれ？発音がおかしいのかな？」
シュンは少し、不安になる。彼は正直な所、苦手な項目の一つに外

国語があつた。嫌いではない、筆記等そこそこできてはいるのだが、まったく外国語の発音ができない為、会話を成立させる自信がなかった。

「えつと…君、の、名前、を、教えてくれる？」

日本語なまりの発音で単語で区切って再び少年に問い掛ける。

「…ミカサ」

少年はぼそつと一言だけ小さく答えた。

「ミカサ？」

「…名前。…ねえ？」

少年…ミカサは話し掛けてきた。もちろん独逸語でしかもかなり早口だ。

「…えつと…なんだい？」

「何で僕が独逸語を喋れるってわかったの？」

そうなのだ…ミカサにとってなぜシュンが手を触っただけでわかったのが理解できなかった。

シュンはというと早口で言い放たれる独逸語を理解するのに苦戦し、数分を費やした。

「…ああ。それは…」

そう言いかけたとき、遠くから車の走行音が聞こえてきた。音の方を見ると黒いセダンタイプの車が2台、こちらに向かってくる。

（こんな山道に何であんな車が？）

そう思った瞬間、腰に強い衝撃を受けた。
ミカサだ。

どうした？とシュンが聞こうと顔だけそちらを向こうとした。

「僕を助けて…あいつらに捕まったら、殺される」

「！！」

そういつたミカサの手は震えていた。シュンは少し迷った。

理由はわからない。今会ったばかりで素性もしらない。関わらない方がいい、という思考が芽生えてくる。

…だが、シュンには見捨てられなかった。

「…自分が嫌になるな…ミカサ。助けてほしいのか？」

ミカサは黙って頷く。

「…わかった。よし！いくぞ！」

そういつてシュンは彼を連れてバイクに向かう。それに気付いた車はスピードを上げ、突っ込んでくる。

なんとか態勢を立て直し、エンジンをかけ直す。少し変な音がしたが、それを無視して予備のヘルメットを取り出し、ミカサに渡す。受け取ったミカサは慣れない手つきでそれを被り後ろに乗る。それを確認すると、一気にアクセルを全開にして走り出した。

「しっかりとかまってるよ！！」

バイクはスピードを上げ都市部に通じる下りを疾走していく。

その逃走劇は

まだ始まったばかり…

FILE・10 逃走は成功…したが（前書き）

携帯の破損などいろいろ重なり長い間更新できませんでした。本当にすみません！これからはできるだけ早く更新できるよう頑張りますのでよろしくお願いします！

FILE・10 逃走は成功…したが

陽が暮れ、
暗くなり始めた道、

その未だ続く無音の山道を一台のバイクが閃光のように走り抜ける。

「ちい！しつこい！」

シユンが悪態をつき、後ろをみる。

後ろには

二台の車がバイクに負けぬ速さでバイクとの距離を縮めようと走り抜けていく。

逃走開始から約10分……

その間、距離は一定に保ち、

シユンはバイクを走らせていた。敵が近づこうとするなら牽制をかけて、遠ざけながらバイクを走らせた。

しかし、先ほど見えていた市街地は再び消え、山あいの光景が延々と続いていた。

「まだ着かないのか…」

シユンは苛立ちを抑えながら、後ろで振り落とされぬよう必死に自分に捕まっている少年、

ミカサを見た。ヘルメット越しの視線には青黒い恐怖の色が染み付いていた。

（彼だけでも守らなければ…でもどうすれば…）

そんな思考が一瞬の隙を作り出してしまった。

「シュン！！」

ミカサの叫び声と大きなスチール音が鳴り響き、シュンは思考の世界から引き戻された。

その方向に振り向くと、一台がバイクの前方に回り込み、後ろにもう一台がつき、挟み撃ちの格好になっていた。

シュンは少し動揺しながらも
どうすればこの状況を打破できるか必死に考えようとした。

しかし、相手は考える時間も与えてはくれず、窓から何か黒い物体を構えた。
拳銃だ。

「くっ！」

シュンがハンドルを切ったと同時にガスが抜けるような音と共に、アスファルトに火花が散った。

「しっかり捕まってるよ！」

そういうとシュンはハンドルをジグザグに切り、バイクを左右に揺さぶり始めた。

銃弾を避けるための苦肉の策だった。

狙いを正確につけられなくなった彼らは今度は車の速度を落とし、バイクに接近してきた。

それと同時に後方で追従していたもう一台がスピードを上げてきた。

（車をぶつけて俺たちを潰すつもりか！）

徐々に近づいてくる二台。

揺さぶりを止めれば銃弾。

この絶対絶命の状況の中で、シュンはまだ幾分冷静さを取り戻していた。

どうすればこの状況を切り抜けられるのか…

周りに視線を巡らすが、樹木ばかりでなにもない。

（どうすれば……？…待てよ）

…ふと目の前の車両に目を向けた。少し車体が改造されているが、普通の乗用車、しかし、シュンはあるところに目を付けた

「…どのみち…このままじゃちがアカないからな…。一か八かに賭けてみるか」

そう呟くと、シュンは懷に忍ばせていたあるものを取り出す。

「ミカサ！！」

ミカサが顔を上げ、掴まっているシュンを見る。体格とバイクに乗っている状況の為、背中しか見えない。

「俺を信じて、しっかり掴まっているよ！！」

拙いドイツ語で叫ばれる言葉

「信じろって何を…ってうああ！！」

急に爆音を響かせ速度をあげ始めたため、振り落とされそうになりながら、さらに力を込めてミカサはシュンのライダースーツをしっかり掴む。

スピードをあげ、突っ込んでくるバイクに前方を封鎖していた車両を運転している人間、そして銃を撃った人間はこの行動をやけをおこしたと思い、あざ笑った。

しかし、近づくにつれライトでハッキリと運転している人間を見えたとき、彼らの笑いは消え失せた。

彼らが見たもの。それは拳銃を構えるシユンの姿だった。

二人はすぐに行動をとる。

1人はハンドルを切り、

1人は銃口をシユンにむける。

しかし、時すでに遅し。

彼らが行動を実行に移す前にシユンの拳銃が火を噴いた。

二発の銃声が響き渡る。

銃口を向けた男は、恐怖で目が見開いていた。

シユンをしとめるため、後部ガラスの一部を外し、車両の正面にいた。一番照準がつけやすかったからだ。しかし、それは相手も同じだった。…撃たれた。男はそう思ったに違いない。しかし、体を触るがどこからも血は出ていない。

一瞬、何がおきたか訳が分からなかった。

だが、何がおきていたが、彼はすぐに思い知らされる。

車体が突然、大きく揺れた。

車体の外を見ると、後部からおびただしいほど火花が散っている。

男はそれを見て、すぐに理解した。

奴は後部タイヤを撃ち抜いた。

シュンの狙いは初めからタイヤだったのだ。
狙い通り、タイヤを撃ち抜かれた車体は後ろに傾き、みるみるスピードを落として、バイクに近づいてくる。

「そこだああ！！！」

近づいてくる車両を見て、シュンは爆音を響かせながらバイクの重心を後方に傾け、前輪を引き上げた。
いわゆるウィリーである。

そのまま車両の後部に突っ込んでいく。
そして、慎重かつ正確に後部に前輪をあげ、車体全体をそのまま押し上げ、屋根をジャンプ台のかわりにし、飛び上がっていく。

「いけえ！！！」

飛び上がり、バイクは車両の前方へと通り抜けていく。
最後の悪あがきだろうが、男が銃を叫びながら乱射してくる。

その数発がバイクに当たり、火花を散らし、跳弾がシュンの肩を掠る。

「くっ……」

低いうめき声を上げながらもシュンはしっかりとハンドルを握りしめ、着地に成功させる。
スピードをやや落としながら、後ろを見る。

シュンが顔を向けると共に鈍い金属音が響いた。後方の車両がかわしれずぶつかった音だ。

それでも二台は止まらず、そのまま山道を外れ、一際大きな音を立

てて、大木にぶつかつた。
それを見たシユンはすぐにスピードを上げて、その場から去つていった。

シユンが去つた数分後、

大破し煙をあげる二台の車両から一人の男が額から血を流しながら、ひしゃげたドアをこじ開け、這い出してきた。

「くそ！こんなはずでは！」

その男は、車体に体を預けて、山道を見る。そこには小さな残光を残しながら標的を乗せたバイクが走り去っていく。

まさか車体を乗り越えていくなんて！民間人だと思っていた
相手が拳銃を所持していたなんて！

彼は知らないシユンがれっきとした軍人であることを…
そしてシユンが目を付けた部分、それが彼らの乗っていた車両のボディラインと車高の低さがこの無謀なるジャンプを可能であると一瞬で判断したことを…

それを知らずに彼は憎々しげに去っていくバイクを見送るしかかった。

シユン達が、ようやく市街地に着いたのはその30分後だった。指定された場所に煙をあげるバイクを止め、ヘルメットを脱ぎ捨てる

とシュンは携帯を取り出した。

「どこに連絡をとる気だ？」

後ろからミカサが降りてきて、声を掛ける。

「仲間にだよ…えつと電波は…あるな…」

そう呟き、耳に当てた瞬間、周りに爆音が鳴り響いた。

そちらを振り向くと、自分たちが乗ってきたバイクから黒煙が大量にあがっていた。

「…こりゃ…カツラギに泣きつかれるな…」

そんなバイクを見て、ふとため息をついて、シュンは呟く。

そんな中、夜の闇はますます濃くなっていった。

FILE・10 逃走は成功…したが（後書き）

今回カーチェイスまがいを書いてみましたが、どうでしたか？ご意見がありましたら是非お願いします。

FILE・11 微かな休息

…いい匂い。

最初にミカサの意識の中に
浮かんだのはその感覚だった。そして、その感覚はそのまま
空腹感につながっていった。

……お腹すいたな。

あいつらから逃げるのに必死に何も食べていないな。

昔みたいに母さんがいたらな…目が覚めたら目の前に食事が用意さ
れていた…

机の上にお皿が並んで、

そこからおいしそうな匂いがして…。

ミカサの目に、机の上に並んだ皿が見えた。

…そう、こんな感じ。

そこまで考えたとき、ミカサは目が覚めた。

慌てて体を起こしたミカサが、周りを見渡すと、きれいに整頓され
た部屋のベッドの上でだということに気づいた。

あれ？なんで僕こんなところにいるんだ？

それに……この料理は何？

呆然としているミカサの耳に、聞き覚えのある飛び込んできた

「ん…目が覚めたかい？」

シュンの声だった。

振り向くと部屋の中央に置いてあった椅子に座り、コーヒーを飲ん
でいるシュンがいた。

「ここは…どこ？」

「ホテル。君が疲れて寝てしまったから休めるようにってね。時間も時間だったし」

「ホテル？」

シユンは頷き、ミカサに食事を食べるように促した。

ミカサはいくつか質問したかったが、空腹と目の前の料理から漂ってくるおいしそうな匂いに負け、手近にあったスプーンとビーフシチューが盛られている皿を取り上げ、食べ始めた。そんなミカサをシユンは優しく微笑みながら見ていた。

「……ねえ」

ミカサが食事を食べ終え、渡されたミルクを飲んでいたミカサがこちらに振り向いて口を開いた。

「ん……？」

「どうしてあの時、僕がドイツ語しか喋れないことがわかったの？手に触れただけなのに」

そう、ミカサはそれが気になっていた。ミカサは名前の通り、顔つきは東洋系であり欧米人の要素は一つもない、それにあの時、自分は一言も喋っていなかった。

「……ああ。あの時か……」

シユンが手元のコーヒーに写る自分の顔を見ながらそっけなく答えた。

「俺はああやって、人に触れただけで心が読めるんだよ。記憶、思

考、その他いろいろね」

ミカサは驚いたと同時に不快な気持ちが生まれた。自分の記憶を他人に見られたんだと思ったからだ。

「ああ、大丈夫だ。君の記憶は見えていない。言語だけを調べさせてもらっただけ」

そんなミカサの気持ちを察したのかシュンは補足した。

「心を区別して読めるものなのか？」

「ああ。それにずっとしているわけではないよ。そんなことしたら自分が壊れてしまう」

「????」

ミカサは怪訝な顔でシュンを見る。シュンの顔には苦笑が浮かんでいた。

「人の心は…全てが美しいものではないということさ」

そう…人の心というの美しい部分以外に醜き部分、人に言えないような欲望が含まれている。

不平・不満・憎悪そんなものを四六時中、自分の心に入ってくれば、どんなに強い人でもおかしくなってしまう。

「…必要な時以外は、この能力を封じているよ。自分の心を守るためにね」

そういうとシュンはカップの中身を一気に飲み干す。そして真剣な眼差しでミカサを見る。

「…さて。俺からも二、三聞いていいかい？」

「何を？」

「君は何者だ？そして何故追われていた？」

その問いにミカサは黙って俯いた。やはり何かあるな、ふとシュンは思った。

「大丈夫だ…俺を信じてくれ」

真っ直ぐに自分を見据えるシュンにミカサは不安な表情で見返す。

「本当に…信じていいの？」

シュンは黙って頷く。

それを見て意を決したように話し始めた。

「僕は…パイロット、なんだ」

「パイロット？…何の？」

怪訝な顔でシュンは聞き返す。

「…MTのパイロット」

「…本当、なのか」

ミカサは頷いて、話を続ける。「僕は何かの実験体。いつもMTに乗せられ、…人を殺していた」

「MTの性能を確かめるため…にかい？」

「それもあるけど、その…そこで僕は研究員の奴らにこういわれたんだ（君には力がある世界の情勢を変えるだけの力が）って」

「力？」

「最初はわからなかったけどMTに乗ったらその意味がわかったんだ。…僕はMTと一体化して操れるんだと…」

話終わると同時に、ミカサはうつむき、顔を隠す。

（…彼が乗っていた機体。載せていたシステムはプロフェットの発展型だったのか？）

「…あの」

物思いにふけていたシュンは意識を引き戻し、ミカサを見た。

「なんだい？」

「あなたは…どうして、僕を助けてくれたの？」

「…どうしてだろうな」

そっぴいながら頭を無造作にかいた。

「なんていうか、困っている人を見捨てらんないだよ。それに…」

「それに？」

「なんとなく…外見じゃないんだが、昔のオレに君が似ていてね」

「似ている？どこが？」

「どこがつていわれてもな…わからない」

微小に笑い、ミカサを見る。

「…それはそうと、ミカサはこれからどうするつもりだい？」
どうするって？とミカサは聞き返す。

「君は狙われている身だ。できればオレたちの基地で保護したいんだが」

「……基地って。あなたは軍人なの？」

「…IDFのね。ダメかな？」ミカサは数分考え込んでいたがようやく答えがでたのか、顔をあげた。

「…いくあてもないから。シュンなら…裏切らない…そう思えるから。いくよ」

「…ありがとう」

その時、ホテルの正面方向から数台の車両が止まる音が響いた。シュンはすぐに拳銃を手に取り、窓から様子を見る。

「…ああ。大丈夫、迎えがきただけだよ」
安堵したようにシュンは拳銃を下ろす。

「迎え？」

「昨日、支部に連絡して、応援を呼んでもらったんだ。…それにしても多いな」

外の車両の数を数えながら、シュンは携帯を取り出す。

「…ああ。セレナ、406号室にいる。…わかった。了解」
携帯を切り、シュンはほっとしたようにため息をついた。

「ミカサ。迎えがすぐにくるから準備してくれ」

そういうとシユンは拳銃や荷物をまとめ始めた。それに従い、ミカサも所持していた少ない手荷物をまとめた。まとめ終わると同じくドアがノックされた。

「シユン。私よ」

それはセレナの声だった。

「今開けるよ」

ドアを開けると、ほっとしたような表情をしたセレナがいた。

「よかった。怪我はないようね」

「何とかね」

それにシユンは苦笑いして応える。

「…それにしても、その後ろの奴らは何だよ」

セレナの後ろにはIDFの護衛の隊員がいた。しかし問題はその姿である。

軽機関銃だけならまだしも、大口径ライフル、防弾チョッキ、腰のベルトにつけられたグレネードなど戦争に行くつもりなのかと言いたくなるような重武装だったからだ。

「落ち着いて聞いて。…反乱がおきたの」

「…反乱！？誰がそんなことを！！」

シユンはセレナに詰め寄り、聞いただす。

「…統一陸軍総司令官、オーガスタ大将よ」

シユンは愕然とした。軍の最高司令官たる人物が反乱をおこすなんて、信じられなかった。

「有り得ない」

「その有り得ないことが実際に起きた。これは大きな反乱……いえ……」
そこで言葉を切り、セレナは真剣な眼差しでシュンを見る。

「戦争になるわ」

FILE・12 宣戦布告（前書き）

もう内容がぐだぐだになってきているような気がします。 気になった点がありましたらどうかご指摘お願いします。

FILE・12 宣戦布告

オレたちが支部に向かう車の中、セレナが反乱の経緯を教えてくれた。

それはオレとミカサがあゝの逃走劇を演じていた時間帯。

突如、世界中のありとあらゆる情報伝達機関がジャックされ、一つの映像が流れた。

その映像に誰もが、驚愕した。それは、

統一陸軍総司令官オーガスタによる政府への宣戦布告だった。

統一国家の国旗の前に

陸軍の礼服を着て、

オーガスタは静かに立っていた。

やがて、目を開けたオーガスタは静かに言った。

「国民の皆様、私はかつてこの国旗のもとに、多くの将兵とともに軍人として、国家の平和を守ってきた。しかし！その平和にいかほどの価値があつたのだろう」

そこでオーガスタはゆっくりと右手を上げた。

「政府の絶対民主主義によりこの国は官僚が己の私利私欲を満たすための道具に成り下がってしまった。その結果、主権を有するはずの国民の権利は剥奪され、不当な圧力をかけられている」
オーガスタはゆっくりと付け足す。

「国民よ！国家はいつから一握りの人間のものになったのか！いつから信じるものの名を喪ったのか！
民を抑圧し、兵を差し向け、

殺戮することが統一軍の任務だということのか！

それがこの国の真の姿だというならばあえて言おう。
そんな国家など滅びてしまえと！」

そして、オーガスタは黙った。二呼吸ほどしてから
顔を上げたオーガスタは静かにそして力強く言った。

「私は戦う。政府にすべてを奪われた人々のために私は戦う。守る
べき国土や国民を失っても、私は私の理由で戦おう。

これは革命である！！

政府を打倒するまで我々の戦いは終わらない！」

「……この報道のあと、世界各地でオーガスタ派の部隊が電撃的に
一斉蜂起したの」

「オーガスタ派の戦力は？」

その問いにセレナは目は一層厳しくなる。

「全統一陸軍の8割、海軍、空軍の3割、そして一部のIDF支部
が参加しているの」

「IDFまで…反乱に加わったのかい！？」

「元々、オーガスタ大將はカリスマ性に長けた人物だったの、それ
に平民の出から総司令官という最高位まで上り詰めた人物。人望で
言っても、…彼の言葉を借りると欲深い政府のお偉いさんに圧倒的

に上」

「オーガスタ軍の分布はどうなっている？」

その問いにセレナはモニターに世界地図を表示させる。

「オーガスタ軍は、ヨーロッパ、中国、ロシア…要するにユーラシア大陸全土をほぼ掌握。あとアフリカ、二ホンの半分を占領下においているわ。無事なのは、オセアニアと南北アメリカ、世界が半分に割れたような状態って言えば早いかな？」

「二ホンはどんな状況？」

「東北地区と九州地区の全ての陸軍とIDF支部が反旗を翻し、残存した政府軍との睨み合いの状況。」

政府軍は現在首都であるキョウトに軍を集結させて、再編成を開始しているらしいの。

私たちの支部は政府軍の要請で東北地区からの進行を阻止する一大防衛拠点になったんです」シユンは一瞬眉を潜める。

「…要するに、再編成が終わるまでオレたちに盾になれてことかい？」

「統一軍は一気に総兵力の大半を失ったから頼りは私たちのような独立防衛組織しかいないですからね…」

セレナは苦笑まじりに呟く。

「…病み上がりの中尉には悪いんですけど基地についたらすぐに戦闘配備してください」

「…状況が状況だからね。わかった。…ミカサはどうしたらいいか

な？」

そういつてシユンはミカサを見る。日本語で話していたため、彼に今の話は通じていない。目線がこちらに向いたことにミカサは怪訝そうにこちらを見返す。

「こんな状況下ですし、一時支部に保護しましょう」

「それが現状では最良かな……」

支部方面に通じる道路を通っているとヨコハマの様相は随分と変わっていた。

高層ビル群の屋上には高射砲や固定型のミサイルランチャーが設置され、普段一般市民が使う駐車場には政府軍やIDF歩兵警備隊が使っている戦車や装甲車がずらりと並んでいた。

「彼らは先発隊として北越地方の防衛ラインに増強配備されるんです」

「この守りはどうするんだ？手薄になつてはこちらに攻めてくると思うのだが」

「大丈夫です。この都市は天然の要害で守られていますから」そこで彼女は表情を暗くする。

「核汚染……のおかげで東北からの進行はほとんどできないんです。トウキョウ周辺を中心にとても生物が近寄れない強い放射能を放つ地域のおかげで」

「…でも、なぜここは安全なんだ？ トウキョウはここから目と鼻の距離じゃないか」

「トウキョウが核攻撃を受けたとき、このヨコハマでは試験的に放射能除去シールド発生装置が設置されていたそうです。爆発の影響はかなりありましたが、こことその周辺、東海に抜ける数個の輸送路だけはかろうじてそのとき、放射能汚染から守れたんです」

「…それが唯一ここだけが生き残れた理由なのか」

「今も、都市はこの装置を補修、補強することでもかろうじて生きているです」

そんな話をしている間に支部に到着した。シュンはミカサをセレナに預け、すぐに格納庫にむかった。

扉を開けると、そこには見慣れたスオウとハヤブサ、数機の旧式MTが並んでいる。

その横にリュウトが若い整備員に対して、指示している姿を見つけた。

「リュウト！」

シュンが叫ぶと、リュウトはシュンに気づき、こちらに歩いてくる。

「シュン、やっときたか」

「イチマサたちは？」

そういいながら、周りを見回すが格納庫に彼らの姿はない。

「ああ…今、都市外周部で警備についている。放射線があるといっても警備くらいはしっかり行わないと何かおきたとき、後手後手に回ってしまうからな」

「すぐにオレもでるよ。準備してくれ」

シユンはそういうと、スオウに向かおうとした。

「いや、今日は待機していてくれ。派遣部隊の編成したことでここにあるMTは安上がりの旧式練習機しかないんだ。支部が襲撃されたら守りきれるかもわからない。そこでシユンには残って万が一に備えてほしい」

「…わかった。ここを守ればいいんだな」

「そうだ。…外部からの侵入は難しい、問題は内部の連中だ」

「内部…ってIDFや守備隊のことか？」

その質問にリュウトは頷く。

「オーガスタ大将のあのずば抜けた求心力はすげえよ。あいつのおかげでいつ離反者や反乱が起きるかわからないんだから」そういいながらため息をついて周りを見渡す。

リュウトの視線の先には、ベテラン整備員が若い整備員たちに罵声を浴びせ、騒音を響かせながら仕事をこなしていた。

「あいつらの中にも、オーガスタを支持している奴もいるだろう。そいつらをなだめて機体を万全の状態にしなければ勝てない。…正直、厳しい」

リュウトは俯き、再び大きなため息をつく。

そうなのだ。この世界の戦争において一番重要なのは物量でも個々の性能や実力ではない。

重要なのは軍の整備力、補給力などの兵粘能力である。

いくら、機体の性能があっても動かなければ意味がない。

いくら、兵士能力が高くて弾薬や食料がなければ動けない。

「とにかく、オレは整備に戻るよ。機体で待機してくれ」

「ああ。わかった」

シュンはスオウにハッチを開け入ろうとした。

その時、

施設の郊外から、大きな振動と共に爆発音が鳴り響いた。

「こちらシラミネ中尉。何が起きた！」

振動でハッチから振り落とされそうになったが、何とか捕まり、中に入り、通信機に呼びかける。

『こ、こちら通信指揮所。市内各地でオーガスタ派支持の連中が一斉蜂起した！各ブロックで交戦中！』

通信機越しに慌てたように若い通信兵の声が聞こえてくる。

すると今度は施設内部から爆発が起きた。格納庫内に緊急を知らせる警報音と赤いランプが点滅する。

『た、大変だ！施設内に多数の反乱部隊侵入！！く、繰り返します。施設内に敵部隊侵入！』

「何だって！？」

『ど、どうすればいい！？』

『どけ！！こちら通信指揮所のイタミだ！残っている各員につぐ！
白兵戦用意！！こちらから指揮をとる。各員緊急配備！！』

シユンはスオウから飛び出て、格納庫内にいた数人のパイロット候補生に近づく。

「オレ達も白兵戦に加わる。すぐに準備しろ！」

有無を言わせない迫力に押され、候補生たちはすぐに走り出す。そこに軽機関銃を背負ったリュウトが近づいてきた。

「リュウト。すまないがスオウや他の機体を頼む」

「わかった。…死ぬなよ」

シユンはそれを微笑で返し、準備の済ませた候補生と共に小銃を抱えて走り出す。

リュウトはそれを静かに見送るしかなかった。

FILE・13 白兵戦 前編（前書き）

今回はMTではなく生身の人間同士の戦いを書きました。初めてなので訂正すべき点がありましたらご指摘お願いします！

静けささえある施設の中、
ブーツの重奏音を思わせる重く響いていく音だけが、無音の世界を
唯一彩っていた。

照明を落とされ、暗くなった区画で特殊部隊を示す黒い戦闘服を着
込んだ一団はゆつくりと銃口を室内を動かし、警戒を強めている。
彼らの顔には何だかごてごてと機械が着けられていた。

それは暗視ゴーグルというものだった。人には見えない光を発し、
人のシルエットを映し出す装置だ。

彼らはオーガスタに与した統一守備軍所属の特殊部隊だった。この
ヨコハマに援軍として送られてきていたが、それは表面上実際は駐
屯していたオーガスタ派の部隊と結託して攻防の要地となりうるこ
の地を接收しようと模索していたのだ。

そして現在、早期終結を狙い、中枢指揮所として使用されているI
DF支部の占拠を最優先とされ、彼らを中心に歩兵部隊が投入され
ていた。

その特殊部隊の数人で構成された彼らの小隊は今現在いるこの区画
の制圧を担っている。

警戒を解くことなく彼らは区画の奥に足を踏み入れる。

扉を開き、内部を見回す。

そこは食堂だった。

普段、職員などで賑わうそこは今暗く無音の空間になっていた。
先頭に立っていた兵士が持っている小銃を構えながら、食堂に入っ
ていく。彼のブーツの音だけが嫌に響いている。

中央付近までいき、安全を確認すると、後方で待機していた味方を
手招きする。

それに従って待機していた兵士たちも中央に集まり、奥を調べようと、歩きだそうとした。

その時、円筒形の物体数個が彼らの周りに大きな音を立てて、落ちる。彼らは不用意にもそれを見てしまった。

その瞬間、尋常ではない光の束が食堂を包み込んだ。

「ぎゃああああ!!」

暗視スコープを着けたまま、それを直視してしまった兵士たちは意味不明な叫び声を上げ、目の部分を抑えながら床を転げ回る。

小さな光だけで、暗闇を見渡すスコープに強力な光を浴びせればどうなるか。

文字通り、目を焼かれたような状態になる。

比較的ダメージの低い兵士が膝立ちで周りを見渡そうとした時、

「動くな!!」

その一言に彼らは一瞬にして凍りつく。ばやけて見える視界の先にはこちらを狙う銃口があった。

「銃を捨て、手を頭に!!」

彼らはそれに従うしかなかった。このような事態が施設内でいくつもおきていた。

これがイタミの考え出した作戦だった。防火シャッターで敵を指定したポイントに誘き出し、彼らの使う暗視スコープの特徴を利用して、フラッシュグレネードで敵を無力化する。

作戦は効果抜群だった。

戦闘力で劣る自軍を被害なしで勝利を納めていた。

- 数分後 -

食堂の中央には黒い戦闘服の兵士が後ろ手に縛られて一カ所にまとめられ、その周りをIDFの戦闘服を着た若い兵士たちが小銃を両手に抱えて警戒している。その内の一人がインカムを抑えて、通信を始めた。

それはシュンだった。

「こちらチーム11。リーダーシップ。どうぞ」

『こちら、リーダーシップ。よく聞こえます』

通信機越しに参謀であるイタミの声が少し雑音混じりに聞こえてきた。

「第二食堂で敵小隊を拘束。怪我人なし」

『了解しました。すぐに後方支援を送ります。少し待ってください』

「了解。…しかし」

シュンの顔に苦笑が滲んだ。

『しかし? ……何ですか?』

「コードネームで…リーダーシップというのはちょっとな」

『…失礼だな。急な編成だったから仕方がないでしょう!』

そんな通信のさなか、突然遠くから銃声が立て続けに聞こえてきた。

「どうした!」

『いや…そちらの区域には他の味方はいないはずですが。…待ってください。共通周波数に通信がある。繋ぎます』
少し大きな雑音の後、通信機から銃声が響いてくる。

『こちらユメです！敵に囲まれています。怪我人もたくさんつれていて動けません！救援を。誰か急いできて！』
それを聞くと、シユンは小銃に弾丸を装填する。

「オレたちはすぐに救援に向かう。オキ、クワタはオレとこい。残りの二人はここで後方支援を待て」

「はい！！」

それを確認すると、すぐに銃声の鳴り響く区域に向かった。

セレナたちは廊下の一角に急造のバリケードを盾に敵の攻撃を凌いでいた。

「マズいかな…」

セレナは拳銃を牽制がでらに敵撃ち込む。それらは正確で、うかつに近づけない。

しかし、弾丸には限りがあり、じわじわと残弾が少なくなっていた。

「セレナ。どうするの？」

反対側を守っているユメが顔をそのままに声だけで聞いてくる。

「通信機で救援要請を続けているけどまだ返事さえないし…」そう

いいながら、ユメは様子を伺おうとした兵士に向けて一発発砲する。その横で若い兵士が通信機にひたすら平文で救援を呼びかけている。

「伏せてください！」

敵兵が一斉に銃撃をしてくるとともに、すかさず、頭を伏せて応射を避けながらセレナを見る。

「でも、逃げることはできないよ。彼を見捨てるわけにはいかない。そっぴいながらセレナはチラッと負傷した若い兵士を見る。

足を撃たれた様で出血が酷い。とてもではないが、歩けそうにない。セレナの視線に気づいたのか、兵士は申し訳ないように顔をゆがませる。

「…すいま…せん。僕の…せいで…こんな…ことに」
ポロポロと涙を流しながら彼は謝る。

「あなたのせいじゃないよ。大丈夫。必ず助かるから」

励ましながら、セレナは拳銃を構え直し、廊下を見据える。そこで異変に気づく。

先ほどまで騒がしかった一角が突然、静かになっていた。

どうして、と思う前にいきなり黒い影が飛び出してくる。

「っ！？」

とっさにセレナは拳銃で狙いをつけた。

「うわぁ！ちよっ！待った！」

飛び出してきたのはシュンだった。

「中尉!!」

「シュン中尉!？」

シュンとわかれると二人とも目を丸くして驚く。

「驚くのはあと!ほらすぐに彼を連れて、後退するんだ!」

その一言に二人はすぐに冷静になり、頷く。

「クワタ。彼を頼む」

「はい!」

それを聞くと、シュンはバリケードから小銃を構える。

彼の持っている小銃は日本製の八九式自動小銃だ。

余談だがなぜ、IDFが自衛隊の兵器を使っているのかというと国家が統一された時に解体された自衛隊から設立されたばかりのIDFが安く買い揃えたものだった。

「オキ!先頭になって彼らを指揮所、いや格納庫に連れていけ」
そういうと、シュンは数発を敵に発砲する。

「中尉は?」

「オレはここに残って奴らを引きつける」
そして、シュンはニコツとわらい付け足す。

「大丈夫。すぐに向かうから先にいってくれ」
オキは不安の入り混じった視線をシュンに向けていたが、ようやく決心したのか着た道を引き返す。

「行きましょう!!さあ!!」

足早にオキ、負傷兵を背負っているクワタ、少しためらいながら、

セレナも続く。しかし、ユメだけは動かない。

「ユメちゃんもいくんだ！」

「私：残ります！シユン中尉だけ残して行けません！」
そういいながら、ユメはシユンを見据える。

「…駄目だよ。こんな役目、ユメちゃんには向かない」
そこでシユンは区切り、微笑みを返す。

「ユメちゃんにはいつもその明るい笑顔を見せてほしいから。
さ、いくんだ」

その言葉に少し涙目になりながら、叫ぶ。

「すぐに後を追ってくださいよ！」
ユメは走り出す。

それを見送り、シユンは目の前の敵に銃弾を撃ち込む。
銃声だけが嫌に響いていった。

FILE・14 市街地戦（前書き）

今回の話は白兵戦 前編と平行して起こっている市街地戦を書きました。お間違えないようご了承ください。

FILE・14 市街地戦

シユンが敵小隊と白兵戦を展開している頃、

ハヤテたちはヨコハマ外周部にある障害物が少なく開けた状態になっている再開発地帯で敵戦車部隊と交戦していた。

戦車隊は数にまかせて弾幕を展開して、MTを近づかせないようにしている。

それに対してハヤテらIDF小隊は歩兵一人の援護すらいらない。たった3機で大群と対峙していた。

元々、IDFは都市防衛組織だ。都市防衛の理念を守るために物量を揃えることはできない。その為に機体性能の底上げで対処してきた。

それが現在、裏目にでていた。オーガスタ派に寝返ったのはほとんどが、派遣された統一軍の将兵たちだった。

しかし問題はその数だった。現在駐屯していたIDFと統一軍の割合は3：7。その物量差に圧倒され、ヨコハマ全域でこのようなIDFの防戦一方な状況が続いていた。

「どうします？」

防衛システムによって地上に飛び出ている障害物シールドに隠れながら、ハヤテは通信機に呼びかける。

『どうにも数が多い。全域で交戦状態になっているから援軍も期待できない』

イチマサが通信に答えているその横でリンのハヤブサが両手に持ったライフルを連射する。いくつかの戦車にそれが当たり、爆散する。しかし、それも焼け石に水。砲撃を続ける戦車の数は一向に減らな

い。

『でも…この防衛ラインを放棄したら、支部が直接攻撃を受ける。
…退くわけにはいかない』

「そうですね。もうかなりの数の敵に侵入を許してますから。突破
されるわけにはいかないのでからねっと！」

そういうとハヤテ機はシールドから飛び出し、両手に構えたマシン
ガンを掃射する。

マシンガンの反動で舗装された地面が割れ、機体が数メートル後退
する。

密集隊形で相手が行動していたおかげで破壊された戦車の誘爆に巻
き込まれ、大きな爆発が生まれる。

『やったか！？』

しかし、目の前で粉塵を舞い散る前方から再び応射が返ってくる。

「うわ！」

とっさにシールドに隠れ難を逃れる。戦車砲の束がシールドに命中
し、大量の爆発を引き起こし、周りに大きな振動が起きる。

「まだこんなにいるのか！？」 戦車のズシン！と響く発射音と共
にコックピットに地震のような低周波が伝わってくる。

「このままじゃ反撃もままならない！」

その時、突然今まで不通だった通信機が雑音を響かせた。

『…こち……隊。…援…護…する……』

「援護：？一体どこの部隊が」

そんな疑問にハヤテは呟いていると突然、戦車群の方向から連続して爆音が響き渡る。

「な！？」

そちらに機体を向けると、再開発地帯の一角にあるビルの屋上から1機のMTが銃撃を開始していた。

驚くべきはその弾幕だ。両腕にはマニピュレータはなくそのまま大型マシンガンが装着され、連続して弾丸を放たれる。

しかし、その機体の一番の特徴は背部に装備された馬鹿でかい2連レールキャノンだった。

部隊の3分の1を失いながらも生き残った戦車が反撃にうつてでる。角度的に主砲が使えないと判断した敵は、対空兵装であるミサイルランチャーを連続して放つ。

一斉に放たれたその十数発はまっすぐその機体を破壊しようと接近する。

それを飛び上がってブーストで軽々かわすとそのままレールキャノンの照準を戦車群の中央に合わせ、発射する。

青い火線が銃口から走り、超音速で発射された弾丸が、鮮やかな青い炎を上げて地面に突き刺さる。その瞬間、それを中心に光が戦車を包み込む。

刹那、大きな爆発が起き、粉塵を舞い散らせる。

ようやく、粉塵が収まると、そこにはばらばらに砕かれた戦車の破片が球形にえぐれた地面を中心に散らばっていた。

「酷い……」

ハヤテはその余りの惨状にそう呟く。

『…戦争とはルールのある殺し合いなのだよ。IDFのパイロット通信機に低く呟くような声が聞こえてきた。

頭部カメラには、先ほどビルの上に立っていたMTがこちらに歩み寄ってくる。

近づいてくるにつれ、黒を基調としたカラーリングを施しているのがわかった。

『…お前はいつたい？』

後方にいたイチマサが通信に割り込み質問を投げかける。

『おっと、すまない。私は統一軍第117大隊所属、マカベだ。階級は大尉』

その答えにイチマサは息を呑んだのが通信機からでもわかった。

『どうかしたんすか？』

そんなイチマサに疑問を持ち、ハヤテが質問する。

『しらねえのか！統一軍第117大隊って言えばアジア最強の部隊だぞ！』

その一言に通信を聞いていた二人も息を呑んだ。

「アジア最強…彼らが」

それに反応したのか、マカベは恥ずかしそくに補足する。

『アジア最強といってもこれまでの功績はテロリストの相手や暴動鎮圧だけだよ。それに僕たちは護るべき都市を捨てて大陸から逃げてきた臆病者なんだよ』

「しかし、どうやってここまで。反乱軍によって地上路は封鎖されているのに？」

顔は見えないがそこでマカベはきょんととして、目を丸くしているようだった。

『気づかなかったのかい？上のあれ』

上？とハヤテがふとカメラを上げると目を見開いた。

そこにあつたのは、黒光りする大型輸送機があつた。

それも一機だけではなく数えてみると、5機が都市中央を機転に円を描くように飛んでいた。

『僕たちが乗ってきたステルス輸送機だよ。レーダーにも写らないし、音も静かだからまあ…気づかないのも当然かな』

ハヤテらが見ていると輸送機のハッチから次々とMTと降下用に軽量化された戦車や装甲車が吐き出されていく。

『本隊の降下だ』

呟くようにマカベがいった。

『…本隊？』

今まで黙っていたリンがマカベと同じくらいの声量で呟く。

『ああ。僕は降下ポイントの掃討・確保の為に先に降下していたんだ』

『こちら、アルゴス1。応答せよ』

通信機から無機質な女性の声が聞こえてきた。

その声を聞くとマカベは慌てたように応答する。

『こちらマカベ…あゝとビー4。アルゴス1、どうぞ』

『ビー4。ちゃんとコードネームで応答しろ。…状況は？』

『この区域に配置されていた戦車部隊を撃破。降下可能です』

『了解。これより降下を開始する』

通信が終わると、一機のステルス輸送機が上空に現れ、数機のMTと戦車を吐き出す。

ビルの上に着地したMT群は周りを警戒しながら戦車の着地を援護する。

遅れて落下する戦車や装甲車はパラシュートを開き、落下速度を落としてながら道路に着地し、中心部に移動を開始する。

それを呆然と見送るハヤテたちに先ほど降下したMTが近づいてきた。

機体は機動力より装甲を重視した重装型のMTで、色は全体が白銀に塗装され、傷一つ見当たらない。

武器は右手に大型の対MT用のアンチマテリアルライフル、左手には近距離専用のハンドガンが装備されていて、最後に背部に大型のミサイルランチャーが装備されていた。

『ビー4。ご苦労でした』

その機体から先ほどの女性から通信が入る。

『いえ、楽なもんです』

『そうですね。相手が多かったといっても戦車だけでしたからもう少し制圧時間を短縮できたはずです』

その一言にマカベは苦虫を噛んだような顔になる。

『…はい。申し訳ありません』

『それはそうと…彼らは？』

頭部カメラを少し傾け、アルゴス1はハヤテたちを見る。

『IDFの小隊です。自分が降下する前から、彼ら3機だけでこの戦線を維持していました』

『そうですか。礼を言います。あなた方がこの降下ポイントを維持してくれたおかげで我々はこうして無傷で救援にこれました。ありがとうございます』

「いえ…僕たちは何も…」

恐縮したようにハヤテが話す。

『少数で大量の敵と対峙するのは並大抵の覚悟では務まりません。たいしたものです』

「…ありがとうございます。えっと」

ハヤテは名前を聞いていないことに気づく。

『ああ、申し遅れました。私の名前はルサ。第117大隊の隊長をしています』

その瞬間、ハヤテたちは凍りつく。

「た…たた隊長！？あ、あなたが！？」

『ええ。…では、我々は残存した敵部隊の掃討に向かいます。また後で会いましょう』

そういうやいなや、重装型とは思えない加速力で中心部にむかっていく。

『アルゴス1から各小隊へ、準備が終わった者から順に都市掃討戦を開始。断固抵抗せしものは容赦なく撃破しろ！装甲車並びに歩兵部隊は支部施設内にて抵抗を続けている味方を援護・救援に迎え！』
白銀の機体はすぐに見えなくなっていた。

『君らは少し休め、長期戦で疲れているだろう。…じゃ、僕もいくよ』

「僕たちもいきます！」

『いや、必要ない。すでに戦いは終息にむかっている。消耗している君たちを戦わせるわけにはいかない』
でも…となおも食い下がるハヤテにマカベは付け足す。

『今回の作戦で使われているコードネームの意味がわかるかい？』

「…いえ」

『ビーは働き者。アルゴスは怠け者という意味さ』

「…それが何を意味しているんですか？」
通信越しにマカベが少し笑いを漏らす。

『怠け者たちはいつまでも空中にはいられない。じらされていた彼らに仕事を与えれば働き者よりいい仕事をするっていうのがこの作戦さ。何、すぐにこの戦闘は終わる。身内の後始末をするだけだから』

そういうとマカベもすでに戦闘が起こっている中心部に向かった。

「何が言いたかったんだろう」ハヤテは先ほどの言葉の意味を探し

ていた。

『…多分』

リンが呟きながら言葉を続ける。

『…多分、彼らは仲間だった連中が反乱を起こしたことがどうしても許せなかったんだと思う。反乱をおこした血の気盛んなオーガス
タ軍…働き者に彼らのような変わらない日常を望む者…怠け者がと
うとう重い腰を挙げたっていうことを彼らに教えるという意味もある
と思う』

そっついながら、3人は爆音の鳴り響く中心部の方向に機体向け
る。

そこでふと、ハヤテはシュンが支部にいることに気づいた。

「隊長…大丈夫でしょうか？」

『死ぬはずない。私との決着がついていないから』

『そうさ。あいつが死ぬはずないさ』

鳴り響く爆音は彼らを包み込むように続いていた。

FILE・15 白兵戦 後編（前書き）

今回は施設内部での戦闘後編です。感想待ってます。

FILE・15 白兵戦 後編

外部での戦闘が終息に向かい始めた頃、支部では未だオーガスタ特殊部隊とIDF部隊の戦闘は続いて、いや激化の一途をたどっていた。

イタミの作戦で一時的に優位にたったIDFだが、練度の低い者が大半の為、直接戦闘に入ると、室内戦に長けた特殊部隊の後手後手にまわり後退を余儀なくされる。それが施設全域で起こっている為、IDF部隊はじりじりと追いつめられつつあった。

- IDF・通信指揮所 -

「第8区通路で交戦中のチーム3、6の負傷者増大！後退要請がでています！」

「チーム4から通信途絶！第7区状況不明！」

「第5区のチーム5、9からも同様です！！参謀、このままでは小隊が！」

通信機から報告されるのはどれも味方の不利を示すものばかりだった。

「チームリーダーから全チームへ。第5から8区を放棄する。第1、2、3区に別れて後退、そこで防衛線の再構築を行ってください。以上」

そこで、イタミは別回線を開く。

「後方支援部隊。バリケードの形成はどうなっていますか？」

『バリケードはほぼ完成しています。しかし、急造のものでからどこまで保つかわかりません』

それを聞くとイタミは頭を抱えて考え出す。いかにして時間稼ぎをすればいいのか…。

先ほど降下作戦に成功し、こちらにむかっている第117大隊が来るまで時間を…

中央に設置された画面に映し出された施設マップには青い光点が急いで後退を開始している。その奥で赤い光点がゆつくりと警戒をしながら移動を開始する。その数は、青い光点を遥かに凌いでいる。

「…後退を確認したら、放棄した区間の防火シャッターを全て閉じてください。いくばくかの時間稼ぎにはなります」

「了解しました！」

「到着まで…何としても保たせねば…」

もう敵は銃声が聞こえる範囲にまで接近していた。

同時刻、

放棄された区間通路を1人のIDF戦闘員が走っていた。

それはシュンだ。

彼はバリケードを盾にセレナたちが撤退するための時間稼ぎをしていた。しかし、敵の反撃と通信機から聞こえてくる戦況に形勢が不利と判断し、包囲される前に後退していたのだ。

しばらくしてシユンは足を止めて、壁に寄りかかって襟を緩め息を整える。その額にはうっすらと汗が滲んでいる。

「はあ、はあ、…ふう」

しばらくして、シユンはインカムの周波数を調整する。

「こちら、チーム11。チームリーダー応答してくれ」

しかし、雑音だけが返ってくるだけで応答はない。

妨害電波がでているのか…

ふとシユンは周りを見渡す。

不利と判断した瞬間、すぐに数発牽制して、後目もむかずに逃げたため、今自分がどこにいるかシユンにはわかっていなかった。通路の壁に案内図があるのを見つけ、現在地を確認する。

「…物資集積所か。…はあ、格納庫とは逆方向じゃないか」

がっくりと肩を落とし、逆方向に歩きだそうとしたとき、突然防火シャッターが通路を塞いだ。

「…どうなってるんだ？」

解除を試みたが、開く気配さえ見えない。

「…別のルートを探すしかないか。はあ…」

とりあえず、シユンは塞がれていない物資集積所の方へと進んでいた。

物資集積所はその名の通り、この支部で使用する消耗品、食料、武器弾薬諸々を一時的に一つにまとめておく場所である。

ここで物資を分別してから各所に分配される仕組みがとられていた。そこでふとシユンはあることに気づく。

「…そうだ、集積所に何かあるかもしれないな」

集積所に保管された品には非常用の特殊工具か何かあるかもしれない。武器弾薬もある。

時間稼ぎの為に手持ちの弾をほとんど使い果たしている。補給も必要だった。

ひとまず、シュンは武器が保管されているポイントにむかうことにした。

武器弾薬が集積されている第2集積所は証明の電源が切られており、中は真っ暗だった。

シュンは小銃に装備されているライトを灯し、室内に入った。地下の為、窓のない集積所はひんやりとした空気が漂い、シュンの靴音だけがイヤなほど反響して室内に響いた。

「電源は…ここか」

シュンがスイッチを入れると、部屋の全ての照明がつき、棚に並べられた武器弾薬が現れる。

「ライフルの弾薬…弾薬は…と。お！あったあった」

弾薬をしまっている棚を見つけ出し、シュンはライトグリーンに塗られた四角い箱を取り出し、中に入っている八十九式用のライフル弾を空になったカートリッジにこめはじめる。

数分後、持っていた三つのカートリッジに装填し終わると、集積所の中を物色し始める。

「何か…使えるものは…ないかな？」

シュンは他の棚を改めて見渡してみる。

ＩＤＦ正式採用の軽量拳銃と弾丸。フラッシュグレネード等の手榴弾など主に施設防衛用の武装がならんでいる。

その中の隅でシートで覆っている一角に気づく。

「何だろ？」

シユンはそれに近づく。そして思い切つて、それをめくる。その瞬間、彼は目を見開く。

「……これ、は……まさか」

一瞬めまいに似た感じにシユンは後ずさりする。しかし、それをこらえ、彼は壁に寄りかかってうつむく。

「……君は……まだオレに……何をしろと……いうんだ」

そこで、彼は笑う。しかし、それはいつもの朗らかな笑いではない。悲しみに満ちたものだった。

「……わかったよ。戦えと言うんだな。これを使つて……」

そこでシユンは顔を上げる。その瞳は先の戦闘で見せた……碧い光が宿っていた。彼はその瞳で天を見上げる。といって地下のため天井は暗く何も見えない。

「……しかし、オレはこれを……この戦いに勝つためには使わない。大切な人たちを……かげがいの人たちを護るために使う。それだけはわかつてくれ」

―同時刻―

格納庫では整備士たちが慌ただしく作業を続けていた。

「急げ！敵はいつくるかわからない。対処可能な体制を整えろ！A班はMT整備ドッグに防御シールドの展開、B班、C班はバリケードの構築を急げ！D班は戦闘用意！」

リュウトは怒鳴りながら、手に持った拳銃に弾丸を装填する。

（……戦闘、か…訓練すらしていないおれたちに何ができるのか…）ふと、拳銃を持っている手を見た。その手は小刻みに震えていた。

「くそ…もつとまじめに射撃訓練をしとけばよかった」

その時、格納庫の入り口のドアが強く叩かれる音が響いた。その音を聞いたとき、格納庫にいる全ての人間が凍り付く。

「…各員、持ち場へ」

リュウトは指示をだしながら、内線を開く。

「……誰だ？」

数秒の後、すぐに内線に答えがきた。

『私だよ！リュウト！』

その声には聞き覚えがあった。ほっとしたようにリュウトは内線に話しかける。

「…脅かすな。セレナ」

リュウトがドアを開くと、セレナたちがなだれ込むように入ってくる。

その中にシユンと一緒に防衛に参加していた小隊のメンバーがいること、

しかしその中にシユンの姿がないことに気づいた。

「おい！シユンはどうしたんだよ！」

リュウトは後退してきた小隊にいたオキの肩を掴む。オキは苦しそうに呟く。

「中尉は…、残った」

「…残った！？お前ら！シユンを見捨ててきたのかよ…！」

「違う…！」

オキはリュウトの手を払い、睨みつける。

「…中尉は、すぐに追いつくって言ったんだ！だから…」

リュウトは黙って腰のホルスターから銃を抜き、ドアに向かう。

「クワタ！案内しろ！」

しかし、とクワタは躊躇いを見せる。

「ならいい！場所を教えろ！1人でいく」

そういうと、リュウトは開閉ボタンを押そうとする。

「待って…！」

ボタンを押す寸前、セレナが叫ぶ。

「…何だよ」

「そこに…誰がいる」

え…とリュウトが視線を扉に向けようとした時、

爆音と共に扉が吹き飛ぶ。

爆風によって数人が地面へと叩きつけられる。何とかそばにあった手すりにつかまり、耐えていた数人の整備士がいたが、

次の瞬間、銃弾の嵐が彼らを包みこみ、倒れ伏す。

「あ…あああ…」

それを見た瞬間、リュウトや倒れていた整備士たちは恐怖で腰を抜かし、立てなくなっていた。そこに黒い戦闘服を身に付け、マスクを被り、手に持った自動小銃をこちらに向けている一団が現れる。その中の1人、マスクから見える青い目を持った隊長らしき人物が口を開く。

「…全員、銃を捨て、手を頭の上に」

リュウトは慌てて銃を捨て、手を上げる。整備士たち、セレナたちもそれに従って銃を落とす。

「それでいい。抵抗さえしなければ我々はあなた方に危害は加えない」

そこで隊長は他の兵士たちにハンドサインで何かを指示する。すると数人の兵士たちが血まみれで倒れている整備士の亡骸を一カ所にまとめ、一つ一つにシートを被せる。

「ほら、立て！」

リュウトたちは格納庫の中央に集められる。その間に他の兵士たちが整備ドックで何か作業を始める。

「…何をする気ですか？」

その作業を見ていたセレナが隊長に質問を投げかける。

「貴様！立場を考えろ！」

1人の兵士が銃を向ける。しかし、それに怯えた様子もなくセレナは正面を見据える。

「構わん。銃を下ろせ」

それを隊長が制してセレナの目を見る。

「しかし隊長…」

「質問に答えよう。あのMT群にはしばらく動けないよう細工する。…本当なら破壊したいところだが、先ほど爆薬を全て使い果たしたところだね」
チラツと破壊された扉を見て、彼は言う。

「…いい目をしている。そんな真っ直ぐな目を見たのはどのくらい前だったかな…」

そこでセレナはキツと彼を睨みつける。

「…あなたの目は人殺しの目です」

「そう、私は人殺しだ。…多くの人間を殺し、その生き血をすすり、その肉を喰らって生きてきた人間だ」

そこで彼は言葉を切り、何かを思い出すよう口を開く。

「君たちは知っているか？世界には統一国家に反感を持っている人間が意外と多いことを」

「…いえ」

「それを弾圧するために統一軍には汚れ仕事専門の部隊があるのだ。

…そう、我々のような」彼は振り返り、作業を続けている部下を見る。

「彼らは皆、孤児でね。物心ついたときから軍の施設でそういった訓練を受けてきた者たちだ。軍に忠誠を誓い、汚れ仕事をこなすためだけに作られた存在なんだ」

そこで、隊長は血がにじむくらいの力で拳を作る。

「しかし、彼らがどんなに忠誠を誓い、血を流しても、上層部の連中は…彼らを認めてはくれない。彼らは最初から最後まで土くれのように扱われて死んでいくんだ。そんな理不尽が通用するのか！」
悲しそうな目で彼は再び視線をセレナに向ける。

「…唯一、彼らを認めてくれたのはオーガスタ閣下だけだったよ。だからこそ、我々はオーガスタ閣下の大儀を成就させたいのだよ。…その為なら我々は死を恐れない」

皆がそれを聞いて押し黙っていた。一瞬の静寂が流れた。
それを破ったのはセレナでも隊長でもなく、隊長の腰のベルトにつけられた無線機からの雑音だった。

「こちらアルファード1。ロメオ小隊か？どうした？」

『こちらロメオ4！！区間通路警戒中に敵兵と遭遇！！？は、早い！早すぎる！』

無線機の向こう側では悲鳴と、銃声が絶えず聞こえてくる。

「ロメオ！場所を教えろ！」

『ぐわああー！』

叫び声と銃声の後、無線機の通信は途切れた。

そして、代わりに他の兵士が叫ぶ。

「区間通路に設置していた振動探知機に反応あり！こちらに向かっています！」

その瞬間、彼らに緊張が走る。

「各小隊！防衛戦用意！急げ！」

それに彼ら素早く反応し、リュウトたちが作ったバリケードや物陰から銃口を通路側に向ける。隊長はセレナたちを格納庫のコンテナが密集する部分に避難させた。

「君らはここで伏せていろ。流れ弾がくるかもしれん。ここなら比較的安全だ」

そう言うとき隊長は自動小銃に安全装置を外し、部下の下へ走り出す。そこでセレナに一つの疑問が生じる。

「……どうして人質をとらないんだろう」

人質がいれば圧倒的に有利になるのに彼らは正々堂々と真っ向から対決しようとしている。

数分後、区間通路の先から足音が聞こえてくる。それは徐々に大きくなっていく。

兵士たちはゆっくりと照準を扉の先へと狙う。

そしてついに扉の前に黒い影が飛び出してきた。

その瞬間、兵士たちの持っている全ての火器が火を噴いた。

とてつもない爆音が響き渡り、入り口は煙幕を張ったように白い煙に包まれた。

「撃ち方やめ！！」

隊長が大声で叫ぶと、一気に銃声が止む。

「…やったか？」

煙で目の前が見えなくなっているとはいえ、これだけの攻撃に耐えられるわけない。と全ての隊員が思う。

しかし、一種の安心が兵士たちを包もうとした瞬間、

「ぎゃあああ！！」

数発の銃声とともに物陰に隠れていた数人が倒れ伏す。

いったいどこから！？と兵士たちが周りを見渡すが、敵らしい姿はない。

しかし、再びどこからか銃声が聞こえ、二人の兵士の肩の間接付近を貫く。

声にならない悲鳴が格納庫に響いていく。

「チクシヨウ！」

数人の兵士が辺り構わず乱射を始めた。

「よせ！そんなうかつに…」

と叫ぼうとしたときには遅かった。彼らも見えない敵に腕を撃ち抜かれ、倒れた。

隊長は必死に何か策はないかと考える。しかし、この状況を打破できるほどの策は見つからない。

その時、突然銃声は止まった。何故だ…と周りを見渡すが、まだ負傷していない兵士数人の姿しか見受けない。

状況を確認しようと、バリケードからでようとした瞬間、頭に固く冷たい何かが当たる。いや、何かではない。間違いなくそれは銃だった。

なにも見えないがそこには本当にそれは存在していた。

次の瞬間、バチツという電気が弾ける音と共に敵の姿が現れた。黒

いパイロットスーツのような服装に黒いヘルメットを被った男がそこにいた。男は片腕に小銃を持ち、その照準を隊長の額に狙いを着けている。

すかさず、兵士2人が彼に照準を合わせようと腕を動かそうとした瞬間。男はもう片方の腕に持ったリボルバー拳銃を二発発砲した。狙いをつけようとした兵士の銃はたたき落とされ、床を跳ね回る。

『銃を捨てろ…』

機械的に変えられた声はとても小さい、しかし、はつきりとその場にいる全ての人間に聞こえた。

「…電磁迷彩か」

隊長はそう呟きながら、小銃を捨てる。

「隊長!？」

それに兵士たちは驚いて声をだす。

「彼の指示に従え。彼に殺意はない。証拠に我々には死者はでていない」

確かにそうだった。負傷者はだが、だれもが死ぬような怪我を負わされた者はいなかった。ただ、戦闘力を奪われただけ、

『…あなたの名前は?』

隊長はゆっくりとマスクを外す。オールバックに整えた白髪混じり金髪の初老男性が現れる。

「レイトン。…アルバロ・A・レイトンだ。階級は大佐」

『レイトン大佐…。頼みがあります』

「何かね?」

『戦闘を停止してもらいたい』

レイトンは怪訝な表情で黒く塗られたパイザーの中の見えない男の顔を見る。

「…今何と？」

『全ての戦闘の停止を要求しているのです』

「無理だ。…確かに私は今この施設内にいる部隊の指揮官だが、理由もなく戦闘を止められん」

『…あと数分で、この戦いも終わりです。無益な殺し合いは止めたのです』

その一言にレイトンはさらに怪訝な表情を見せる。

「何故だね？ 117大隊が来て、君たちの勝利に終わるからか？」

『いえ…この戦い、どちらにも勝敗はつきません』

さらに質問を加えようとした時、突然ありとあらゆる通信機器に雑音が入る。

『ヨコハマにて戦闘中の全ての将兵に次ぐ。私は東北軍最高司令官のマツシタである。今現在をもって、我が軍と統一政府の間でヨコハマ周辺での一時停戦が承諾された。戦闘を停止して、両軍は指定された地区に移動せよ！ 繰り返す…』

この放送はヨコハマ全域で戦闘が続いていた双方に伝わっていたが、オーガスタ軍、統一軍にとっても寝耳に水の話だった。

中心部で戦闘を続けていたルサ率いるMT隊は先ほどまで戦闘していた敵部隊が後退していくのを黙って見ていた。

『隊長。どうします?』

通信機越しに、マカベが指示を請う。

「…中央司令部から正式に通達があった。停戦は本当のようだな」
そこで区切り、機体を支部の方向に向かわせる。

「私はIDF支部の司令官にあつてくる。ビー4、指定されたポイントに部隊を移動させる。指揮はまかせる」

『了解』

返事を聞くと、ルサは支部に向かった。

「…君は何故わかった?」

ルサが支部に向かった頃、内部では負傷者の救護と撤収のため両軍は黙々と各々の仕事を続けていた。

格納庫でも同様に負傷者への応急措置が施されていたが、オーガスタ軍の負傷者の数がおおく、移送車両の到着を待っていた。その暇を使ってレイトンは質問していた。

『ただ、停戦調停の通信を偶然傍受しただけ…ですよ』

「そうか、…ところで」

『？』

「顔を見せてくれないか？」

その一言に、彼はヘルメットを脱いでいないことに気づいた。

『…そうですね』

彼はヘルメットに手をかけ、外す。そこに現れたのは…碧い目の青年。シュンだった。

「「シュン!？」」

遠くから様子を見ていたセレナたちが驚いたように詰め寄る。

「心配してたんですよ！」

ユメが怒ったようにシュンを見る。それにシュンは困ったような表情を見せる。

「……知り合いなのかね」

レイトンがそこに割り込み、セレナに質問する。

「あ、はい。彼はヨコハマＩＤＦ所属のシラミネ中尉です」

ほう…とレイトンはシュンを見る。

そこにレイトン指揮下の若い兵士が近づいてくる。

「隊長！移送車が到着しました！」

「わかった。負傷者を優先して乗車を開始しろ！」

「了解しました！」

敬礼すると、兵士は負傷者のいる一角へと走っていく。

「どうやら、お別れのような。シラミネ中尉」

「…はい」

「…君とは戦場ではなく別の形で会ってみたかったな。では、失礼」
レイトンは一礼すると、移送車に乗り込み、指定された集結ポイントに向かっていった。

時間に見れば僅か10時間あまりであったが、極東地区での初の戦闘として記憶される。

「ヨコハマ開戦」は両軍の痛み分けという形で終わった。
しかし、それは血で血を洗う戦争の序章でしかなかった。

FILE・16 停戦の価値 オーガスタ陣営（前書き）

更新が遅れてしまいました。今回は、オーガスタ派、前回登場した
レイトンを中心に書きました。勢いだけの文ですが是非読んでくだ
さい。

FILE・16 停戦の価値 オーガスタ陣営

停戦から数時間：

ヨコハマは朝を迎えようとしていた。

朝日が上るにつれ、その被害の全容がはつきりとわかるまでになる。破壊された道路、ビル群。まだ煙がくすぶっている戦闘車両やMTの残骸。

…そしてその全てに存在するたくさんの血の痕。それは兵士だけではない。民間人…非戦闘員のものも混じっているのだ。

その残骸の中で兵士たちが、銃を携え、警備に当たっていた。

戦闘服の上、彼らの腕には赤い腕章がつけられている。それはオーガスタ派の軍である証明の証。彼らの後ろにはMTや戦車が立ち並び、壮観な眺めになっていた。

「……寒いっすね。先輩。毛布とか温かいお茶とかないんですかねえ？」

警備をしていたまだ若い兵士が擦り会わせた手に息を吐きかけながら、横で煙草をくわえた先輩兵士に聞いた。

「毛布なんて無駄いな。オレたちは裏切って身内に電撃戦を仕掛けたんだ。弾薬ならともかくそんなもの用意する時間なんて…あるわけないじゃないか」そういう先輩兵士は少し湿った煙草に火をつけた。

「…そうですね。オレたち、仲間を裏切って、今ここにいるんですよ」

「ああ、…後悔してんのか？」紫煙を吐き出しながら、チラッと視線を向けた。

「…いえ、後悔などしてません。…ただ」

「ただ？」

そこで若い兵士はため息をついて、空を見上げる。

「昨日まで普通に暮らしていたこの都市が、今やこんなにも荒れ果てている。…これが戦争なんだな…」って思ったんです」

「…そうだな。日常が一瞬で破壊されてそこは非日常の世界になりはてる。嫌なもんだ」

そう言くと、先輩兵士も空を見上げた。空だけがとても綺麗な青に包まれていた。

ここは停戦に応じてオーガスタ派に一時駐屯のために設けられた区間。

その一角に作られた仮説司令部では造反組の将兵たちが通信機の目の前で円形のテーブルごしに集まっていた。その中にレイトンの姿もあった。

「マツシタ閣下！どういうことですか！停戦とは！？」

まだ若い幹部将校が通信機に移るマツシタにむかつて質問を投げかける。

『どうしたもこうもない。ただあちらからの提案にのっただけだ。落ち着いたまえ』

マツシタは至って冷静に幹部を諭す。しかし、幹部はバンと机を叩きつけ、立ち上がる。

「落ち着いてはいられません！あと少しで…ヨコハマは落ちたのです！停戦がなければ勝っていたのです！停戦に同意した理由をお聞きしたい！」

そんな頭に血が登った幹部をレイトンは冷ややかな目で見ていた。

…彼は、統一軍でエリートを気取っていたが、今一つ冷静さが足りんな。それに、目先の勝利にばかり目を向けて大局を見ることもできていない。

…まあ、私も何故あの時点で両者が停戦に合意したかわからんがね。マツシタ閣下…いや、オーガスタ閣下が大局を見て何か決定的な理由があるのだろう。

『理由は…二つある。聞きたければ頭を冷やして、…席につきたまえ』

その一言に幹部は黙り込み、不満そうに椅子に座りこむ。

…流石はマツシタ閣下というところかな血の多い若い将兵をなだめ、まとめあげるのはこういう老齢の経験豊富な人物が適当だな。心の内でレイトンがわらっていると通信機のマツシタは話し始める。

『一つは天皇の勅令だ』

「勅令？」

レイトンを含め、数人の外国人将兵は疑問に思う。

しかし、周りを見ると、何故か日本人将兵たちに動揺の色が見えた。

「…しかし、テンノーは今は権力を持たない象徴のほうではないのですか？」

そこで拙い日本語を喋る戦車部隊を束ねる外国人将兵が質問する。

『確かにそうだ。…しかし、天皇は、日本人にとって第三次世界大戦以降、再び神に等しい存在に戻った。その天皇の勅令を無視すれば、国民や兵士がどんな行動にでるかわからん。だからこそ我々は停戦に合意したのだ』

「し、しかし！わかりませんな。例え、そんなことがおきるかも知れないということで戦略的に重要な拠点を明け渡すなどということ
は！」

少し、うわずりながらも幹部は尚も食い下がる。

「…それで二つ目の理由の登場ですか」

レイトンは思わず口ずさむと、将兵全ての視線がレイトンに向いた。

『その通りだ、大佐。それがあつたからこそ我々は継戦に踏み切れず
にいたのだ』

「…どんなものですか？天皇の勅令以上にある理由とは」

『…それは、1人の兵士の存在だ。少し前まで統一軍、…このセン
ダイ支部にいた男だ』

そこで、そこにいたものの反応は分かれた。意味がわからず、目を
丸くする者、

…そして、意味を理解し、急速に顔が青に染まっていく者。
レイトンは前者だった。

1人の兵士に何故天皇以上の影響力があるのだ？

「まさか、…あやつがこのヨコハマに!？」

顔を真っ青に染めながら若い幹部は震える声で聞き返す。

『正確に言えば、現在IDFに所属している男だ。…厄介者扱いに送り込んだはずがとんだ災難だ…とにかく話し合いは充分だろう。数時間後には輸送機が到着する。準備しておけ。以上だ』
通信が切れ、一同は席を立ち始めた。

「クボタ中佐」

レイトンは立ち上がると、呆然と座り込むあの若い将兵に話しかける。

「…は、はい、何でしょう」
まだ顔色は戻っていない。

「先程の、（あの男）とは誰のことなのですか？」

「い、いえ。私は…」

「…教えていただけませんか」
その言葉を聞くと、俯き少し考えた後、震える指で紙に何かを書き出す。そして、それをレイトンに差し出した。

「…軍のデータベースで、このパスワードを…。わ、私はこれに関係ないですからね！」

そういうと、そそくさと作戦室から去っていった。

数分後、レイトンは自分の部隊駐屯地にある仮設テントの自室にいた。椅子にすわり、目の前にあるノート型パソコンを開いた。

「…はたして、何がでるか」

軍のデータベースにあるパスワード付きのなにか。

データベースを開くとさっそく紙に書かれたパスワードを入力する。

入力して数秒後、なにか書類のようなものが表示された。

「なんだこれは？ 予言者計画…二ホン独立アリアンスでの計画か…」
世界が統一されてからも二ホンは技術特区として認められていたからな…こんな研究機関があってもおかしくないだろうな。

レイトンはそう思いながら、内容に目を通す。

彼の表情が徐々に驚きに変わっていく。驚くべき悪魔の研究がそこに描かれていたからだ。

「…こんなものが、本当にあったのか」

そこで、ふとある部分が目についた。

【被験者一覧】

それをレイトンはクリックする。リストが表示された。

そこに表示された名前のほとんどには（死亡）と書かれている。しかし、ある1人の名前だけにそれはなかった。

レイトンは知っていた。

その名前を。

名前をクリックすると、少年の顔写真とデータが表示される。その少年の顔は幼いが、彼の顔だった。

碧い目を持ち、黒服に包まれた青年。

そう、それは…

シュン・シラミネ中尉だった。

何故…彼が、ここに…

レイトンはデータを読み直す。

そこで、一つの文章によって、レイトンは何故、クボタが恐れていたか理解した。

額に手を当てる。

データに書かれている文章。

それはこうだ。

彼が参加した戦闘のほとんどが一方的な殺戮によって集結している。もちろん我が軍の勝利である。しかし、さらに付け加えるならそれらの戦闘で生き残った者は…わずか数人しかない。味方を含めてである。

敵のみではなく味方まで情け容赦なく殺し、魔法を使ったかのように戦地を残骸すら残さない彼の別称は…

【all・kill・wizard】

…皆殺しの魔法使い、

あの優しい笑顔の下に本当に…あるんだろうか。

あの時、私を殺すつもりなら殺せたはずなのに何故？わけがわからない…。

「…知らない方が…よかったかもしれんな」

そう呟くと、パソコンの電源を切り、レイトンはため息を漏らした。

「隊長…どうなされました？」

テントの外から唐突に部下が現れた。

それはシュンと対峙した若い隊員だった。

「いや…なんでもない」

笑顔を作り、安心させるようにレイトンは話す。

「それで…どうしたのかね？」

「あつ、はい…」

レイトンは思った。

先程のことは忘れよう。

あれは…彼の恐怖そのものだ。知らない方がいい。

彼は知らない。

シユンとはまた会うことになることを、

そして、彼もまたこの戦争の力ギとなり得る存在であることを

彼の物語はゆっくりと動き出した。

FILE・17 停戦の価値 苦悩の休息（前書き）

就職って大変ですね。お待たせしました。ようやく更新できました。書き方についてご指摘がありましたら是非アドバイスお願いします。

FILE・17 停戦の価値 苦悩の休息

…また、オレは夢を見た。

数年前のまだあどけない顔をしたオレがいた。

若いオレは統一軍の軍服を着て、旧式の軍用トラックの荷台に数人の兵士と一緒にガタガタと揺られながらどこかにむかっている。

（…これは、…まだあの人と出会う前の…そして、あいつと出会った…）

オレはトラックに乗る兵士たちに視線を向けた。

皆、虚ろな目をしていた。

床の一点を見つめる者、虚空を見ている者、様々いた。

しかし、その全ての兵士にはある共通点があった。

皆、この時のシュンと同じくらいとても若い…あどけない少年たちだった。

「……おい。お前」

唐突にその中の一人がシュンに声をかけてきた。

オレは顔を少しそちらに向けた。…振動でゆっくりとなびく金髪が印象的な少年がいた。そして彼の目から感じる何か強い意志のよなものが印象的だった。

「名前、なんていうんだ？」

「……シュン」

金髪の少年はふうんというように頷くと、揺れる車内を移動して、シュンの隣に座った。

「オレの名前、――っていうんだ。よろしくな」

何故か名前が思い出せない。
信頼した…人のはずなのに

「ちょっと質問していいか？」

「……………ん？」

シュンは顔を上げて、彼を見る。

「君は…どんな理由で戦っているのかな？」

「……………わからない」

何故戦っているのか、その時のシュンには答えられなかった。

「…そうか、オレはな…力のない人たちを…護りたいんだ」

そういった彼の顔は誇りに満ちているように見えた。

…ああ…だからそんな目のままでいられるんだ。

「確かに、オレたちは無理やりこの力を与えられた。戦いを強制されている。でも…オレはそれを護る力として使いたい。それが、オレがオレであることを気づける存在意義だと思うから、戦っているんだ」

そついうと、彼は微笑を浮かべていた。

「…………オレには、持てそうにないな。そんな信念」

シュンは顔を逸らして、呟く。

「…持てるよ」

そんなオレに彼は優しく話しかけた。

「ゆっくり見つければいい。焦らず、自分の信じられる物をしっかり見定めれば必ず見つかるさ」

その言葉を聞いたとき、目の前が真っ白に染まっていった。

シュンが目を覚ますと、そこはベットの上だった。

何故、シュンがベットにいるのかというと、それは数時間前…あの戦闘の後、シュンはあの目の碧の輝きが切れると共に突然意識を失ったのだ。

「…信念、か」

夢の内容をシュンは呟いていた

「気づいたか？」

周りを囲むカーテンの外側から声が聞こえてきた。シュンはその声に聞き覚えがあった。

「ああ、カツラギ」

カーテンを開けてカツラギが横に立った。

「心拍、呼吸異常なし。気分はどうだ？」

「少し体がだるいだけ。このくらいなら大丈夫だ」

シユンはベットの端に座り、腕や首を二、三回回してみて答える。

「そうか、…さて」

カツラギはそういうと、いきなりシユンのシャツの胸ぐらを掴み上げ、顔を近づけた。

そのいきなりの行動にシユンは驚いた。

「お前が何故【s u i t e】を持っている！いや、そんなことどうでもいい。何故あれを使った！」

カツラギの怒気の含んだ声で問いかけてくる。

シユンは顔を背けて、小さく呟くように話し始める。

「…使ったのは…みんなを護りたかった。その一心だ」

「…死にたいのか！あれはスオウに装備されたものとは桁違いに負担が大きい代物なんだよ！体だけじゃない。精神をも蝕む不良品だ！」

「…わかっている」

「わかっていない！…お前はわかっている！」

シユンを掴む彼の手は小刻みに震えていた。

「オレは…約束してるんだ。……お前を死なせないって。あの人にお前だって約束したろう！生きるって…」

そういった彼の目は悲しみに満ちているように見えた。

「……ああ」

「なら約束を果たせよ！それがあの人に報いる唯一の方法だろう？」
シュンは黙って頷く。

「…suitはオレが管理する。二度とお前が使わないようにな」
「…でも」

「拒否権はなしだ。…本当ならMTにも乗せたくないんだ。これ以上の妥協はない」
そうきっぱり言うとかツラギは手を離れた。

「…わかった。suitはもう使わない。誓うよ。…でも」

「わかってる。MTについてはこれまでの通りでいい」

「…ありがとう」

それを聞き終わると、幾ばくか落ち着いたカツラギはベットから離れて先ほどまで何か作業をしていた机から丸めた数枚の紙を取り出し、シュンに投げ渡した。
それを見ると、何かのレポートのようなものだった。

「これは？」

「さっきの戦闘の報告書だ。お前の部下の分。今さっきまでお前の側で意識が回復するのを待っていたんだ。体…調子いいんなら顔見せてやれ」
ぶっきらぼうに言うと、カツラギは医務室から出ていこうとした。
そこでシュンはあることに気づいた。

「ミカサ…そういえばミカサは大丈夫だったのか？」
そう呟くとカツラギはああ、と思い出したように顔だけこちらに向ける。

「少年のことか？彼ならさっきまで部下連中と共に見舞いにきてたぞ」

それを聞いて胸をなで下ろし、小さくため息をついた。

「…だが、一つ気になる点があるんだ」

カツラギはそこで区切り真剣な目つきでシュンを見た。

「彼が戦闘中…どこにいたのかわからないらしい。オレもただ話を聞いただけなんだが、乱戦の最中、敵味方誰にも見つからないなんておかしくないか？」

「…本当、なのか？」

動揺を隠せないシュンにカツラギは小さく頷く。

「…そのことを覚えていてくれ。あ、報告。ヨネダの奴にじゃなくて司令官直接にしにいけよ。じゃあ、オレは仕事あるから、行くぞ」
そう言つとカツラギは部屋から出ていった。

「…とりあえず、報告しないといけないな」

その後を追うようにシュンはゆっくりとした動作で部屋を後にした。

歩く度にシクシクと筋肉が痛む中、フラフラとした足取りながらシュンはゆっくりと司令室を目指していた。

ことがことだけに基地司令官クラスに直接報告しないといけないらしい。

「そう言えば…司令ってどんな人なんだろう？」

彼は一度も司令に会ったこと、いや見たこともなかった。

通常なら着任したとき報告は司令にするべきなのだが、ヨネダ曰わく多忙な人でいつも部下に任しているそうだ。さらに、外での仕事が多く、滅多に支部にはいないと聞いていた。

そんなこんなで、ようやく司令室の前にシユンは来ていた。

「…初めてだから、ちよつと緊張するな」

制服を正し、筋肉痛に痛む体を出来るだけシャキッと伸ばし、ドアをノックした。

「失礼します！」

出来るだけ、礼を失することのないように緊張しながら、シユンは部屋に入った

部屋の中には赤い絨毯が敷かれ趣味なのか壺などの骨董品が並んでいた。それがいかにも偉い人の部屋、という印象があった。MT隊長とはいえまだ若い青年、好奇心には勝てずに無意識な周りを見渡していた。

「どなた、ですか？」

その一言に一瞬ではつとしながらシユンは姿勢を正して、前を向いた。

その視線の先には机に肘をつき、椅子に腰掛けた白髪頭の温和そうな顔つきの男性とその目の前で報告書を持った統一軍の制服を着た肩の下まである赤い髪を、簡単に後ろにまとめた女性があった。怪訝そう見る司令に対して女性はこちらを見向きもしなかった。そのため、顔は確認できなかった。

「えと…その」

シュンの緊張が極限に達しているのか、言葉がまったくでない。冷や汗が出始めていた。

「…とにかく、私からの報告は以上です。失礼します」

「はい。ご苦勞様でした。大隊長」

そんなシュンを無視して、女性は淡々と自分の報告を終え、ドアに向かった。

「で、君は？何か報告かね」

その一言に直立不動の姿勢をとり、シュンは話し始めた。

「IDF第一課MT守備隊第16小隊所属、シュン・シラミネ中尉です！先の戦闘報告にあがりました！」

一気にそついい、一礼する。

「ああ…話は聞いています。はい、そうですか。では報告お願いします」

少しホツとしながら報告しようと報告書を開こうとしたとき、

「…シュン…シラミネ？」

後ろから聞こえてきた声に思わずシュンは振り返った。

そこには先ほどの赤い髪の上官が驚いたような顔をして立っていた。若い女性だ。中性的な顔つき、そしてその髪の素っ気なさ、利発そうな目と相まって実に切れ者見える人だった。その人をシュンは知っていた。

「……ルサ、さん？」

少し震える声を抑えながら、シュンは相手の名前を呼ぶ。

しかし、ルサはゆっくりとシュンに近づいていく。その目には明らかに怒気と殺気が含まれていた。

「貴様、生きていたのか」

身長にほとんど差がないため無感情な声が正面から真っ直ぐ響いてくる。明らかに敵意に満ちた声。

「……………」

そんな目に耐えられなくなったシュンは目を背けずにはいられなかった。

「…お前の存在は死神しか呼ばない。今ここで終わらしてやろう！」
ルサは素早く銃を抜き出し、シュンの眉間に狙いをつけた。対してシュンは甘んじて受けるつもりなのかただ後悔に包まれた目でルサを見ているだけ

「大隊長！！やめなさい」

何が起こっているのか把握できていなかった司令がようやく状況を理解、止めに入っていた。

「…止めないでもらいたい」

冷酷なまでの冷たい声にも怯まず司令は続ける。

「彼はIDFだ。統一軍が自らこちらに押し付けたのだよ。彼の身柄はIDFが持っている。裁くのも赦すのもこちらの権利だ。勝手な真似はしないでもらいたいものだ」

殺気を含んだ目で睨むルサを冷ややかに見据えた司令。

数秒後、ルサは銃を下ろし、ドアに向かっていった。

ドアノブを掴み、出ようとした時、再びシュンを睨んだ。

「命拾いしたな、だが、必ず私は貴様を…殺す。仲間の為に」そう言い残し、彼女は去っていった。残ったのは、どんよりとした暗い雰囲気だけ。

「…さて、報告をしてもらうか、とそのつもりだったが、ちょっと仕事が入っている。後で読ましてもらうから置いていてくれるかな？」

「……………はい。あの」

「君のことは知っている。司令として知る権利があるからね。しかし、私はそれを非難するつもりも口外するつもりもない。安心したまえ」

司令室を出た後、シユンは行くあてもなく暗い表情で歩いていた。

「……………流石に、こたえるな」

苦笑混じりに呟いた声は小さく響いて通路に消えていく。

『貴様の存在は死神しか呼ばない！』

そうなんだろうな、と思ってしまう。時間が解決してくれるとささやかな期待をしていたが、違う。

そう考え小さく溜め息をつく。

「中尉？」

ここで生活した数日の間に聞き慣れたのか誰かすぐにわかった。セレナだ。苦笑を浮かべた顔を無理やり微笑に変えてシユンは振り返った。

「やあ、セレナ」

「具合、もういいんですか？」心配そうに見つめる彼女にシユンは笑顔で答える。

「大丈夫だよ。ありがとう」

そう答えると、照れたようにセレナはうつむいた。

「え？…ええっと、その、そうだ！中尉、まだみんなと会っていませんよね？」

「ん？ああ…そうだね。今報告しにいったばかりだったから」

「じゃあ行きましょう！ほら、早く！」

そう言つとセレナはシユンの手を掴み、走り出した。

「そ、そんなに急がなくても」

「善は急げ、ですよ」

つれて行かれたのは格納庫だった。

シユンは少し荒くなった息を整えながら、周りを見渡す。仲間たちはすぐに見つけた。

「あー！いた。みんなー！」

セレナが叫ぶとみんなすぐにこちらに気づいた。

純粹な笑顔を見せるハヤテ、

人なつっこい笑みを浮かべたイチマサ、

本当に小さいけれど微笑を浮かべてくれたリン。

その笑顔がオレにはとても嬉しかった。

そして、思わず呟いた。

「ここが…オレの居場所なんだな」

護ろう。

どんなに苦しくてもいい。

みんなが笑顔でいれるよう護り続けよう。 命の限り…

そう新たに誓いながらオレはみんなに笑顔を返した。

FILE・18 統一軍最高会議

まだ日が上がりかけの暗い部屋の中に目覚ましのデジタル音がけたましく鳴り響く。

その音に反応してベットのふくらみまでもぞと動きだし、ゆっくりとした動作で目覚ましのスイッチを切った。

数秒間沈黙したあと、ベットから青年：シュンが起き上がった。まだ眠そうに瞼を擦りながらシュンは立ち上がり窓のそばに近づいた。日光を浴びながらゆっくりと背伸びし、シュンは日光を浴びた都市を眺めていた。都市機能はすでに回復し、戦場だった名残もなくなった都市はとても綺麗に輝いていた。

あれから早3ヶ月が経とうとしていた。統一軍とオーガスタ軍の戦いは膠着状態に陥っていた。陸での戦闘では圧倒的に陸上兵力の多いオーガスタ軍に押され統一軍は常に陸戦において守勢に立たされていた。対して、統一軍は空軍力、海軍力でそれに対抗。空中・海上補給路を完全に封鎖することによって補給を絶ち、何とか敵の進撃を抑えていた。

余談だが、この1ヶ月の間にオーガスタ軍はその名を変えていた。国家として自国を認めさせたい彼らは統治地域の名から

ユーラシア・アフリカ連邦と名を変え、

さらに軍の名をその頭文字を取って

イーファ

E A F Aと変え、改めて統一国家に宣戦布告。

各地で激戦を繰り広げていた。

この島国でも、九州や東北などで両者が小競り合いを続けていた。

自分たちもそれに動員されるのかと思っていたがそうではなかった。

ここ3ヶ月。各地に点在する

ＩＤＦ全支部にＩＤＦ本部から待機命令がでていたからだ。

名目は都市防衛能力の低下を防ぐため、本音はどうやらＩＤＦ上層部が統一軍、イーファ。どちらにつくかまだ決めあぐねているからだという風の噂が流れていた。

とにかく、オレ達に一時の休息が流れていた。

しかし、その休息も長くは続かなかった。

その日はシュンはたいしてすることもあまりなかったため、自室で本を読んでいた。

あの戦闘以来、戦場が北越・東北地方に移動した為、ヨコハマに平穏が流れていた。

『…では、次のニュースです。今日から統一軍首脳陣が集まりここ、シドニーで統一軍最高会議が行われています』

着けっぱなしにしていたテレビからのその一言に、思わずシュンは本から顔を上げた。

『重々しい空気の中、執り行われている会議の内容は現在の所詳細は定かではありませんが、イーファに対する何らかの対応策についてが主な議題と思われます。以上、シドニーからのリポートでした。次は戦況報告です』

次の瞬間には画面が変わり、各地での戦況に映し出され、偉そうな専門家を名乗る連中が戦車の移動速度はどうだ、兵士たちの疲労はなどあだこうだとしやべり始めた。

「……最高会議…か、」
興味を失ったようにシユンは再び本に視線を戻した。
しかし、その会議が彼らを再び戦場に駆り立てることになるとは今のシユンにはわからなかった。

【シドニー・統一軍議会ビル】同時刻、ビルに集まった統一軍の主だった高級将校や地方軍を統帥する司令官クラスの幹部たちは数十席が階段状に並んでいる広い円形議会議場の中央、底に当たる部分に設けられた演台に立っている人物に注目を集めていた。

その人物は周りの幹部に比べてとても若かった。
参謀を表す黒の統一軍の制服を着こなし、彼のきれいに整えられた黒髪と切れ長の目も相まって、その制服が彼の為に作られたのではないかと錯覚するほどその人物に合っていた。

彼は一礼し、演説を開始した。

『現在、我々統一軍はイーファと開戦し、陸、海、空各軍において苦しい戦況が続いています』

そこで、1人の海軍将校が手を上げた。

「苦戦しているとはいえ我が海軍や空軍は優位に立っていると思うのだが」

同調したように空軍を示す白髭の将校が続ける。

「確かに、反乱を起こしたのは陸軍が主、我々からは小規模の部隊が離反したに過ぎないからの」

『しかし、それだけでは我々統一軍が優位にたつたとは言えません』
その一言に会場はどよめきに包まれていく。

『イーファの強さの本質は、圧倒的な生産能力にあるからです。ご存知の通り、敵陸軍MTは極めて優秀な性能を有し、無尽蔵とも言える連邦の生産力に支えられています』

そこで彼は言葉を切り、周りをゆくり見渡しながら続けた。

『我々統一軍が戦いに勝つためには、現存の戦力だけでは不十分なのです。連邦に勝る生産力を得るか、連邦の生産能力を徹底的に奪うか、このいずれかを実現しなければならぬのです。』

そこで彼は演台に設置された機械を操作し、世界地図を呼び出す。それをさらにある地点に拡大した。

『そこで私はイーファに対する大規模反攻作戦を提示します。
最終的な攻略目標は…、

アフアルコンビナート！三次大戦の折りに大油田が発見されたアフリカの東部一帯に広がる世界最大の工業地帯です』

目標を聞いた将校たちは驚きを隠せないようどよめいた。

『このアフアルコンビナートを奪えば、連邦の生産力は大幅に低下、特にMTの生産は半減するでしょう』

そこで顔を上げ、彼は首脳陣のいる最上階を見た。彼らも意表を突かれたような表情をしていた。この作戦をよくて敵の要地攻略と認識していたからだ。それを確認すると彼は再び演説を続ける。

『アフアルコンビナートを制圧できるか否か、この作戦の成否に統一国家の存亡がかかっているのです。しかし、アフアルを攻略すると言っても一筋縄にはいきません。イーファもその防衛には鉄壁の布陣で臨んでいるからです。…そこで私は作戦の第1段階としてマ

ダガスカル島攻略を提案します』

言い終わると、再び画面を変え、島を映し出した。

『この島はアフアルの南東に位置する島です。ここを制圧することでアフアルへの足がかりを築きます』

そこでスイッチを切り、彼は再び周りを見渡した。

『このマダガスカル島における攻防は苛烈を極めることが予測されますが、我々統一軍と協力を約定したIDFの力があれば、陸戦においてもイーファに対抗できるでしょう』

そして、高々と腕を上げて、彼は宣言する。

『開戦から3カ月、耐え忍ぶ時は終わりました。今こそ、我ら統一軍は総力を挙げ、この世界に平和を取り戻すのです！以上です』

一礼し、彼が演台を去ると同時に、会議場から大きな拍手が沸き起こった。それは事実上、作戦が承認されたことを意味していた。

『クライド上級参謀の表明演説を終えます……続きます』

演説を終え、シドニーにある統一本部に帰ってきたクライドを出迎えたのは、彼と同じく統一軍の参謀を勤めている従兄弟に当たるジェスタだった。

そして今、彼らは机を前に対峙していた。

「…全て、お前の計算通りに進んでいるんだ。クライ

ド」

そんな視線を一瞥して、クライドは淡々と意見書などを書き上げていく。

「ええ、このタイミングで上層部の古狸たちが重い腰を上げるのは予測の範疇でしたから。そこに完成度の高い作戦を提示すればいいだけですから」

「さすが参謀局切つての知恵者ということかな」

「いえ…」

「頭に『悪』のつくな…」

「まあ…知恵があることに越したことはありませんから」

皮肉を受け流すようにそう言うと、彼はジェスタの前に何かの予算を示す紙を差し出す。

「これは？」

「反攻作戦で私が指揮することになる統一とIDFの混成からなる独立陸戦隊の予算です」

「…お前の私兵か？」

「私兵はないでしょう、彼らは上層部の認可を正式に得た作戦計画の下に編成される部隊です。その証拠に予算もちゃんと認可されて国庫から出ているんですから」

ジェスタは、半目になってクライドをにらんだ。

「その予算の出所は、国防費とは全然違う所からお前が引っ張って

きて、無理やり認可させたというもっぱらの噂だが」

「出所なんてのは関係ありませんよ。予算が付くか付かないかそっちの方が問題です。金がなければ何もできませんからね」しれっと答えたクライドに向かって、ジェスタは真剣な目で言った。

「いい加減にしておけよ、お前がなんといつてもその部隊はお前が作って、お前が指揮する計算外の部隊であることに変わりはない。あらぬ疑いをかけられたらどうするんだ？お前の出世に含むところがある人間が、この統一軍の中には山ほどいるんだぞ」

「何、言いたいやつには言わせておけばいいんですよ。失脚の理由なんてのは何にでも言いがかりのつけれるものです。いちいち気にしていたら、埒があきませんよ」

ジェスタは肩を落として大きなため息をついた。

「なんだかんだ言っても、お前は、我が一族の出世頭だ。それは喜ぶべきことなのだろうが…な」

「評判が悪すぎますか？」

ジェスタは再びクライドの顔を半目でにらんだ。

「親兄弟親類一同はお前のことを『鬼謀の持ち主』やら『二十歳過ぎれば総軍司令官』などと誉め称えていたのだが…」

「……実際は、『悪知恵の持ち主』で『二十歳過ぎればテロリスト』だったというわけですか」
ジェスタはわめいた。

「自分で言うことか！」

「なに、軍の総司令官とテロリスト…それは同じカードの裏表でしかありませんよ」

その答えを聞いたジエスタは、本当に驚いたような表情で、声を潜めた。

「まさか…貴様、本当に反乱を企てているとでもいうのか？」クライドはポーカーフェイスをのまま、さらりと答えた。

「総司令官になることを望まれた人間としては、それくらいの野心は抱いておかないと失礼にあたるのではないかと？」

ジエスタは音がするほどの勢いで首を振った。

「……もうよい、お前と話しているとまともな考えができなくなる！」

そういつて、怒ったような足取りで部屋を去っていく従兄弟を見送ったクライドは、ふとテレビの電源を入れた。

速報が流れていた。内容はIDF上層部は正式に統一国家政府並びに同軍に対して協力体制をとることを表明し、事実上、統一軍内の独立軍のような立場となったというものだった。それを見たクライドは小さく笑みを浮かべた。

「…全て、計算通り」

そう小さく呟くと彼は再び先ほどの予算の紙を手にとった。

…乱世こそ、名を上げる一番の好機。成り上がってみせるさ。

会議から2日後

西暦2046 9月14日

統一軍に対するIDFによる

協力体制の確立。

正式にクライドの立案した

反攻作戦が可決された。

反攻作戦名

『パートナー・アタック』
はここに始動した。

FILE・19 新たな戦場へ…（前書き）

半年以上も更新せずにいたこと本当に申し訳ありません。自分勝手ですが言い訳をさせてください。就職活動や就職先への引っ越しの作業で書く暇がまっただけなかつたのです。これから改めて書き始めますが、仕事があるので更新は不定期になると思います。それでもできるだけ早く更新できるよう努力しますのでお願いします。長ったらしい前置きを書き、すみません。本編をどうぞ

作戦の発令と共に統一軍の動きは活発化し、着々と侵攻準備が進められていた。

その動きは旧世紀の有名な上陸作戦を連想させるほどの大規模なものだった。統一政府はこの作戦の為、臨時軍事費を捻出して、陸軍兵力の再建と拡充を始め、空、海両軍の支援を断行、

一方イーファ陣営はこの動きを察知するとすぐに領域全体に第一戦備態勢を発令。

各防衛拠点の強化、さらに内地部隊を増援として派遣し対応した。

IDFもまた、準備を始めていた。しかし協力を表明し、軍事行動に参加するとしたが、彼らの戦闘に対する練度は統一軍に比べて明らかに不足していた。

都市防衛組織というのは名前の通り都市の「守備」を前提に創設されている。つまり、守備に特化した軍なのだ。市街地に置ける防衛戦闘では一流の働きを見せるが、彼らはこちらから侵攻する作戦には創設以来、一度も参加はおろか訓練さえしたことがなかった。

そんな素人集団と言えるIDF軍を上陸作戦の最前線に投入するのが困難と判断した統一軍は彼らの港湾都市防衛の為に所有していた海上兵力や航空兵力を統一主力艦隊の後方支援に当て、陸上兵力…特に主力に成り得る現行統一軍の兵器より秀でたIDF新型MTを統一軍の大隊に組み込み混成大隊を編成し、対応することに決定した。

IDFはそれを受け入れ世界各都市に配備された一線級MT部隊の引き抜き、再編成及び統一軍への編入を急がせていた。

世界各地で戦局が大きくうねりを上げ始めた頃……

Ⅰ - 太平洋 - -

天気が快晴、波も緩やかな洋上を四十隻以上にも及ぶ大船団……

統一軍アジア方面連合艦隊が颯爽と隊列を組んで海上を走っていく。

その中でも異常なほど目を引く存在があった。艦隊の中心部にイー
ジス艦数隻に護られながら波を切って走っていく空母群だ

現代戦争において空母は主力、といっても過言ではない。実質戦う
のは艦載機だが、洋上を自由に走りまわり、戦艦の天敵たる戦闘機
を排出する空母は近隣に味方の基地がない上陸戦や海洋に面した拠
点の防空戦、艦隊決戦などで高い戦果を上げる必要不可欠な存在だ。

一隻でも高い戦力になる空母を十数隻揃えている。それが統一国家
の軍事力の高さを見せていた。

その空母群の一隻……

統一海軍極東方面所属空母

「キサラギ」

ゆっくりと動くその滑走路の上には戦闘機は載ってはいない。載っているのはMTだった。

MTが開発されて以来、空母は大きく二種類に分けられている。従来の戦闘機を搭載した通常空母と現行のMTにフライトジャケットと呼ばれる飛行用パーツをつけた機体を運用する特殊空母である。

MTは通常、陸戦兵器であり空戦能力はほぼ皆無。しかし、戦闘機にはないMTの武器搭載力や汎用性に着眼した軍部は飛行用パーツの開発に着手した。そこで開発されたのがこのフライトジャケットである。

これは戦闘機と比べると速度や巡航能力ではかなり劣っていたが、安定した空力の確保には成功していた。

さらに戦闘機にはできない圧倒的な旋回性能や戦闘機には搭載できない強力な武装を装備できるという利点が生まれ、高い空戦能力が実証、

改良と開発が現在まで進められ飛行用MTは統一軍の主力の一端を担うまでに成長していた。

現在キサギの甲板に配備されているのは極東方面隊が開発、量産している飛行型MTの

第三世代【ヒイラギ】という機体だ。

一世代の初期型はただ従来の陸戦MTにフライトジャケットを装着させただけの為、安定性に難があった。

それに若干の改良を加え、安定性を加えたのが現在、両軍の空戦MTの大半を占める二世代のMT。

どちらも陸戦MTの派生型という色が強かったものを抜本的な新規開発に挑んだのがこの三世代だった。

その三世代構想で製作されたこのヒイラギは従来のMTに比べて機体のボディによって構成されていた。重装甲を持ち味としていたMTの特徴をあえて機動性重視の為になくし、専用武装を施し、軽量化に成功。

それによって空戦MTの弱点とも言える機動性を完全に克服、さらに安定性、操縦性においても高い性能を維持していた。

外見は

頭部は空中での視界確保の為、アイカメラを使用しないフルフェイスの角張ったヘルメットのようなデザイン。

ボディは装甲を犠牲に軽量化した細身の設計だが飛行安定の為に全身にゴテゴテと

スラスターをつけているため鎧武者のように見えなくもない。色は少し青みがかったカラー。

そして最も特徴的なのは背部に装備された大型のスラスターと飛行翼だ。

極東方面軍の技術者と協力体制を取っていた日本の企業体が飛行MTのノウハウを詰め込んだ傑作機として極東方面軍に普及されつつある機体だった。

飛行甲板に固定されているそんなヒイラギの機体群の勇姿を目を嬉しそうに光らせて眺めている統一軍ともIDFとも言えない真新しい制服をきたまだ若い兵士がいた。

「…すごい…すごすぎる！…統一軍の最新兵器、極東方面軍の傑作機と呼ばれたヒイラギをこんな間近で見れるなんて…」

キラキラと目を光らせて見ていたのはハヤテだ。

「おーい。ハヤテ、何してるんだ？」

そんなハヤテに同じ制服をきたイチマサが近づいて声をかける

「あ、イチマサさん。何ってヒイラギを見ていたんです」

「ヒイラギ？おお〜こいつのことが」

「はい！統一軍の、ましてその最新兵器を間近で見ることが出来る機会なんて滅多にありませんから！」

「……やけにテンション高くないか？お前？」

「ええ〜！そうですか？僕はそんなことないと思いますけど」そういいながら、

「ああ、いいなあ」とか

「ハヤブサもいいけどヒイラギもかつこいいなあ」

と嬉しそうにため息をつきながら眺めているハヤテをイチマサは乾いた笑い声を響かせていた。

（…初めてこいつがハヤブサと会った時もこんな反応していたんだよな〜）

「イチマサ少尉」

そんなことを考えていると、後ろから声をかけられた。振り向くとリンが歩いてきていた。

「ん？リンか。どうした？」

「隊長、知りませんか？ちょっと用事がありました…」

「シユン？あいつなら部屋にいるぞ」

「部屋？」

「何でも船酔いがひどいらしくてな。あいつの知り合い…ほら、オシラと一緒にキサラギに乗り込んできた医者がつきつきりで看てるらしいんだ」

「…船酔い？」

「ああ、意外だろ？MTであんな機動見せるくせに船酔い如きでダウンなんて。まあとにかくそういうことだ」

「…そうなんですか。じゃあ無理ですね」
そういつてリンは溜め息をついた。

「何の用事だったんだ？」

「別に、重要なことでもないんですけど。…リベンジしたかったです」

「リベンジ？」

「…シュミレータ」

「シュミレータ？…ああ、あん時のか？てか、お前まだ根に持ってるのか？」

そう言いながら、笑うイチマサに恥ずかしそうに顔を背けながらリンは続ける。

「根に持ってるわけじゃない！ただ、今の私の力がどれだけなのか確かめたかっただけなんだから！」

「安心しろよ！お前の力は本物だ。だから自信を持てよ、リン（準尉）殿」

「…何だか、しっくりきませんね。一兵卒からいきなり尉官に昇進なんて」

「…そりゃあオレだって下士官からいきなり少尉だなんて信じられねえよ」

そう呟きながらお互いの階級章を見る。どちらも真新しい尉官クラスを表すものがつけられていた。

「いくらヨコハマ戦で功績を挙げたからって一階級昇進ならともかく二階級特進ならず四階級爆進なんてありえねえよな」

「…なにか裏があるんでしょうか？」

「さあな？わからん。…だがこれだけは言える」
急に押し黙ったイチマサ、リンは視線を向ける。

「給料が高くなる！」
イチマサはそう言うのがははっ和高笑いした。

「……………」

「ははは。…て、あれ？…駄目か？」

なんの反応も示さないリンに戸惑いを隠せない様子のイチマサ
「おい？リン？悪かったって。反応してくれよ」

「……………手」

「手？」

「手のひら、こう、顔の前にかざして」
言われたとおりイチマサはしてみた。

リンはそこを突っ張った。予想通りイチマサの手が顔面に直撃する。

「ぐふ！」

イチマサはその一撃を妙な声を挙げてしゃがみこむ。

「…いきなり何すんだ。一応年上だぞ！」

鼻を押さえながら、イチマサは涙目になって反論する。

「…ふざけすぎ」

無表情ながら少し怒り気味にリンはそういうときびすを返すようにして船内に戻った。

「…イチマサ少尉！ってあれ？どうしたんすか？そんなとこしゃがみこんで」

ようやく元に戻ったのかハヤテが振り向いて、こちらの異変に気づく。…どうやら先ほどのことは見ていなかったようだ。

「…何でもねえよ」

そう告げるとイチマサもバツが悪そうに船内に向かう。

「……？」

そんなイチマサの動きにわけがわからなかったが、ハヤテも一緒に船内に向かった。

そんな頃、シユンはあてがわれていた士官用個室で少しだるそうな表情を浮かべて横になっていた。

だるそうなのは船酔いの為ではない。本当の理由は今その腕につけられた点滴にあった。

「…なあ、カツラギ」。正直に言うとかなりきついんだけど。この点滴、頭はクラクラするし体はだるくなるし」

少し遅めの速度で顔を動かして見た先にはカルテを持ち真剣な面もちでそれを見ているカツラギがいた。

「…我慢しろ。それはお前の身体を長く保たせるための対抗薬なんだ。まだ試験薬の域だから副作用は強いんだ」

「完成品持ってきてくれよ」

「完成する前に呼ばれたんだからしょうがないだろ。急だったんだから」

ため息を漏らしながらカツラギは疲れたように壁にもたれかける。

「……それに、あの時の薬に比べたらマシな方だろ」

「…ああ。あんな物二度と嫌だな」

嫌な記憶だったのか少し顔をしかめてシユンはつぶやく。

「…よし、終了だ。もういいぞ。動いても」

「…こんな身体で動けると思っか？」

少し恨めしいようにカツラギに愚痴をこぼす。

「ははは…。それだけ元気なら大丈夫だな」

パンパンと肩を叩いた。少し痛かったのかシユンはさすりながら、何かを考えているようにうつむく。

「ん？どうした？」

「いや、ちょっと初めてあつた時のことを思い出してな…」

「そつか。今思えば…変な出会いだったよな」

「ああ、昔の記憶は嫌なものばかりだが、いい記憶もある」

「ふ…、その中にはあの人の記憶も含まれてるんだろ？」

「ん…まあね」

いきなり沈んだようにシユンは顔を俯かせそんな空返事を返した。

「好きだったんだろ？」

「え！？」

その一言に、シユンは一瞬の内に顔を真っ赤に染まる。

「あ…いや、その、彼女はそんな…好きだなんて。いや！嫌いってわけじゃないけど…」

「バレバレだぞ」

しどろもどろになるシユンを横目に、カツラギは煙草を取り出しながらい放つ。

「いいじゃないか。隠さなくても、ガキだったオレの目から見ても魅力的な人だったんだからな」

「うゝ」

シユンは唸りながら身体ごと背けてまだ赤い顔を隠す。

それを見ながら、カツラギは煙草に愛用のジッポ―を取り出し火をつけた。

「…室内は禁煙だぞ」

「一本くらい大丈夫さ」

「一応、軍艦の中なんだが」

「オレは軍属じゃないからいいんだよ」

はあ、とあきらめたようにシユンはため息をついた後、真新しい制服に着替え始める。

「…しかし、お前とその仲間たちが特殊機動軍に編入されるなんてな」

煙を吐きながら、カツラギは自分の吐いた煙を見ながら呟く。

「…オレだってこれでも驚いてるんだ」

制服に着替え終わると、少し乱れた髪を整え始めた。

「制服も自前、補給ラインも独自で構築しているし、これじゃID Fと同様、独立軍のようなものだよな」

「それに統一に編入されていきなり昇格なんておかしいしな」

「まあそのことはいいじゃないか。大尉殿、その高給でオレに一杯奢れ」

煙草を消し、携帯灰皿に突っ込みながら言った。

「…はあ、わかったよ。考えとく」

「応、頼むよ。大尉殿」

からかい半分のカツラギに溜め息をつきながらシュンは衣服を整え始めた。

「ん、どっか行くのか？」

「スオウの整備。出航してからあまりしていなかったから」

「そうか…じゃ、オレもお暇するわ。なんかあつたらオレの部屋にこいよ」

そう言うとかツラギは部屋から出ていった。

「…さて、行くかな」

そう小さく独り言を呟きながら衣服を整え終わり、調整用のコンソールを取り出した時、ノックが聞こえてきた。

「ん？カツラギかな」

おおかた忘れ物をしたんだろうと思いつつ、シュンはドアを向かって声をかけた。

「カツラギか？何か忘れたのか」

「いえ、私、セレナです。ユメちゃんもいますよ」

「え、セレナ？あ、鍵開いてるからいいよ」

「じゃあ、失礼しますよ」

「し、失礼します」

ドアが開き、セレナとその後ろから様子を伺うようにユメも入ってきた。

「どうしたの？」

「お見舞い、カツラギさんから大尉、船酔いでダウンしているって聞いていたんで様子を見に来たんです」

「思ったより調子は良さそうですね。安心しました」
ユメがほっとしたようにため息をついてシュンに話しかける。

「心配してくれてありがとう、嬉しいよ」
本当に嬉しそうな笑顔に二人とも顔を赤くして俯いてしまう。
「えっと、あれ、どこか行くんですか？」

「うん、調子が良くなってきたから今の内にスオウの調整しようかなと思ってね」

「じゃあ、私たちが手伝いますよ！」

「え、いいよ、セレナたちも仕事あるだろ」

「仕事は終わりました。私たち戦闘時のオペレーターとしてIDFから派遣されましたから平時にはあまり仕事がないですよね」

「シュン大尉は船酔いでしたけど病み上がりの身なんですよ。少しくらい楽しいくらいです。整備はできませんけど、調整くらい

なら手伝えます」

セレナとユメの提案にシユンは本当に悩み始めた。
確かに助かるんだがね……

あまり、スオウに関連してほしくない。自分から見ても……
あれは……本当の……

……死に神の化身だから……

考えこむシユンにいきなりセレナが抱きついてきた。

「お願い。正直に言います。暇なんです！」

いつもとは違う猫なで声で話しながら少し顔を赤らめてシユンの腕に強く抱きついていく。

「セ、セレナ！ はは離れてよ」顔を真っ赤にしながらシユンがうわずった声で反論しながらどうにか離させようとする。

「いや」。許可があるまで離しません。そうだ、ユメも抱きついちゃえ！」

「ええ！！無理だよ！」

ユメは顔をシユンに劣らないほど真っ赤にしながら横に顔を降る。

「いいから！ ほら早く！ こんな時じゃなきゃこんなことできないよ」
じたばたするシユンを押さえながらセレナがそう言くと、ユメがうくと恥ずかしそうに唸り、タツクルするような勢いでシユンに抱きついた。

「ユ、ユメちゃんまで……」

ふりほどこうとも両側から抱きつかれた為あまり強くは抵抗できな

くなる。

「あの、その、お願いだから離れて」

顔を真つ赤にしながら必死に頼み込むシユンに対して二人は一向に離れない。

シユンも流石に耐えられなくなってきた。

「……大尉」

小さく恥ずかしそうな声が聞こえてきた。出所はユメだ。

「駄目、ですか？」

そう上目遣いで頬を朱に染めながらユメは問いかけてくる。

「う……」

そんなトドメの様な行動にシユンは反論できなくなった。

こんなの反則だよ……

と思いながらため息をついた。

「……いいよ」

短くそう答えた。

「やった！作戦勝ちー！」

と片手を上げてセレナは喜ぶ。

「本当にすみません……」

そんなセレナとは対照的に反省しているのかユメは腕を離し謝ってくる。

「ん、いいよ。考えてみれば楽しさせてもらえるんだから。…そろそろ離してくれない？…セレナ」

そう言つとセレナはえゝ、と言いながらもおずおずと離れた。

部屋を後にしたシュン達は移住区を離れ、一路スオウのある第二格納庫に向かった。

このキサラギは統一軍極東方面艦隊所属の空母で第一格納庫は統一軍の空戦MTによって使用されている。本来なら予備格納庫、物資保管庫として使用される第二格納庫は、同乗しているIDFと統一軍の混成軍、

通称「戦時特殊機動軍」に貸し出されていた。

当初、クライド上級参謀によって立案され、創られたのは

「戦時特殊機動陸戦師団」

というものであった。本来なら統一陸軍の下で投入されるはずだったが、ある問題が発生していた。

統一陸軍は反乱によって主力戦力と同時に多くの将校も失っていた。その為、未だ再編成の真つ只中であり、訓練を終えたばかりの若いひよこ将校ばかりの陸軍司令部にはこの混成部隊は手に余るものだった。

さらに、師団という名目だったが数で言えば一国クラスの兵力を集めていた。IDFの参加者以外の志願者が予想以上に多かったのと統一陸軍のひよこ将校達には統率できない一癖も二癖もある地方部隊が丸投げで編入されてきたのが大きな理由だった。

「……そういえば、大尉知ってます？」
格納庫に向かう通路を移動していると唐突にセレナが話しかけてきた。

「ん？何のこと？」

「私たちの小隊に、新しくパイロットを編入する話です」
へえ、と少し驚いたように声を上げるシュン

「それも、IDFじゃなくて統一軍にいた人らしいですよ」

「知らなかったよ。よく知ってるね」

そうシュンが褒めると得意げに胸をはるセレナ。

「ブリーフィングで参謀から紹介があっただけです」
そんなセレナを見ながらユメがあつさとネタばらしした。

「……ユメ、なんでそんなことあつさり言つのよ」

「本当のことなんだからいいでしょう？」

うう、とうなるセレナをシュンはなだめてユメに話しかける。
「で、どんな人なの？」

「統一軍の人からの情報だとしても明るくていい人でしたよ。…
…ちょっとイタズラ好きらしいですけど」

「……イタズラ好き？」

その一言にピタッと歩みを止めるシュン。

「……？。ええ、それに結構大人の女性って感じて綺麗な人という

話なんですけど……」

そう言いながら、ユメがシュンを不思議そうに見上げた。
すると、そこにはいつもは笑顔を崩さないシュンが大きく顔を引き
つらせて冷や汗を流していた。

「ど、どうしたんですか？」

そんなシュンに驚きながらユメが聞くが、聞こえていないのか一人
で考え出す。

「統一軍で……イタズラ好き？……ま、まさかね」

「あ、そういえばその噂の彼女もしばらくMT整備していないから
って言ってたから今多分格納庫にいますよ」

そんなセレナの一言に、さらに顔を引きつらせ青ざめたシュンは来
た道を急に引き返そうとする。

「ご、ごめん！急に気分が悪くなった。整備はまた今度にするよ」

「え〜！どうしてですか！」

セレナが非難をあげる。

「本当にごめん！」

そう言って頭を下げると、シュンは引き返し始めた。その拳動に不
審を抱きながらも彼女たちも仕方なく一緒に戻ろうとしたその時、

「……そんなに、小生と会いたくなかったのかな。シュン」

後ろから凜とした声が聞こえてきた。その声に反応して、シュンの
体は固まる。

ゆつくりと、油の切れた機械のようなぎこちなさでシュンが振り向

くと若い女性が近づいてきていた。

大きくなめらかな自信がみなぎった歩き方。軍人のはずなのに膝まであるアイリツシュ・セーターに黒のスパッツに身を包んだ、魅力的な女性だった。

ルサとはまた違う赤褐色の豊かな髪が無造作に肩へ落ち、優しい顔立ちを引き立てている。その気取らない美しさと強い自信をのぞかせる素朴さが人の目にはとてもすがすがしく見える。

そんな優しい顔立ちも今は少しの怒りで不機嫌な表情を浮かべている。

彼女はシュンの目の前までくると彼の顔を見上げる

「……シュン、小生の質問に答えなさい」

その有無を言わさない冷やややかな声にシュンは後ずさる。

「いや、会いたくなかったわけではないよ。ただ、ちょっとまた急に具合が……」

「……ふむ、具合がですか」

「うん！ そうなんだ」

その間もシュンは後ずさるが彼女はその度、近づく。

「……おかしいな」

「……何が？」

思わず反応して質問してしまうシュン。

「先ほど、小生はカツラギと会ってな。シュンの治療は完了したと聞いている。少し調子は悪いかもしれないが、急に具合は悪くならない、とも言っていたはずだがな？」

「え、ええと」

その一撃にシュンは口ごもってしまふ。

「……さて、次はどんな言い訳を小生に聞かせてくれる？」
とうとうシュンは通路の壁に追いつめられた。

「あ、ううう」

シュンは視線をセレナたちに向けて助けを求めるが、彼女の威圧感に押されているのか、首をふるふると横に振る。

「……シュン？どうした？」

その一言にとうとうシュンは根を上げて、頭を下げる。

「……じ、ごめん」

しばしの沈黙の後、最初にそれを破ったのは彼女だった。

「よし、許してやろう」

その彼女の顔からは不機嫌さはもうなく、新たに優しい笑みが浮かんでいた。

「素直に謝れば、よかったものを、まったく」

「……ごめん」

まだ罪悪感が残るシュンは本当にすまなさそうに謝る。

「……そんな顔するな、ん、でははじめとして一つ言うことを聞い

てくれ」

その提案に、一抹の不安を感じながらも原因は自分にあるんだからと意を決した。

「まあ、オレにできることならいいけど」

その言葉に、さらに嬉しそうな笑顔になる彼女。

「そうか！よし、ならば……」

そう言うとな彼女はいきなりシュンに抱きついた。一瞬何がおきたのかわからなかったシュンだが、状況を理解すると急速に顔を真っ赤に染める。

「あ、おい！」

反論するシュンに顔を近づけて笑顔で応える。

「キス一つで、許してやるわ」

その一言に顔をさらに赤く染めて、首を横にふるシュン。

「おや？言うことを聞いてくれるんじゃないの？」

「さあ、目を瞑って」

もう駄目だ、と半ばあきらめ、従おうとした。その時、

「駄目え」！

ようやく硬直から回復したセレナたちが声を上げる。

「大尉から離れてください！」

「シュン！！駄目だよ。絶対駄目だからね！！」

二人は関を切ったように阻止にかかる。

「……あゝあ。後少しだったのにな」

彼女は残念そうにシュンから離れようと体を外す。

ホッとしたようにため息をついたシュン。そしてセレナたち

……しかしそれはいけないことだった。少しだけ、気を抜いてしまった。彼女の前でそんなことではいけないのに。

唇に柔らかいものが当たる。

ん？と思ったのも一瞬、それが彼女の唇だと認識するのに時間はかからなかった。

「「ああゝゝ！！」」

二人の絶叫が通路に響く。

「ふふ。油断禁物だ」

唇から離れて彼女は呟く。

シュンは最早顔を真っ赤にし口をパクパクとして硬直している

「ううゝ、あなたは、一体誰なんですか！？」

セレナがそういうと彼女は、初めてそれに気が付いたようだ。

「おっと、失礼。紹介がまだだったな」

そう区切り、笑顔で応える。

「本日づけでシュンの小隊に配属になる、アンリ・リスカープ中尉だ。以後よろしく頼む」

「配属？あなたが？」

ユメの呟きにアンリは頷く。

「……そして、加えて言うとだな」

思わせぶりにアンリが言った言葉に二人は絶句した。

「シュンの恋人だ」

FILE・20 突然の再会（前書き）

変な方向に進んでしまいました。が何とか書き上げました。是非読んで、できたら評価ください。よろしくお願いします。

FILE・20 突然の再会

「本日より特殊機動軍極東混成大隊17小隊に配属されたアンリ・リスカープだ。これからよろしく頼むぞ」

あの一騒動の後、シユンたちは格納庫にきていた。いや、アンリによって連行されてきたというのが正しいだろう。

そこで、偶然にもハヤテたちに合流したこともあって、アンリは改めて自己紹介していた。

「ハヤテ・ミズハサです。こ、これからよろしくお願いします。リスカープ中尉」

少し緊張気味なのか、ハヤテは姿勢を正して話す。

「アンリでいい。だから小生もハヤテと呼び捨てでいいか？」笑顔で応えるアンリに少し緊張がほぐれたのかハヤテも少し笑顔を浮かべる。

「は、はい！アンリさん」

「おう！オレはイチマサだ。よろしく頼む！」

「よろしく。年上だから敬語を使った方がいいか？」

「ん、いやあんたの話しやすい方でいいぜ。自然体が一番だからな」そう言つと高らかに笑うイチマサ。それを横目にリンが一步前に出る。

「……リン・ユウキです。これからよろしくお願いします」

「うむ、よろしく頼むぞ」

そう言いながら、笑顔でジッとリンの顔を見つめるアンリ。

「……？……何ですか？」

「いやすまない。小生の妹に少し似ているな、と誤ってしまってな」

「……そうですか」

「うむ。まあ、部隊で女性のパイロットは小生と準尉だけだ。仲良
くしょうな」

「……なら私も、呼び捨てでいいです」

「よし、小生のことも呼び捨てで構わないからな。リン」

「……はい。アンリさん」

優しい笑顔につられて小さく笑みを浮かべるリン。和やかな雰囲気
が流れる。

「……ところで」

リンが不意に視線を変える。

「どうしたの？三人」

視線の先にいたのはシュンたちだった。シュンは何故か、顔をほん
のりと赤に染めてあらぬ方向ばかりに視線をさまよわせている。一
方、セレナはブスツとした表情で、ユメは何かきっかけがあればす
ぐ泣きそうな表情で紹介をしていた今までアンリを見ていた。

「……何でもない」

不機嫌そうにセレナが答えるとリンは不思議そうに首をかしげる。

「…ふふ、そんなにショックだったのか？小生の発言は」

「……嘘、大尉がそんな…、絶対嘘に決まってます！」

セレナは絶対信じないといった感じに指をアンリに突き出す。

「嘘、って何がですか？」

状況の把握できていない三人を代表してハヤテが質問する。

「ん？…ああ、対したことはない。小生がシュンの恋人だと言っても二人が信じてくれないのだよ」

「へえ、アンリさんが隊長の恋人……って、ええ！？」

さぞ驚いたような仕草に可笑しそうにアンリは口元に手を当てる。

「……本当に？」

いつも冷静なリンも驚きを隠せないような口調で話す。

「ああ、正真正銘私はシュンの恋人だ」

尚もおかしそうにしながらも、アンリは答える。

「おい！本当かよ、シュン！なんでこんな美人さんの恋人を隠してたんだよ」

からかい半分といったかんじでイチマサが肘でシュンを小突いた。

「ち、違うよ。……アンリは恋人なんかじゃ……！」

「ほお、恋人じゃない、ね」

全く信じてない感じに、頷くイチマサ。

「だから話を聞いてくれよ！」

「……シュン」

自分の名前を呼ぶのに反応してそっちを見ると、少し涙目になりながらこちらを見ているアンリがいた。

「そんなに小生のことを嫌いになったのか。センダイに居た頃あんなに愛しあったというのに……。小生のこともう忘れてしまったのか！」

そして、顔を手で隠して泣き始めた。しかし、シュンにはそれが嘘だとわかっていた。センダイに居た頃にも使われたこの方法で何度も酷い目にあってきたんだから。

（泣きまねだ…絶対俺を罠にかけてる！）

「女性を泣かすなんて……最低だぞ！シュン」

「さすがにこれは……フォローできませんよ。隊長」
それに気付かず、イチマサやハヤテから非難の声を上がる。

「あれは嘘泣きだ！騙されるないでくれよ！」
そう言っても、二人はまったく聞き入れてくれない。

「アンリ！もうそろそろ勘弁してくれ！？」
その必死の嘆願を聞くと、アンリはゆっくり顔を上げる。

「仕方がないな…もうちょっとからかいたかったのだがな」
その顔には涙はなく、微笑を浮かべていた。

「……えと、今までの全部嘘なんですか？」

ハヤテがそう質問すると、アンリは肯定したように頷く。

「ああ、泣いてはいないし小生はシュンの恋人ではない」

笑いながら、答えるアンリに一同は大きくため息をつく、パイロット三人とシュンは疲れたように、残りの二人はホッとしたように。

「だがね……」

アンリはそう呟くと、いきなりシュンの腕に自分の両腕を絡める。

「「あう!?!」」

本日二回目の二人の叫びが格納庫に響く。意表を突かれたのか妙に変な声だった。

「小生は本当にね……シュンを愛している。もうベタ惚れさ」そんな面とシュンを見据えて、顔を赤らめながら宣言するアンリに再び赤面するシュン。

「……返事を聞かせて?……シュン」

「い、いや。返事って言われても……とにかく離れてくれ!?!」

そんなシュンの願いを退け、アンリは嫌、呟きさらに腕に力を込め、胸を押し付ける。

「ふふ……。知らないだろう?小生、着やせするタイプだから意外と……大きいぞ?」

さらに真っ赤になるシュン。その言葉に横にいた五人も思わず視線を向ける。そのふくらみを見て無条件に敗北感を感じてしまう三人。そして、そこに視線を向けてしまい、シュンと同じくらい真っ赤になり俯くハヤテとイチマサ。

「男子たるもの、大きい方がいいに決まってるだろう？　なあ…ハヤテ君」

「え……いや……その」

顔を俯かせ、しどろもどろになるハヤテ。

「あゝもう！　離れてください！」　もはや我慢の限界といったようにセレナが無理なり、アンリをシュンから引き離す。

「もう……乱暴だな」

少し残念そうなアンリをよそに今度はシュンを非難する。

「シュン大尉も少しは抵抗してくださいよ！……それに視線も一点にばかり集中していましたし！」

「ご、誤解だよ！」

「やっぱり大尉も大きいほうがいいんですか！　私やリン、ユメちゃんサイズの物足りないんですか！」

「「セ、セレナ！？」」

その一言にユメとリンは恥ずかしそうに俯く。そんな彼女たちを尻目にセレナは何故か胸を強調してシュンに迫る。その隣でアンリは「おやおや…」とおかしそうに笑みを浮かべている。

「な、何か話が逸れてるって！　絶対に！」

「いいから答えてください！」

そんなことを言われてしまうと自然と胸に視線が集中してしまう。助けを求めようと、ユメに視線を向けるが、彼女も何故か恥ずかし

そつに「ううう」と唸りながらも両腕で胸を強調している。
リンなら、と視線を向けるが、彼女も頬をうつすらと染め、シュンから顔を背けながらも、無言で右腕で左腕を掴みそれを支えに胸を強調している。

二人とも本当に恥ずかしいのだがその質問には興味があつた。
最後には、ハヤテとイチマサに懇願するような目で助けを求めたが、あきらめろ、といった感じで苦笑している。

「さあ、答えてください！」
さらに強調して迫るセレナに、頭の回路がおかしな方につながり始める。

「お、俺は……」
観念したように答えようとした瞬間。

格納庫内が真っ赤になり、敵襲を知らせるサイレンが鳴り響く

『緊急警報！緊急警報！艦隊前方に敵艦隊発見！全鑑対鑑、対空戦闘配備！繰り返す……』

『空戦MT隊発進用意！準備を終えた機体から上げる！』

『陸戦部隊は空戦部隊出撃後に甲板にて対空防御に当たれ』
格納庫内もそれらの放送に一気に慌ただしくなる。

「おいおい…こんな海の上で戦闘かよ」

「各員出撃用意！急げ！」

了解、と三人は敬礼すると搭乗員室に走り出す。

「セレナたちはすぐにＣＩＣへ急ぐんだ！」

「え？」

「君たちは戦闘オペレーターだろう？急いでくれ！」

そう告げると慌てて二人は、格納庫から通路を抜けＣＩＣへ向かう。シユンは、この時ばかりはイーファが襲撃してきてくれたことに感謝した。

質問に答えなくてよかったこと、……そして、後ろにいるアンリと二人にしてくれたこと

「ふふ…、頼もしくなったな。セ نداイに居た頃よりずっと」最後まで残ったアンリは微笑みながらシユンの背中に話しかける。

「……アンリ」

「ん？」

振り向かないまま名前を呼ぶシユンに、早く行け、とか言われるのかなと思いつつ、返事をする。

「……頼みがある」

「何かな？」

「君が知っている俺の秘密……みんなには言わないでほしい」そう告げたシユンが、どんな顔をしているのか、アンリにはすぐにわかった。

だから、彼女は優しく彼の腰に手を回し背中から抱きしめる。

先ほどとは違い本当に優しく包み込むように

「……約束しただろう。小生は秘密を漏らさない。愛しい人の頼みだからな。……だから、そんな苦しそうな顔をするな」

「……いつかバレるのはわかっている。でも…、今は…知られたくない」

「うん、…わかるよ。だから、今は自分自身に約束したことを果たすんだ」

そう言っていると、アンリは自ら離れて真剣な表情で彼の返事を待つ

「……そうだね、俺が俺自身に約束したこと……」

深呼吸して、振り向いたシュンの顔は新たにその約束を守るという、強い意思が現れていた。

「俺の力は、みんなを護るために使う」

FILE・21 海洋戦線（前書き）

ほったらかしにしてしまい、すみません。こちらも不定期ながら投稿できるようがんばります

洋上は、快晴を極め、波も本当にゆるやか……

戦争という嵐とは無関係に、海は平穏そのものだった。

その海を飛ぶ、平穏とは似つかわしくない物が無ければ……

緊急警報が鳴り響き、慌ただしい空母キサragiの甲板には射出要員が忙しく動いていた。その横のカタパルトデッキからヒイラギが次々と空へと飛び立つ。

「第6飛行小隊発進完了！空戦部隊撃ちだし完了しました！！」

「よし！次、対空部隊、さつさと甲板に上げる！もたもたするな！」
隊長らしい古参の兵士が若い兵士たちに拡声器片手に叫ぶ。

「り、了解！陸戦隊を迅速に甲板に上げるんだ！！」

「さつさとしろ！早くしねえと俺らが蜂の巣になっちまうぞ！」

頭上が慌ただしい声が響いているのを確認しながら、シュンはコックピットの全周囲カメラに移る頭上に開いた昇降機の空洞から見える空を見た。

快晴だった。

「……あの時、と同じだな」

そう呟き、ゆつくりと目を閉じる。

今日と同じくらい晴れた日。

とある基地……今はもう跡形もなく吹き飛んでしまったが、そこにあった警戒塔の最上階でいつも変わらない景色を見た。

彼女と一緒に。

俺がまったく変わらない景色を毎日のように見て楽しいの？と疑問に思い、彼女に言った。

それを彼女は微笑みながら、こう言った。

『チビさん。あなたは変わらないって言っているけど、この景色はいつも私に違うものを見せてくれているのよ。』

私には自由がないから絶対に行くことはできないけど、風に乗ってやってくる高山植物の優しい香り、海の大らかなさざ波。

それらが私をその別の景色を見せてくれるのよ。音や香りだけじゃない。この景色だって変わっていないように見えて小さいながらも変わっているの。この景色も、この世界もね』

そんなものの？と呟くと

『そんなもの、なんですよ』と笑顔で応える彼女。

本当に優しいその笑みは忘れられない。

『……長？隊長！』

そんな妄想に夢見心地になった頭が一気に覚醒していく。

「ど、どうした？ハヤテ」

『どうしたってそれは隊長の方です。ぼおっとしてどうかしたんで』

すか？』

「ん……悪い。ちょっと考えごとしていた」

そう言いながら、シユンはスオウの立ち上げ中の画面に目を向ける。

「出港後ろくに調整もしていなくて悪かったな。ライン」

その問いに答えるように横に設置された通信用ディスプレイにラインが姿を現す。

『いえ。カツラギ様からインストールしていただいた自己調整ソフトもありましたので、大丈夫です』

「そうか……」

『どうされました？』

いつもと様子の違うシユンを不思議に思うライン。

『まだ、薬の副作用が残っているのですか？……それでしたら出撃しないほうが……』

「いや、副作用はもうないよ。……空を、見て、ね。思い出しちゃったんだ」

『……アズサ隊長閣下の、ことですか？』

「……うん」

それを聞いたラインは懐かしそうに目を細める。

『……本当に懐かしい。あれから……もう十年も経ったのですね』

「ライン……」

『ご心配なく。理由をつけて通信を遮断しています。聞かれることはありません。私たちが甲板にあがるまでの間だけです』
そう言つと、画面上からラインが消え、別の画像が移る。

銀色の塗装を施し、バズーカ砲を高々と掲げたMTをバックに撮られた集合写真のようだ。

しかし、よく見ると皆とても若い少年少女たちだ。甘く見ても12、3才くらいの者たちばかり、若すぎる彼らには似つかわしくない軍服を着用している。

しかし、彼らは皆、とてもいい笑顔を浮かべている。

その中心にいるのは二人の少年と一人の少女。

一人の少年はシュン。

思わずこちらがその表情をみて吹き出しそうになる不器用な笑顔を浮かべている。

もう一人は金髪の少年。

カメラにガッツポーズを決めて笑顔を浮かべている。その掛け値なしの笑顔はその少年の明るさと人の良さを現しているかのように見える。

そして……その真ん中で本当に優しい笑顔を浮かべている少女がちょこんと存在している。

自分で染めたのか、それとも地毛なのかは不明だが、桜色の流れるような長髪。

寝相の悪い彼女。そのおかげで寝癖のついた部分が逆方向にカール

している。

しかし、他人からはだらしなく見えるはずのそれが何故か彼女には似合っていた。

写真越しにシユンを見守る優しい瞳。それは磨き抜かれたガラス玉のように透き通り、悪意など一片の欠片もない。
その純真無垢な瞳が写真越しにシユンを優しく見守っていた。

「……こんな記録、よく残ってたな。あの戦いの後、俺たち個人の記録は全て削除されたはずだろ？」

『私が研究に協力した代償として……企業に密約を交わし、残せました。マスターの……大事な思い出、ですから』

「……みんな、あいつ、そしてアズサ隊長……」

『敵MT隊、最終防空ライン突破！陸戦部隊！近接対空用意！！』
もの思いにふけりかけていた矢先、格納庫に敵機襲来を告げる放送が鳴り響く。

『シラミネ小隊！昇降機が空きました！直ちに甲板へ』
ようやく順番がきた。

シユンはすぐにスオウを昇降機に向かわせる。

「聞いたとおりだ。全機速やかに甲板に向かえ！」

シユンが甲板に上がった時には戦闘が始まっていた。

先に甲板に上がっていた友軍機がけたたましい音を立てながらマシンガンを敵と思われる飛行MTに乱射を続けている。

『2時の方向、敵機3、接近！』

オペレーターがそう言うやいなや銃撃を続けていた友軍機に銃撃の火花が散る。

穴だらけになったMTはゆっくりと倒れ伏し、瞬間、爆散して甲板や周りの友軍機に破片をまきちらした。

すれ違いにずんぐりとし、至るところに武装を施した敵機が横一線に飛んでいく。

敵の正体はMTS-6、

通称スカイウォーカーと呼ばれている陸軍第二世代駆逐用空戦MTスプードこそ鈍速だが、それを補ってあり余る重装甲、重装備を施した第二世代を代表する機体の一つだ。

それらが数を揃えてこちらに突っ込んでくる。

対抗するヒラギを中心とした防空戦隊が専用ライフル、空対空ミサイルを駆使して応戦しているが、数が多く苦戦している

皮肉にもこの海戦が初めての空戦MT同士による戦闘記録となった。

程なくして防空網を突破した十数機が射程に入る。

『各砲座！撃ち方、始め！！』

拡声器越しに響く、司令官の声に合わせ、空母を囲むように展開していたイージス艦や滑走路のMT群がミサイルや機関砲が敵を打ち砕かんと叫びを上げて敵に向かっていく。

「各員、射撃開始!!」

シユン達も号令に合わせ所定展開位置からライフル、機関銃で応戦する。

針の穴を通すような激しい対空網に瞬く間に数を減らしていく敵機。しかし、生き残った数機が水面ぎりぎりの低空軌道で接近、両肩の十六連装ミサイルをイージス・空母群に轟音を響かせながら放つ。

『ミサイル!迎撃!』

キサラギの左舷に展開していたイージス艦が対抗するようにC I W S（近接防御兵器）で集中砲火を浴びせる。

刹那、誘爆を起こしたミサイルが数多の爆炎を空に咲かす。

しかし、C I W Sだけでは全てを破壊するに至らず、生き残った二基のミサイルがイージス艦に吸い込まれていく。

一つは後部格納庫付近、しかし一方は船体中央に命中。

その瞬間、先ほどとは比べものにならないほどの爆発が起き、船体が真っ二つに割れた。

『くそ!……イージス巡洋艦轟沈!』

通信機から聞こえる通信士の怒声と共に衝撃波が機体越しに伝わってくる。

それを感じた時、甲板にいたほとんどのパイロットは愕然し、銃撃が一瞬止んだ。

それを我に帰したのは数機のM Tが放つ銃撃音だった。

「……ライン。戦況はどうなっている？」

殆どのパイロットが動きを止めた中、その衝撃波を感じながらも、シユンは冷静に敵を見据えライフルで狙い撃つ。

『戦力としてはこちらが優位となってはありますが、……先ほどのリユーグの轟沈で艦隊全てが浮き足立っています』

駆逐艦クラスならまだしも最新鋭の装備を施したイージス艦が一瞬の内に沈んだのだから無理もない。

『今の状態が続くと危険です。負けることは無くとも、勝つこともできません』

このままでは消耗戦になり、キサラギ自体いつ沈むかわからなくなってしまう。

「ライン……。MT一機分損害を与えず、乗り移れる艦はどのくらいある？」

その問いに、何をしようとしているのかわかったラインはしばらく沈黙した後、ため息をつく

『……空母群なら全て、周辺展開している残りの艦ではイージス艦^{ラシエン}、（ヒエイ）、ヘリ搭載駆逐艦^{シュウカイ}、（ラグレイト）、（モントーヤ）、（ヨーツン）。以上なら何とか大丈夫です』

「……よし、システムを使う。起動頼む」

『また…使用なさるのですか？』

「味方の犠牲を少なくする為だ……頼む」

強い意志を感じる瞳のシュンを見て、苦悩の表情を浮かべるライン。
一瞬の躊躇いの後、意を決してラインは頭を上げる。

『……わかりました。（プロフィット）起動します』
その瞬間、痛みと共に目に映る全ての光景が変わる。

「……さて、八艘飛び。やってみるか」

スオウの銃撃で我に返ったイチマサは状況を慌てて確認していた。

「……リユーグがやられたせいで士気が落ちてやがるな」
このままだと迎撃できずにまたいくつか艦がやられるな、と冷や汗をかく。そのいくつかには自分の乗るキサragiも含まれている。

『イチマサ。聞こえるか？』

その時、通信機からシュンの声が聞こえてきた。

しかし、いつもの声音ではない

「隊長か、どうした？」

異変に気づきながらも冷静を装い返事を返す。

『オレは敵を落としてくる。対空迎撃の指揮を頼む』

「落としてくる……っておい！どうするつもり……」
そう言いかけた時にはスオウはスラスターを噴かして、敵機に急接

近していく。

慌てたのは敵パイロットだ。

甲板上から対空砲火を撃ち上げてくるだけだと思っていた陸戦MTの一機が甲板を捨て、こちらに向かってくる。

旋回して難を逃れようとしたが遅すぎた。

至近距離まで接近したスオウから放たれる対戦車ライフル弾に流石の重装甲も耐えきれず、ジュネレータに致命傷を与えた。

落ちていく敵機

しかし、それと同時にスオウも落下を始める。

それもそのはず、陸戦MTであるスオウに空を飛べるはずもなく無理にスラスターを使用しただけで飛行能力はない。

『隊長!!』

ハヤテの叫び声が聞こえる中、シュンは冷静に次の動作を行う

一旦停止したスラスターを再点火し、落下しながらも目標に向かう。

敵機ではない。

味方イージス艦^{ラッシュン}に突っ込んでいた。

強い衝撃音と共に難なく後部甲板に着地するスオウ。

驚きを隠せない周囲の人間に構わずスオウは新たにスラスターを噴かして生き残った敵機に向かっていく。

それを数回行う頃には、敵の姿はほとんど消えていた。

残った敵も離脱していく。

「何とかなった……」

駆逐艦^{モントヤ}のへり発着甲板にてその様子を見たシユンはほっとしたようにため息をつく。

『無茶をしすぎです』

呆れたように呟くラインに苦笑しながら、エネルギーの残量を確認する。

「残量はまだ余裕だな。帰るとしますか」

機体をキサラギに向け帰投しようとスラスターを起動した瞬間
「っ……！」

強い殺意を感じたシユンはすぐさま機体を海上に上げる。

刹那、モントーヤから大量の爆音が響き渡り、炎が艦を包み込む。

『ちっ！！逃げんなよな！！』

通信機ごしから罵声を浴びせられる。

メインカメラを上空に向けるとそこには朱色を施した空戦MTが三機存在していた。

その内の一機が大型のランチャーガンをこちらに向けている。

イージス艦^{ヒュイ}の甲板上に乗り移ったシユンはその三機を見据える。

『だがな……。ラッキーは二度も続かないぜ！！』

戦いは、終息には程遠い位置にあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9902a/>

Gerechtigheit ~ 正義のカタチ ~

2010年10月10日17時38分発行